

# ブロンズ像

飯田 芳



カット 後藤 必

私は今静かな思いでこの手記を書いています。あの男に読んでもらいたい為に。

その男の名は嵐山十五。日本文化としての小説や詩や短歌などの衰退の流れに立ち向かい、同人誌等を通じてその底辺を拡大させ再びの隆盛を極めんと、更にはもはや弊害としか言いようのない出版業界の流通の在りかたまで変えようとする人物。その先鋒にあるのが彼の出版社で出している「文芸潮流」という雑誌。

もう七十歳を過ぎていると聞きましたが、広がりを見せる額と薄い頭髪を除けば、目尻を下げ唇の端に微笑みを含んだ表情は優しげで若々しく、まるで慈しむ笑顔で孫を見るような、そんな写真が雑誌の随所に見受けられます。弟に言わせれば、我々小説を書く者にとつては力強く差しのべられた手のような存在だということです。

その弟が自殺を図りました。仕事の途中の私服や昼食の時に必ずといって良い程に使用していたお気に入り場所でした。弟はそこに軽のライトバンを止めました。発見当時マフラーにはホースが突つ込まれ、排ガスの漏れを防ぐようにアルミのテープが幾重にも巻かれ、その反対側の先端は僅かに開かれた助手席の窓に入れられ、隙間はダンボールが当てられていたそう

です。窓やドアは布テープで目張りされ運転席側は内側から貼られていた、と聞かされました。そうして弟は母が常備薬としていた睡眠薬と精神安定の錠剤の総てを胃に流し込み、エンジンにスタートさせたのでしよう。

弟はもう何十年も大手配送会社の宅配の委託業務をしておりました。毎朝NHKの朝の連続テレビドラマを見ながら食事をし、終えるとそのまま出掛けます。会社に着くとその日配達分の荷物を受け取り、コースを考えながら車に積み込むと一日の始まりです。担当のエリアは変わる事は有りません。得意先の会社や住宅など一度憶えてしまえば余り地図に頼る事もありませんし、数か月も回れば各家庭の家族構成やライフスタイルも判ってきます。それらの事を考慮に入れたルートを組みれば気楽な仕事だと申しております。

その仕事によく走る県道は海岸沿いを、時には近付いたり離れたりにしていました。街中を走っているかと思えば急に建物の中から海が見えたり、流れ込む川を渡ると大きな球形のガスタンクがあつたり穀物サイトが並んでいたり。船溜まりには小型の船舶が縁を寄せ合って停泊しています。やがて豪華客船も横づけ出来る埠頭が現れます。そこを過ぎると今度はコンテナが

積みまれフォークリフトやトラックの出入り、そして倉庫の壁。

しばらく走ると急にグラランドの広がり。早朝や休日には野球やソフトボールに興じる人。そのグラランドの横に輪立ちだけの、軽自動車がようやく通れる程の踏みつけられた道が伸びています。フェンスと背の高い雑草の間を抜けると防風の為の松林が有り、その先には海が見えます。突き当たりの膝小僧程の低い防波堤、その辺りが少し開けていて弟はそこに車を停めます。防波堤から身を乗り出して下を覗くと、荒れば波で隠れてしまうほどの石塊だらけの狭い海岸。太陽と海水に晒された白い肌を見せる流木、光沢を失ったベクトボトル、異国の文字の書かれた日用雑貨。あるいは打ち上げられ、あるいは波に弄ばれるように沖に引いたり浜に寄せられたり。

弟は晴れた日にはその防波堤に腰掛け、天気の良い日や寒い日などはライトバンの荷物を押しやってスペースを作り、そこでインスタントラーメンにお湯を注ぎ、私が目にしたおにぎりを二個、海を見ながら松風の音を聞きながら食するのです。最初の頃、弁当を作ろうか、という事も言いましたが、この方がちよつとした野外の雰囲気味わえる、ともう何十年も続いて

いる習慣です。そしてその場を弟は死に場所を選んだのです。

父は自転車店を営んでおりました。名は「飯田自転車商会」そこは軽自動車がようやく擦れ違う事が出来る程の狭い道幅の商店街です。商店街とはいっても普通の住宅が軒を並べるその間に店が割りこんだ形であります。それでも魚屋が有り肉屋が有り、昔は駄菓子屋で今は横の僅かなスペースで煙草も売っています。ほとんど剥げ落ちた看板に「ゴールデンバット」の蝙蝠が張り付いています。時計店が有り呉服屋まであります。近所の連中が顔を見せる以外、これといった客の姿を見た事はありませんが、それでも昭和の四十年も後半頃までは人通りもそれ相当にあり、一往復もすればその日の夕食の準備は総て整いました。そんな通りの入口に我が店はあったのです。

元来人に指図されたり時間に縛られる事の嫌いだつた父は、それまで勤めていた小さな商社から独立という形で自転車店を開いたのです。まだ車もそう普及していなかった時代です。運搬用の自転車やリヤカーはテレビや洗濯器などと共に面白い程売れたと父は自

慢気に笑います。今でも店から溢れる程に並べられた自転車のホイールやスポークの輝く銀色が思い出されます。

やがて父は近所のお節介なおばさんの紹介で母を娶りました。当時としては三十過ぎの遅い結婚でした。そして私が産まれ、その五年後に弟が産まれたのです。背が高く痩せぎすな父は良く女性にもてたそうです。人当たりも良く特にお客に対しては殊更の事で、豪快に笑うその声は一層の好感を与えたようです。しかし一度家庭に入ると無口になります。彫りの深い鼻筋の通った少し頬のこけた細い顎、眼光鋭く睨みつけるような目つき。ただでさえ怖い印象が何か気に喰わぬ事があるとさらに表情を強張らせ、激しい口調で家族を怒鳴りつけるのです。いつも私達三人は父の顔色を窺う毎日でした。対する母は小太りで背も低く、父以外の人とは愛想よく丸い顔を一層ほころばせて話に笑いを絶えず添える人でした。姿似は私はどちらかというと父親似で弟は母親似と良く言われます。父の性格が遺伝しなかったのが私にとつては幸いです。

そしてその被害を一番に被ったのが弟でした。弟のどこが気に喰わなかったのでしょうか。私には単に自分の苛立ちの吐け口を弟に向けていたとは思えないの

ですが。すぐに頭ごなしに開口一番、誠一「大体お前はな、と口の端に泡を作って叱るのです。弟はただ身をすくめ俯くしかありません。時に母が、お父さんいい加減に、と口を挟もうものなら、今度は逆に母の方に、お前がそんな風だから、と喰って掛かるのです。結局二人並んで背を丸める姿が日常的に見られました。いつしか弟は父の目から逃れるように食事が終わればすぐに二階の自分の部屋に籠るような子になりました。学校ではどうか知れませんが快活を失ったような子供でした。私はなるべく二人の部屋を隔てる襖を開け放つようにしておりました。私は何故か父に怒鳴られた記憶がありません。最初の女の子だったから異性の父にすれば可愛かったのかも知れません。一度母の愚痴った言葉が忘れられません。幸子って名は馴染みの飲み屋の女の名だよ。

私はその後看護専門学校に入り憧れの看護師になりました。問題は弟でした。

「長男が家業を継ぐのは当り前の事だ。自転車屋はパンクの修理とブレーキの調整さえ覚えておけば充分。学問など必要ない。中学を卒業したらすぐに家の仕事

を手伝え」

とそれが口癖でした。高度経済成長の最中、世の中は高校は当り前のような時代でした。さすがに母も、そして近所の人達も総出でどうにか弟を高校へ行かせる事が出来ました。ただし授業料の安い、しかも交通費の掛からぬ近くの公立の高校。春や夏の長期の休みの時は店の手伝いをする事。卒業後は店を継ぐ事が条件でした。弟は市立の高校に入学しました。そしてその三年間クラブに入る事もなく授業を終えると真っ直ぐに家に帰り父の仕事を手伝い、春や夏の休みは朝から夕方まで店で働いたのです。いつも父の怒鳴る声に店に限らず家中に、そして道路にまで響いておりました。まだそんな事が出来ないのか。何度同じ事を言わすんだ。弟はその度に身を締め口を噤んでおりました。ただ慰めるだけの母と私でした。

父は早くから車の免許を取りました。弟も学割を好条件と早々と教習所へ行かされました。軽トラックは「飯田自転車商会」にとっては必需品になりました。販売範囲が広まったのです。それは私にとっても有り難がたい事でした。その頃私は大きな総合病院で三代の勤務に携わっていたのです。朝早い出勤の時もあれば夜半の暗闇に帰る時もありました。そんな折弟が

時には父が車で送り迎えをしてくれたのです。自動車は本来に便利なものでした。しかしその便利さが逆に自転車にとっては脅威となったのは皮肉なことでした。

市電が廃止されバスが替わりを務め会社や住宅は郊外に広がり、それに連れ自家用車での通勤が当り前のようになりました。自転車の用途は学生の通学用か家庭の買い物の足替わりになっていきました。そんなある日商店街に、勿論「飯田自転車商会」にとつても激震が走ったのです。すぐ近くにショッピングセンターの建設が知らされたのです。日に日にその規模やテナントの詳細が判る度に商店街の店主は不安気に集まり対応に追われました。しかし小さな個人の店ではなす術もなくショッピングセンターの計画は着々と進められたのです。

そのショッピングセンターのオープン当日、上空にはアドバルーンが上がりチンドンマンが練り歩き駐車場には車が溢れ、家族全員連れだって浮き足立ち子供達には風船が配られ大盛況の混雑振りでした。父も早くから商店街の面々と敵状視察に出向きました。そして帰ってくるなり父は問屋に電話を掛けると受話器に向かつて怒鳴り始めました。

「一体全体どうしてあんな安い価格で販売出来るん

や」

それは自転車屋だけではありません。すでにチラシで、しかも開店セールという事でやたら安い値段が付けられた食品衣料、日曜雑貨。実際に目の当たりにすると商店街の人達は黙し項垂れました。到底太刀打ち出来ない。結果はすぐに現れました。ただ日々の生活に必要な魚屋や肉屋はそれだけを求める客もいて、又昔からの御ひいきもありましたが、自転車はそういう訳にはいきません。その影響は大きなものがありました。特に年に一番の稼ぎ時の春の進学シーズン。例年休み返上の「飯田自転車商会」は閑古鳥の鳴く始末でした。

父はパンクや修理など他店で買った物には対応しませんが、と対抗したりしましたが所詮事態が好展する事もなく仕事は減るばかりで、結局は時折入るパンクの修理や中古の自転車を引っ張り出して整備したり。しかしそれらは大人二人が一日掛かってする仕事の量ではありません。当然売上は毎月減少の一途でした。

そのような状況の中、時折部品等の配達に来ていた運送会社のドライバーが暇そうにしている弟に宅配の委託の話を持ってきたのです。景気の上昇と共に会社

関係の荷物は勿論個人宛の荷物も急激に伸びてきた頃です。一個配達して幾ら、車とガソリン代は自分持ち。時間は午前中だけでも良いし、丸々一日だって構わない。弟には願ってもない事でした。その気持ちは私でなくとも判ります。誰が四六時中苦虫を噛みつぶしたような顔をして文句しか言わぬ父と顔突き合わせていたいでしょう。ようやく弟は仕事上での父親から解放されたのです。

そんな弟がいつ頃から小説を書き始めたのか私には憶えが有りません。弟は小さい頃から父に怒鳴られ何かしようにとすれば頭を押さえられ、どこかいじけたような性格の子に育ちました。友達と遊ぶ事も少なく、恐らくは同級生の女の子とも碌に会話も出来ぬ子だったでしょう。いつしか静かに本を読む性格になっていました。幸い我が家には単行本が山程有りました。総て母が持ってきた物です。読書好きの母は若い頃から暇さえあれば一日中でも読みふけた、と言います。小振りの柳行李二つにぎっしり詰まった雑読本。母は嫁入り道具の中に紛れこませ持ち込んだのよ、と笑います。ただ父の性格上結婚してからは本を開く事は余りなかったそうです。父は女が小説など、と馬鹿にし、あまつさえその総てを捨てようとまでしたそうです。

ですから弟も父の目を盗んでは読んでいたそうですが、恐らくそこには母と子の父に対する秘め事としての喜びがあったかも知れません。

その日夜間勤務で疲れ果てた私は帰るなりすぐに寝入ってしまいました。目を覚ました時は窓の外が赤く染まっていました。頭はまだ時間の感覚さえ臆で、許されるならもう一度布団の中に擦り込みたい気分でした。その時部屋を隔てる襖が静かに開き弟が、お姉ちゃん起きた？ と顔を覗かせたのです。あるいは私の起きる気配を待っていたのかも知れません。それは何時にない行動でした。私は只ならぬものを感じ髪を撫でつけながら、どうしたの？ と尋ねたのでした。

恐る恐るといった態で入ってきた弟は、これ読んでほしいんだけど、と隠すように持っていた紙の束を差し出しました。升目状のそれは一目見て原稿用紙である事が判りました。最初の用紙の右端に大きな字で「蓑」と書いてありました。その下に「飯田誠一」の名。

「なに、これ？ 小説？」

私は尋ねます。弟は小さく頷くと消え入るような声で、処女作、と少し赤らんだ顔で答えます

「私が読むの？」

と原稿用紙に目を落とし表紙を捲くつてみます。升目の中に小さく角ばった文字。読みづらい。姉ちゃんしか読んでもらえる人いないから、弟は目を伏せます。弟にとって小説は読むものとはかり思っていた私は、ただ意味もなく小さく丸まった弟を見詰めました。高校を卒業すれば否応なく父の元で仕事をすると結論付けられていた弟の、それが唯一の趣味だったのかも知れません。

「すぐでなくていいから」

そう言つて私の方を見詰めます。困つたな、というのが私の咄嗟の思いでした。小説など読む時間がないし、第一私は読む事が苦手なのです。でも弟は上目使いに恋うような視線を投げ掛けます。

「慌てなくていいのね」

私は念を押します。弟は頷きます。私は、判つたわ、と兎に角笑顔を作りました。

翌日の朝、顔が会うなり弟は周囲をはばかりするような小さな声で、呼んでくれた？ と囁きます。え？ 慌てなくても良いと言ったじゃない。心の動揺を抑え、御免、と謝り思わず、今日中に読んでおくね、そう返

事をし後悔します。仕方なく私は今日すべき用事を後廻しにし、原稿を手に取りました。

三途の川の渡し守と彼岸に渡ろうとしない女郎の話です。心中した相方が来ないのを待ち侘び、探しに来た鬼の眼から逃れる為言葉巧みに渡し守をその気にさせ、着ている蓑の中に隠れる、という粗筋です。

これって？ 小説を読んだ事のない私にとってはどう言ったら良いのか。夜も更けて私が二階に上がった気配を察して弟が襖を開け顔を覗かせます。

「姉ちゃん、読んでくれた？」

私は生返事を返します。

「どうだった？」

仕方なく、面白かったよ、と答えます。

「いいだろう」

私は笑顔で頷きます。満足気な弟の顔。それだけで私は充分だと思いました。ところが日をおかず二作目三作目。

「ね、いいだろう」

考えてみれば弟の読者は私一人しかいないのです。母に渡せば父に見つかる可能性はある。高校卒業と同時に店と住まいと一緒に生活の為か、ただでさえ少な

い友達も交流が疎遠になっている。近所の小父さん小母さんはもつての外、変な噂になりかねない。

そこで困り果てた私は同僚の父親が国語の先生である事を思い出したのです。すぐに事状を説明しました。正直困ってるのよ。同僚は困惑する私の表情を楽しみながらそれでも、一度原稿を持って遊びにいらつしやい、と言う吉報を届けてくれました。弟は早速次の日曜日勇んで出かけて行きました。そこで同人誌というものがある、という事を始めて知ったのです。

文芸同人誌「遡上」 生命のサイクルに欠かせない魚達の生死を賭けたダイナミックな行爲。文学に関わらず日常の生活においても学び取る要素は大きいのではないか。という趣旨で名付けられたとか。弟が貰って来た雑誌は六十余号を記していました。顔ぶれも様々で、学校の教師から新聞や放送関係の人、既に退職した人から現役のサラリーマン。勿論主婦の人もいて、ただ皆さん年かさの人ばかりで、弟はその時三十半ばでしたが一番若い年だったそうです。それでも弟は同人になりました。自分の作品が活字になる。しかも読者はもう姉一人ではない。その張り切り様は今迄に見せた事の無いものでした。

その時の事です。弟が、今度漸く作品が載せてもら

える事になったんだけど、ペンネームどうしよう、と真顔で問い掛けてきたのです。

「ペンネーム？ 本名じゃ駄目なの？」

「他の人に小説を書いてるって知られたくないから」  
たかが同人誌、どれ程の読者がいると言うのだろう。ましてや弟の作品を同人以外の人が読むチャンスなどあり得るのだろうか。それでも弟はまるで小説を書いている事が気恥しいような態度に終始します。なら書かねば良いのに、書いても発表しなければ良いのに。でも作品にした以上は・・・。

「そうね・・・。そうだ、いつもの貴方の口癖の、いいだろう、にしたら。飯田の名前も生かされるし」

「いいだろう？ 俺そんなに言ってた？」

「うん、しつこい位に」

私は思い切り相槌を打ちます。

「いいだろう、か。いいかも知れないね。いやそれがいいだろう」

弟と私は顔を見合わせ笑います。作家「いいだろう」の誕生です。

既に「飯田自転車商会」は商売とは言えない状態で



した。父は朝早くから海釣りに出掛け、日中は母からせびった金でパチンコや平日割安のカラオケ店に入り浸り、夕方からは近くの一杯飲み屋で近所の連中と騒いだり、といった生活でした。弟は依然から小遣程度しかもらっておらず、それさえも余り使う事のない生活をしていた為か委託で得た収入を殆んど母に渡ししておりました。無論私も生活費を入れておりましたので、どうやら毎日の生活は確保されておりました。

やがて弟の作品も書けば必ず同人誌に載るようになりました。それでも並ぶ作品群の最後尾が弟の定位置で、巻頭を飾るなど思いもよらぬ事でした。それでも弟は書き続けます。逆に言えばその事しか没頭する事がなかったのでしょう。当然生活時間も替わりました。それまで続けていた夜間配達は止め六時頃に帰宅します。風呂へ入り食事を終えたと八時頃にはもう床に着きます。夜中三時には起き机に向かい小説を書きます。時折本を読んだり音楽を聞いたり。八時になると下に降りNHKの朝の連続テレビドラマを見ながら朝ご食をたべ、仕事に出掛けます。父の目を気にしながら店の隅でいじけたように仕事をしていた頃の姿はもう微塵もありません。父も息子が愚にもつかぬ小説を書いている事は薄々知っていたでしょうが、逆に母からせ

びる金が弟や私から出ているとなつては口を閉じるしかありません。

大きな変化もない毎日が季節が変わっても同じように繰り返されていきました。そんなある日の午後でした。病院の通出口を出ると弟が立っていたのです。普段なら配達に忙しい時間帯です。小さな不安が生じました。

「どうしたの、何かあったの」

弟は真剣な表情を前方に向けたままで、お母さんの様子がおかしいんだ、と答えます。

「おかしいって？」

「うまく言えないんだけど」

いつもは大人しい運転が今日に限って黄信号でも交差点を通過します。ブレーキ操作も荒い。

弟に急かせられるように家に入りました。居間から台所に続く戸口で立ち尽くす父が私の方に不安げな表情を見せました。私は目で問い掛けます。父は台所の方に顎をしゃくり目を泳がせます。私は身を避けた父の横に立ち台所を覗きます。母が背を丸め椅子に座っています。私の存在に気付くと母は弱々し気な視線を向けました。

「ああ、幸子。ごめんなさい、私食事の用意どうして  
よいか判らなくなっちゃって」

どこか表情が虚ろです。

「今朝からずっとこの調子で」

いつになく父の声も小さく、私の方を向きません。

私も哑然と母を見詰めるだけでした。

朝早くいつも釣りに出掛ける父と母の間でひと悶着  
あったそうです。父の怒鳴り声と同時に茶碗の割れる  
音が二階の弟の部屋まで聞こえたそうです。慌てて下  
に降りると肩を怒らせて店を出る父の姿が見えたそう  
です。台所を覗くと母が割れた茶碗の欠片を一つ一つ  
左の手の平に積み重ねている姿がありました。弟の存  
在に気付くと涙声で、誠ちゃん、朝ご飯コンビニでお  
願いね、と言ったきり手に乗せた欠片をジッと見詰め  
ていたそうです。その姿に心配になり弟は傍にいて何  
呉と声を掛けるのですが母はただ放心したように、ご  
飯がご飯が、と繰り返すだけ座ったきりの状  
態だったそうです。

医者の説明によれば、父との喧嘩による衝撃があま  
りにも強すぎて脳のほうが自己防衛で神経の一部を遮  
断したのだろう、一時的なものですから時間と共に回

復します、と言う事でした。しかし母の症状は一向に  
回復しませんでした。それどころか食事の用意だけで  
なく掃除や洗濯など家事の一切をしなくなつたのです。  
脳のCTスキャンの結果脳そのものには異常は見当た  
らなかったがかなりの空白箇所がある、と言う事でした。  
医者は初期のアルツハイマー型痴呆症とカルテに  
書き込みました。

こんな時父も弟もまったく役に立ちませんでした。  
この間の二か月余り、家の中は軸のすり減つた歯車を  
無理矢理回すようなものでした。福祉行政の人の認知  
度面接、ケアマネージャーと通所介護施設の選定。そ  
れらをこなしながら私は朝から晩まで家族の世話。結  
局私は勤めていた総合病院を辞めました。小さな恋の  
破局と共に。

ようやくそれなりに落ち着いた中、父は変わりました。  
私達には未だに母との争いの事は口に出しません  
でしたが事の起こりが自分にある、という自責の念も  
あるのでしょうか、早朝の釣りは止め私が用意した母  
の下着などを詰めたバックを持って通所介護の迎への  
バスを待ちます。施設の人に、よろしくお願いします、

とバックを渡し母を見送ります。その後は古びた自転車が二台程置かれた広々とした店の隅の、表面に細かく罫の入ったソファに座り新聞を読んだり、どこからか持ち出したポータブルのテレビを見たり。そして近所の仲間を待ちわび将棋に興じたり。なにしろ財布は私が握ってしまいましたから。

弟は今迄通りの日常です。私は個人経営のクリニックの朝から夕方までの仕事をしました。母の痴呆の進み具合は緩やかなもので、変化の乏しい日が続きました。そんなある日帰ってきた私を待ち構えていたかのように弟が飛び出して来たのです。私の、今日の配達どうしたの、と言う言葉を遮って笑顔を見せました。目の色が違います。いつになく鼻孔が広がっています。重い口が一気に捲くし立てます。

「お姉ちゃん、まほらま賞って知らないよな」

聞いた事のない言葉です。当然、何それ？ と尋ねます。

「文芸潮流って文芸誌があって、その代表の嵐山って先生が選考している賞なんだよ」

弟の早口など滅多に聞く事は有りません。それ程までに興奮しているのでしょうか。戸惑っている私に苛立

つように、兎に角凄い賞なんだよ、と付け加えます。

「そんなに凄い賞なの？」

弟は顔をしかめます。

「いいかい、そこに全国の同人誌が集まるんだよ。それを嵐山先生が全部読んで、年間の総括としてまほらま賞を決めるんだよ。だからその年の同人誌に載った小説のナンバーワンって事なんだよ」

「ふーん、その人が全部読むの。大変ね、で？」

「その候補になったんだよ、僕の作品が」

にわかには信じられない事です。雑誌が出る度に弟は私に、読んで、と持ってきます。さすがにこの頃では、いいだろう、とは問い掛けてきませんが、一応の感想は求められます。だから仕方なく目を通します。一体どの作品がそんな大きな賞の候補になったのでしょうか。

「今年の春号に載った『枯れ蓮』という痴呆の母親を殺して蓮田に埋めるやつ。お姉ちゃん、お母さん殺してどういう気、って怒った作品」

思い出しました。まったく関係ない小説なのでしようが思わず我が家と対比して、あるいは弟も母親に対して嫌悪感いやそれ以上の殺意まで抱いているのか、

と邪推し声を荒げたのです。

「昼頃嵐山先生から直接電話があったんだよ。勿論頂けるわけないだろうけど、候補になっただけでも大変な事なんだよ」

余りの勢いに私は、それは良かったね、と答える事しか出来ませんでした。夏の終わりの蒸し暑く気だるい夕方の事でした。

その頃になると母は紙パンツを使用しておりました。朝起きると真っ先にそれを取り替えます。ズシリとした重さを感じます。朝食の用意をし、おにぎりを四個。二個は弟の昼食用、もう二個は父用。次に母の食事。

横に付きながら今日のデイサービスに持つて行く下着などを用意します。まだ自分で箸は使えますが、次第におぼつかない動きが気になります。ゆつくりとした食事の後ニコリと笑って、ごちそうさま、おいしかったよ、の言葉が救いです。洗濯物を干し、私自身の準備もあります。後は父と弟に任せるしかありません。

クリニクの仕事を終え帰ってくればすぐに夕食の支度です。父は何一つ手伝う事はしません。せめて自分の食器位は洗って欲しい、と思うのですがもう小言は尽きました。そんな毎日です。弟の「まほらま賞」の事などすっかり忘れておりました。ところが、

「お姉ちゃん、俺の作品、最優秀賞だつて」

今にも喰らいつきそうな勢いです。そんな弟の姿を呆気に取られ見詰めます。

「なに？ 一体なにがあったの」

「だからまほらま賞だよ。一等賞だよ」

ようやく弟の作品がそのような賞にノミネートされていた事を思い出しました。でも急には信じられぬ事でした。弟自身も候補に残っただけで満足だ、と口にしていましたから。

その後嵐山先生から何の連絡も有りませんでした。

—もしかしたらあの電話人違いじゃない？—

—あの時は俺の聞き間違い？—

弟は時折私に不安を洩らします。私は、そんなに気になるのなら一度電話してみたら、と笑います。それでいて私自身も小さな疑念を持ちます。合評会でも絶賛された事のない作品ばかり、と本人はいつも頭を抱えています。やっぱり間違いかもしれない。秘かに思ったりして。

でもようやく授賞式とパーティーの案内状が届いて、今度はどんな服装で出席しようか、と一騒ぎ。思えば高校を卒業してすぐに家業の手伝いに入ったものです

から成人式の時に買った背広一着限り。しかもそれは中年の体格には合わず、結局お祝いと買いに急ぐ始末。そして名刺。同人のお仲間から、いろんな人から挨拶があるだろうから名刺を用意しておいた方がよいよ、と言われたそうです。どうせ作るなら、と何種類ものデザインが私の前に並べられました。弟にとつては正に生まれて初めてといって良いほどの大きな祝い事だったのです。

日が近付くにつれ弟の緊張は増します。せっかくの東京だから二泊か三泊して遊んで来たら、と言え、俺東京初めてだしどこへ行ったら、と困惑顔。確かに中学の修学旅行は京都奈良、高校の時は九州一周。卒業後は家から外に出た事のない生活でしたから、新幹線は判るけど山手線のホーム判るかな、と言う始末。とても四〇近い男の会話では有りませんでした。行くまでは不安、行けば行ったで不安。帰ってくるまで不安だらけの二日間でした。

それでも弟は夜遅くに疲れた表情で帰って来ました。久し振りに聞く大きな声でした。早速テーブルの上に土産の品が並びます。母は単純に喜びを表わし、父は素知らぬ顔で横目で睨みます。そして表彰状が広げられ、まるで宇宙人の女性のような単純化された立ち姿

のブロンズ像が出されます。そして金一封。母はブロンズ像を抱きかかえ撫で廻します。父は金一封の中身を気にします。私は授賞式はどうだった？ しつかりスピーチ出来た？ 東京見物はどこへ行ったの？ とそちらを気にします。しかし弟はどこか気の乗らぬ返事です。どうも楽しい事ばかりではないような様子でした。それよりも母は余程ブロンズ像が気に入ったのでしよう、中々手放そうとしません。無理矢理奪おうとする弟の手から守るように胸に抱えます。二人の必死の攻防に思わず笑みが零れます。結局その夜は詳しく聞く事出来ませんでした。翌日は弟はいつも通り何事もなかったかのように仕事に出掛けました。仕事先では弟が小説を書いているなど知らぬ事ですから当然といえばそれまでですが。

それでも私に対しては折々に東京での様子が語られました。浅草は大道芸人が幾組も出ていてそれなりに面白かった事。新宿や池袋などは人ばかり多くて中年男性の一人旅はつまんなかった事。そして喰い物の値段が高い事。それよりも何よりも、弟は顔をしかめます。授賞式の前には各同人誌会の挨拶やら年次報告などが有り、その間弟は賢明に頭の中で自身のスピーチを暗唱し続け、台に上がれば緊張のしっぱなしで、何

を話したのかもうる覚えで、さらには急に肩を落とすとその後のパーティーの事を小さな声で話します。

パーティー会場は丸テーブルに六七人程座れますが、結局は各同人誌の仲間内が集まり、主催者の嵐山先生や審査委員の人達も一つのテーブルに陣取り、弟の所属する同人からはどなたも出席有りませんでしたので、第一人話し相手もなく、時折他の同人誌の代表という人が挨拶に来る程度で、勇んで作った名刺も五六枚で済んだとか。ただ黙々と小皿に盛った料理を食べるだけだったと言います。聞けばそんなものかなと思ひ、そんなものだろうなと感じ、ただ社交性のない弟に取っては味気ない時間だったろうな、と思わずにはおられませんでした。

その後特別に変わった事は有りませんでした。同人の人達の反応も格別にはなく、飲み会の最初に、おめでとう、の言葉程度で我が家でも父の顔に遠慮して事もなく、いたって静かなものでした。それでも弟はその賞に後押しされたかのように書き続けました。一年は瞬く間に過ぎました。ようやく受賞後初の作品です。題名は「私とエンゲルス」 恋人からの暴力から逃れ

るべく新幹線に飛び乗った主人公の女性は、以前旅行した金沢で偶然知り合った一品料理屋のおばさんの所に向かいます。そこには「エンゲルス」と名付けられた一匹の雄のジャーマンシェパードがいます。そこで彼女はおばさんや店の人達、そしてエンゲルスに心癒され、本来の自分を取り戻していきます。ただ？

私は最後の部分を読んで思わず心が引いてしまいました。主人公の彼女がエンゲルスと心通わすまでは良かったのですが、小説では身も任せてしまうのです。さすがにこんな行為は物語とは言え許される事なのでしょう。私は動揺します。弟に尋ねます。しかし弟は平然と答えます。

「受賞後の次の作品は特に皆から注目されるからインパクトのある作品でなきや認められないんだよ。それに最近では犬との交接なんか、と言うかそれ位の事文学の中ではごく普通の事なんだよ。南総里見八犬伝って知ってる？ 物語の始めで伏姫は八房という犬の氣を受けて懐妊してるんだよ。別に目新しい事じゃないよ」

—だからと言って・・・—  
同人誌「遡上」に掲載されたその作品は合評会では

可もなく不可もなし。最後の箇所もそう話題にもならなかったそうです。結局弟の作品評価はいつもの如く収まるところに落ち着き、私の不安もそれまででした。

それから半年余り後、事件は起きたのです。弟が私の前に一冊の雑誌を差し出しました。持った手が震えています。思わずその表情を窺います。強張った顔。尋常ではありません。私はその雑誌を手に取ります。

「文芸潮流。ああ嵐山さんのところの雑誌ね」

弟は黙したままページを開き、ここを読めと指差します。「全国同人誌評」これは時折見せられました。送られた同人誌の作品の中から優秀な作品を批評評価する欄です。私は弟の所属する同人誌「遡上」の文字を見ます。あるいは今度の「私とエンゲルス」の作品が取り上げられているのかも知れません。私の胸は期待に膨らみますが、どうも弟の表情が気になります。私は眼を落とします。そして愕然とし弟を見詰めます。「なに、これ？」

思わぬ批評に私も声を荒げます。弟の目が潤んでいるようにも見えます。私は湧き上がる怒りをどう表現していいものか肩先が震えます。それは批評どころかまるで作品そのものを、それ以上に個人の尊厳さえも

否定する文章です。

「これって、あんまりじゃない？ こんな文章いくら自分の発行する雑誌だからって掲載してもいいの？ 侮辱よ、最低だわ」

写真で見えるあの穏やかな表情の嵐山十五の顔が鬼に変わります。私は叫びます。

「誠一、すぐに表彰状とブロンズ像と金一封袋送り返しなさい。賞金の金は私が何とか工面するから」

余りの私の激怒に逆に弟は口籠ります。

「別にそこまでしなくても。ただ嵐山先生は、その・・・、僕の為を思っ・・・、そう、叱咤激励の意味で」

「何が叱咤激励よ。こんなの単に自分の怒りを表わしてるだけじゃないの。なにが『まほらま賞』よ」

「いや、あの『まほらま賞』は・・・、嵐山先生が大事にはぐくみ育ててきた賞だから、だから今度の俺の『私のエンゲルス』は余りにも・・・。その賞の受賞者の作品としては」

「つべこべ言わないで早く持つてらっしゃい。第一あの賞だって誠一が応募したわけじゃないでしょう。あっちが勝手に候補に上げて勝手に、おめでとうござい

ます、つて言つて、それで次の作品が氣に喰わないからつて好き勝手な事書いて」

まるで父そつくりの怒り様です。それは私にとつてはとても嫌な姿なのですが、ただ縋るように懸命に小説を書いてゐる弟の心情を思うと怒りと共にやるせない気持ちに湧き上がるのです。押さえ込む事が出来ません。

結局表彰状やブロンズ像は送り返す事もなく、私の怒りも弟の消極的な、いや逆に嵐山十五を擁護する姿勢に消滅していきました。ただそれまで弟の机の右側の本棚の中央に置かれていたブロンズ像の姿が見えなくなりました。あるいは私が勝手に送り返すのではないかと、と危惧しどこかに隠したものでしょう。正月を迎える準備の最中、掃除もせずにもるでブロンズ像の表面が剥がれるのではないかと思うほど幾度となく息を吐きかけ、真新しいタオルで拭いていた弟の姿が思い出されます。

しかしそれ以後の弟の小説に向かう姿勢は確かに変わりました。襖一枚隔てた隣の部屋。いつも静まり返った向こう側からは圧迫された悲壮な空氣が伝わって

くるようです。時折聞こえる深い溜息、絶望にも似た長い唸り声、今迄聞く事のなかつた心の呻きなのです。弟はあの攻撃的批判に対応しようと、あるいはそこに敵愾心を込めてもがき始めたのです。それまでのまるで鼻歌混じりのように出来上がった作品を笑顔で、いいだろう、と鼻孔を広げるような姿はまったく見えなくなりました。一層無口になり表情も硬く、食事もただ口の中に流し込むだけとなりました。母親の部屋に入り何事かを語りかけ、母親の肩を揉んだり背を撫でたり、それらの行動は何を意味するのでしょうか。母は意味もなくただ笑顔を作るだけです。

小さな事件が有りました。いつも配達に使用している軽のライトバンの右側のバンパーが大きく凹んでいるのです。弟は消え入るような声で口籠ります。

「信号を見落として、そのまま交差点に進入して」

恐らくは書き続けている作品の事に氣を取られての事でしょう。相手の方もたいした事もなく、弟の方も怪我のないのが幸いでしたが、生活全般がうわの空のように思われました。最初は自分が楽しむ為に、次にはただ一人の読者姉の私を意識して、やがては同人誌に入り始めて巻頭まではいかなくとも皆から褒められる為にと書き続けてきた「いいだろう」の作品。それ



があゝの「まほらま賞」で絶頂を向かえ、そして叩き落とされた。元々それだけの実力が備わつての事ではなかっただけに、その後の期待の重さに弟は耐えかねていたのでしよう。

次の号に弟は作品を提出しませんでした。自分の納得いく物が出来なかつたのです。それでも合評会には出席しました。弟は合評会以外に同人の人達と会う機会とはほとんど有りませんでした。それは多分に年齢差という事もあつたでしょうが、それとも弟の存在自体が薄かつたと言う事だつたのでしょうか。それだけに弟にとつては合評会とそれに伴う懇親会は重要なものとなつていたのでしよう。本人もいろいろな人の話を聞くだけでも参考になる、とは言つておりましたが。

いつもは合評会の帰りは皆を起こさぬように、特に隣に寝ている私には一層の心使いで音を殺し二階に上がってくる弟でしたが、今日にかぎつては荒れた荒い足音で、部屋に入つて静かにはなつたのですが、まるで息を押し殺したような気配を感じます。私は布団の中で思わず耳をそばたてます。

翌日の日曜日、弟は珍しく二日酔いだと朝食も取らずコップ一杯の水で済ませ、部屋から出る事は有りませんでした。薄々何かあつたな、と感じていました。

やがて昼近くに一人の女性が訪れました。坂上さんという弟の同人仲間で年齢は五六歳上、あるいは私同年輩でしょうか。入会したのが弟より三か月程早かつた事と何より作品面においては弟と一緒にいつも指摘されるばかりで、それに二人とも余り酒をたしなまないで懇親会では一番末席に並んで座りボソボソと話している、とはにかむように笑いました。初対面の人でした。もつとも今迄に同人の方が我が家に訪れた、という事は一度もない事でした。

坂上さんは心配そうに表情を歪め、ろう君昨夜は大丈夫でしたか、と聞きました。すぐに昨夜の階段を上がる乱れた足音を思い出しました。逆に私の方が、何かありましたか？ と尋ねます。坂上さんは一瞬、やっぱり、と頷きます。

「宴もたけなわの頃、伊與田さんという人がろう君の前に腰を下したんです。この人は同人誌の最初からの古参で昔は結構書いていたらしいんですけど、いつの頃からか批評の方に回つて。ただ動詞がどうだ修飾語の使い方がどうだ、とか重箱の隅を妻楊枝で突くような事ばかり言つて、批評もどこか陰湿で特に私やろう君には悪辣で、大嫌いな人なんですけど。その伊與田さんがろう君に向かつて、今度の「文芸潮流」の嵐山

さんの批評で良く判つたろ、いい気になつてゐるのもそこまでだな。君は云わば九人しかない草野球チームの九番ライトなんだよ。それがどういふ意味か判らう。そこで、試合は九回裏得点は四対一で負けムード、しかし味方は必死で何とかツアアウト満塁までこぎ着けた。ところが次の打者が君、すなわち九番ライトが定位置の君だ。仲間は四球でもデットボールでも、兎に角トップバッターに回してくれ、と祈る氣持ちだ。だがカウントは瞬く間にノーボールツーストライク。相手側は勝利を確信し、味方の中には帰り仕度をする者もいる。ピッチャーは自信満々大きく振り被つて投げました。君はままとバットを振つた。ところがそのバットにボールが、いや逆か、ボールの方かバットに当たつてくれた。ボールは大きく弧を描いて何と逆転満塁さよならホームランだ。皆小躍りして君を迎える。その偶然のホームランが今度の「まほらま賞」なんだよ。しかし浮かれた君は次の試合で四番ピッチャーを希望した。その結果は判らう。所詮九番ライトが定位置の」

とそこまで言つた時それまで俯いて黙つて聞いていた弟が唸り声を發して伊與田という人に掴み掛つたのだという。私は声も無く思わず階段の先を見詰めま

した。余程悔しかつたのでしよう。

弟より早く家を出る私が父から、弟があれ以来配達の仕事に行つていない、と聞かされたのは三四日たった頃だった。用意した朝飯や昼の為の二個のおにぎりは無くなつていたし、日々の忙しさに氣が回らなかつたのだ。私はすぐに部屋を覗いた。弟は私の顔を見ると陰鬱な表情で睨み返した。目が落ち込み回りに限が出来ている。配達休んでいるんだつて？ その言葉が終わるか終らぬうちに、ほつといてくれ、と言う強い言葉が返つてきた。そんな弟の姿を見るのは初めての事だった。私は静かに襖を閉じた。

その晩の事だった。宅配業者のドライバーが尋ねてきたのだ。

「飯田さん、ここ暫く休んでいますけど体の調子でも悪いんですか」

応対に出た私と父は口を濁します。

「休むのは構いませんが無断は困るんですよ」

さも困つた、という表情を作る。私達は、どうも申し訳ありません、と頭を下げる事しか出来ない。

「いつ復帰するかも判りませんか。それによつては

ドライバーのローションを組み直さねば」

とその時だった。言葉を遮るように、判りました、と父は強く頷いた。そして振り向くやいなや階段を駆け上った。二階に姿を消したかと思うと父の怒鳴り声が聞こえてきた。同時に床を踏み鳴らすような軋み音、弟の声が聞こえる。私とドライバーは思わず階段に近付き見上げる。父が弟の腕を取って部屋から引き摺り出そうとしている。弟は腰を引き抵抗する。

「ドライバーさんにしつかりと説明しろ」

両手で握った弟の左手を引っ張る。弟は柱にしがみ付こうとする。構わず父は腰を構える。無理矢理にでも弟をドライバーの前に連れて行こうという算段らしい。

二人は縛れながら階段の付近まで来る。父が声を張り上げる。弟は拒絶する。掴まれた腕を引き抜こうとする。父は綱引きでもするかのように力を込める。その瞬間弟の左腕が抜けた。ふいに支えを失った父が二三歩後によるめいた。そして次の足が階段の縁を踏み外した。父は一瞬弓なりに仰け反った。両手が高々と伸びた。と思ったら腰が「く」の字に身が丸まった。

そのまま階段を転げ落ちた。一回転二回転、大きな音が父の悲鳴と共に回りの壁に響いた。父は首を下に丸

まった形で床に落ちた。潰れたような音がした。そしてゆっくりと横に倒れた。声はなかった。私とドライバーはただ見詰めるだけで動く事が出来なかった。さすがに大きな物音に母が部屋から不安な顔を覗かせた。私は視線を階上に向けた。放心したように立つ弟の姿が見えた。私は漸く我に返ったように、おとうさん、と声を発した。

救急車が来た。父はストレッチャーに乗せられ弟が同乗した。パトカーが来た。私とドライバーは離ればなれにされた。私は警察関係の人達の質問に同じ答えを繰り返した。警察は事故というより事件の方に重きをおいているようだった。母は店のソファアに座り異様に視線を徘徊させていた。近所の人達が入れ替わり立ち替わり覗きに来た。そのうち父の死亡が伝えられた。遺体の引き取り、親戚への連絡、葬儀の手配、そして通夜葬式。総てが慌ただしく行われた。叔父さんが、よく頑張ったね、と言葉をくれた。しかし私はどんな事を言い、どう行動したか思い出せない。まるでチェーンの外れた自転車荷重も反発もないペダルを必死で漕いでいるような感覚。

ただ一つの幸いは私とドライバーの言葉で弟に対する嫌疑が晴れ事故扱いとなった事であろうか。しかし

その原因には確かに弟が関与している。その日から弟は引き籠もった。食事は二階の自分の部屋でとるようになった。余程口煩く殆んどけんか腰の物の言いようでなければ風呂さえも入らなかつた。ただひたすら机に座りパソコンに向かつた。私はクリニックの仕事をサポートに替えてもらった。朝の八時過ぎに母をデイサービスに送り、四時過ぎには迎えに行った。収入は半減したが、それどころではない、といった毎日の生活だった。

四十九日の法要を終えた翌朝の事だった。珍しく弟が母の部屋に入り込み話し込んでいた。無論母との意志は通じない一方的な弟の会話だったのだが、母は笑顔で盛んに頷き持たされたブロンズ像を撫で回していた。久し振りに見るブロンズ像だった。私はそんな様子に少しは弟の気持ちも持ち直してきたのかと思つた。そして昼近く私の職場に警官が現れた。私はパトカーに乗せられ病院へと向かつた。そこで弟の自殺の事を知らされた。

犬の散歩をしていた人が車の異常に気付いたのだと言う。素早くホースを抜き警察に通報した。幸い発見が早かつたので一命は取り留めた。しかし排ガスは脳に相当のダメージを与えていた。退院した弟は元の姿

には戻らなかつた。車椅子に身を沈め仮面のように固まつた表情で食事を取る時以外口を動かす事もなかつた。結局私は二人の介護の為に仕事を辞めざるを得なかつた。途方にくれる中それが最善とも最悪とも判断のつかぬまま私は一つの決断をした。

半島の小さな漁港を見下ろす高台にその介護施設はあつた。白い二階建ての伸びやかに左右に広がつた建物だった。玄関とそれに続くエントランス、事務所が有り調理と配膳を兼ねた部屋が有り、洗濯場には大型の洗濯器や乾燥器がステンレスの輝きを放ち、リハビリ室には各種器具が整然と置かれていた。二階には広いホールが有りそれを囲むように各部屋が並んでいる。利用者は日中ここで食事をしテレビを見、それぞれの時を過ごす。そんな中職員の人達が笑顔で、まるで親しい友人のように接する。そして私が一番気に入つたのはホールから続く、まるで空中に突き出たような広々としたテラスだった。外に出れば百八十度の視界が広がつた。青い空、色の濃薄を織り交ぜながら波打つ海、突き出た岬、白く伸びる堤防、先端にある小さな赤い燈台。足元には係留された漁船の数々。広げられた網、搔潜るように歩く猫。私は即座に二人をここに入所する事を決めた。

同時に私は自宅を売り払った。そして二人が入る施設の近くで手頃な空家を見つけ引つ越した。近所といってもそれは歩いて五分も十分も掛かる距離でしたが、村の人達は皆親切でした。何くれと畑で出来た野菜や自家製の漬物など、漁港からは市場に出せぬ魚類が人々の手を渡つて私の元にまで届きました。さらに幸いな事には二人が入った施設のパートの仕事を頂いた事です。午前と夕方の時間帯。看護師の資格を持つ私は欠員が生じた時の雇用まで約束されました。何より母と弟の様子を見ながら仕事出来る事が嬉しかった。

今日も気忙しい日も充実した日が終わろうとしている。気が付けば真つ赤な夕日が水平線の彼方に半分程沈み込んでいる。波頭が黄金色に輝いて一条の光の帯を伸ばしている。その光の中にテラスに車椅子に座る母と弟の姿がシルエツトとなつて浮かんている。横にいるのが自分の息子だという認識さえ失つた母が笑顔で何事かを語り掛ける。弟は背筋を伸ばし両腕を肘掛に乗せ、その先端をしっかりと掴みながら、大きく見開いた目で陽炎のように輪郭を揺らす夕日を見詰め、返事を返す事はない。それでも母は一人納得したように頷き、絶やさぬ笑顔を同じく夕日に向ける。私はそんな二人の後姿を飽きる事なく見詰める。

こちらに移り住んでやがて半年が過ぎようとしています。ようやく日々の生活に馴染んできたようです。この家を求め慌ただしい引つ越し。その際の荷物は選別する暇もなく大きな物はそのままの姿で、小さな物は手当たり次第ダンボール箱に詰め込み持ち込みました。取り合えずは身の回りに必要な物、それ以外は開いた部屋に押し込みました。

手の空いた時、私は一個ずつ引つ張り出し中身を確認します。必要な物、残しておきたい物。中々事は進みませんが今日も一個取り出します。開きます。弟の物でした。小説の下書きに使ったキャンパスノートの数々、そして私はその中に裸のままのブロンズ像を発見します。そうです、あの「まほらま賞」の副賞に頂いた、宇宙人の女性を思わす、表情のない腕も胸も足もそれと思わす膨らみで表現された像。「文芸潮流」で弟の作品が嵐山先生に酷評され、それを讀んだ私は激怒して思わす弟に、送り返してしまえ、と叫んだ像です。そのブロンズ像は遺書と共に自殺を図った車のダッシュボードの上に置かれていました。もし持っていけるなら彼岸の彼方まで持つて行きたかったのだでしょ

うか。あるいは臉が閉じるまで見詰めていたかつたのでしようか。私はそつと、恐らくは弟も行っていたであろうブロンズ像の滑るような肌を撫でてみます。そして思います。明日弟の枕元の窓辺に飾ろうと。

底の方には白いノートパソコンがありました。私が以前使っていた物です。弟が小説を書き始めた頃はまだ原稿用紙の時代でした。何度も何度も書き直し破り捨て。それがワープロに替わりました。画期的な事でした。書き直しも構成も指の操作だけで出来るのです。しかし時代の流れは早くパソコンがあつと言う間にワープロを押し退けました。当時は父の元で仕事を手伝い小遣い程度しか貰えなかった弟にとつてパソコンは高根の花でした。私のお古は操作も教えられます。弟にとつては有り難い物でした。以後ずっとそれを使っています。

私は蓋を開け起動させます。懐かしい緑の草原の画面が現れます。ワードだけの機能ならこれで充分です。マウスを動かしマイドキュメントをクリックします。瞬時に小説の題名が並びます。これまで「いいだろう」が書き綴った作品の数々。机に向い必死に小説に向かい合っていた弟の姿が題名を追う私の瞳の奥に蘇ります。

あの嬉しさと共に恨めしくも思う「まほらま賞」を頂いた「枯れ蓮」があります。その下には弟の人生を変えた「私のエンゲルス」が見えます。そしてその下に。思わず私は画面に顔を近付けます。「ブロンズ像」？ 私の知らぬ作品名です。もしやして、という思いが湧いてきます。父の死後部屋に籠りつきりになった弟は……遺作？

私は恐る恐る画面を開きます。作品が現れます。引き付けられるように凝視します。

### 「ブロンズ像」

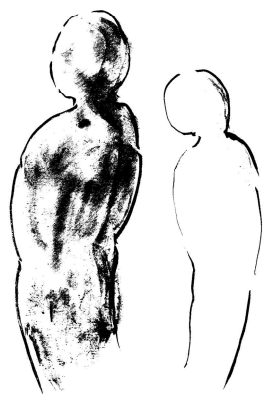
いいだろう

私はいま静かな思いでこの手記を書いています。あの男に読んでもらいたいたいに。

その男の名は……………

## 恋の道

深井  
了



カット  
後藤必

私は夢を見ていたのである。何故なら、その部屋は非常に暗かったからである。部屋の中には何人もの女の子がいた。フーコもいた。フーコとは永い間のつき合いで、さつきも顔を合わせていた時は、前歯を二本出して笑ってみせた。その他に、二、三人美しい子もいた。桃色や黄色の服を着ている。フーコは青色の服を着ていた。私はフーコと踊ろうと思っていた。

家の中は、暗さの中でゴタゴタしていた。蓄音機のまわりに男達が集まっている。私も集まっていたが、私は女の子達のつつ立っている隣の部屋を見ていた。みんな、薄い影で、みんな線のように細かった。ただ、フーコだけが近くにいて私に笑っていた。

踊りが始まると言いながら、踊りはなかなか始まら

なかった。何故なら、女の子たちは、みんなこちらの部屋に引き上げて来てしまっていたからである。ただ、細い、ピンクの服を着た石川さんだけが隣の部屋にいた。何か彼女に悪いような、かわいそうな気がして、私は隣の部屋に行つて踊ろうと言つた。

彼女は笑つて、踊りを教えてくれることになった。

実際、私は踊りを知らなかったのだ。音楽が鳴つていたので、彼女は大きく手を上げて回るステップを私に教えてくれた。ステップが大きく、私は常に彼女の足の角度とずれてしまった。彼女に悪いような気がした。隣の部屋 みんなが立つて飲んでるバーになつてるところにぶつかりそうになつた。私は本当に悪いような気がして、彼女の顔を見た。幸い、誰もこの部屋では踊つていなくて、襖間の向こうの部屋にいた。私

はキスしようかと言つた。彼女はうれしい顔をして、私の顔に自分の顔を引きよせてきた。私は彼女の肩を抱いたが、ほんの瞬間しか唇を合わせることが出来ず、私の舌の先がちよつと彼女の唇の間に入つただけだった。しかし、二人は非常に愛した気になり、私は本当に彼女が愛しくなつた。

彼女は細く、痩せていて、彼女の足は、線のような細さであつた。それが、丸く円を描いて一生懸命に動いているのだ。私は悲しくなつてもう踊れないと言つた。彼女は奥の灯りのついていない部屋に行こうと言つてくれた。私達はその中でもう一度キスをして抱き合おうと思つていたのだ。私達は互いの肩に手の平をのせ合つて、互いにかばい合うように、その部屋の暗さの中に消えようとした。すると、元居た部屋の隅から、



踊っていず踊ろうとしない西部が嫌な顔と太い腕をしてやってきた。私は咄嗟に、彼女は気持ちが悪いんだ

と嘘をついたが、西部はじつとあの厚ぼつたいまぶたとその下の濁ったようなギラギラ光る眼で私を見ていた。私達は振り切って奥の部屋に行ったが、彼女は外に出たいと言った。私もその方がいいと思った。彼女は本当に気分が悪くなりかけていて、私にもたれかかっていたからである。私達は一度だけキスをして、人の前で何食わぬ顔をして外に出た。外に出たら私達は互いに足を進め合った。足を進め合って、彼女の細い足、細い肩を寂しい程感じざるを得なかった。

しかし、とうとう坂の上で私達は向こうからくる先生のスクーターに会ってしまった。私はまた、咄嗟に、彼女は気持ちが悪いと言ったが、スクーターの後ろに

乗っていた、一年先輩の橘がやはり、西部のようなギラギラした目で私を見据えているのである。

私達は坂を急いで下った。私達がそろそろ追われるのは確実だったから、私達は坂を下って、昔踏切であり、今ガードになっている近くに來た。そのガードの両側の近くに私の昔の家があり、彼女の家があった。

私達はここまで逃げてきたが、私達は非常に不安であり、もう近くに彼女の家があり、どうなるかわからなかった。私達は千保川の所へ逃げることを決め、裏通りを行くことになった。しかし、丁度私達のいた通りはずっと長く、人がいず、夕暮れの中に薄暗かった。私達は本当にキスすることができた。私達は暗闇の中を進み、そして進んではキスをした。彼女は口が痛くになると言って笑った。

彼女の家の近くでは、私だけが表通りを通り、彼女は裏に回った。私はその間非常に苦しかったが、大きな道路が左に折れている所で、二人は会うことが出来た。それは乾いた道路で、私達は互に手を取り合つて進んだ。遠くには一っだけ人影が見えて、私達は歩いて行つた。しかし、その人影はやはり、私の知つた人で、私は仕方なく彼女を先に行かせねばならなかつた。私はしばらくの間、話したがすぐに別れて、彼女の後を追つた。彼女の後を追つたがなかなか彼女を見つけすることは出来なかつた。そのような気がした。私達は打ち合わせをしてなかつたけれど、道路は危険なので、川の向うの野原の方に降りていったことは間違ひなかつた。私は野原の中を歩いて行つた。足に葉がささり、私は彼女のことを思い悲しくなつた。向うに新しく出

来た大きな組み立て工場があり、私はその大きな鉄骨の後ろに彼女を見つけることが出来た。彼女は急いでおり、駅のほうに向かつていた。組み立て工場には、二、三人の人が働いており、一人は大きな鉄板を手にとって広げていた。そして彼女はすぐに、その鉄板の後ろに隠れてしまい、そして見えなくなつてしまつた。

私はまっすぐに組み立て工場を横切り駅へ急いだ。駅であつた。新しく出来た駅に古い電車が止まつていた。私は乗ろうとしたが、帽子をかぶつた駅員が私を呼び止めた。

「二重反射だ。」「二重反射だ。」

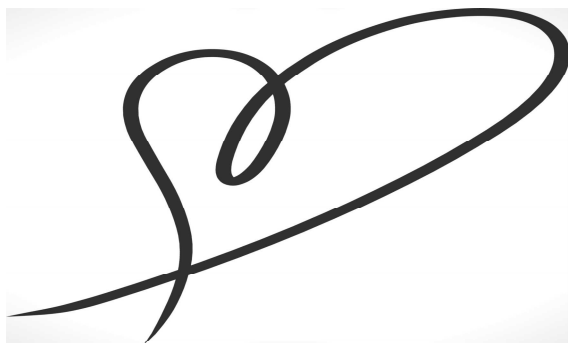
私はもう駄目だと思い、自分が切符を持っていないことの言い訳を考えながら、近よつてくる駅員の顔を見ていた。彼は近よつて来て、笑いながら、私の帽子

を取り、又、近よって来た、もう一人に、私の帽章を取って見せ「これじゃあだめだな」と言った。もう一人も相づちを打ち、笑って帽章を取った帽子を返してくれた。私は帽章にはってあったビニールが反射して運転をさまたげるのだらうと思い、電車に乗った。

電車に乗ったら、電車がすぐに出発してしまった。ホームには、まだ夕暮れの中に、何人も人がいたのだ。しかし、彼女はそこの中にはいず、私もいるはずがないと確信していた。そして、この電車に乗っているとも思われなかった。

電車はゴーゴーと走り始めた。私は車輛の一番後ろにいたが、走り始めるとともに私は彼女を捜しに前に出て行った。一番最後の車輛には、勿論いなかった。二番目の車輛にしなければ、彼女はこの電車に乗って

いなかったのだ。私はそう思っていた。ドアを開けて、先の車輛に移ると残りの車輛の間のドアがみんな開け放たれてあり、人々は、みんな両側の椅子に坐って、二、三人だけがすり革につながり、視野を障切っていた。私は駄目だと思った。車輛の中で両側の人の列から飛び出しているのは、小さな子供のイガグリ頭だけだったからである。電車はゴーゴー走っていた。私はそのまますり革にぶら下がっていた。



# 彼女に告る<sup>こく</sup>

内角秀人



「さあ、挿れてもいいわよ」

「こ、こう…」

「もつとゆつくり、優しく」

「こう？」

「そう、そう」

「気持ちいい…」

「そのまま腰を動かして」

「う、うん」

「いいわ、いいわ」

「う、うう…」

「その調子よ。ドンドン突いて」

「で、出そう…」

「も、もう？」

「あ、あああ…」

「いいわよ、出しても」

「いくう…」

「ああ、いいわ」

「出すぞ」

「いいわよ」

「で、出たーっ」

「あああーっ」

「ふーっ」

「いっぱい出したわね」

「へへへ」

「溜まってたんでしょ」

「気持ちよかった」

「スキン、外してあげる」

「ありがとうございます」

「風呂場で身体を洗ってくるわ」

「僕も一緒に行ってもいい？」

「明るいところは恥ずかしいから、別々にして」

「分かりました」

「君、初めてだったの？」

「はい」

「高校生？」

「分かります？」

「坊主頭だからね。何年生？」

「二年です」

「そう。初体験にはちょうどいいくらいの年ね」

「そうですか」

「いい体格しているけど、何かスポーツしているの？」

「野球をしています」

「甲子園目指しているの？」

「一応…」

「そう。夢があつていいわね」

「そうでもないです」

「もうこの店には来ないでね」

「どうして？」

「こういうことは彼女とするものよ。君、彼女いるの？」

「いいえ」

「じゃあ、頑張つて作らなきゃ。まだ若いんだし」

「分かりました」

「今日はどうもありがとう。気をつけて帰つてね」

「はい」

「待たせたな、悠平」

「どうだった？ 賢吾」

「何が？」

「初めてだったんだろ」

「えへへ」

「良かったか？」

「まあな」

「ちゃんとできたか？」

「ああ」

「賢吾、これでおまえも大人の仲間入りだ」

「終わってみると、呆気ないものだな」

「生意気に」

「悠平、おまえはどうだったんだよ」

「まあ、手慣れたものさ」

「また来たいな、この『学校』に。いつでも付き合うぜ」

「玲子はいいいのかよ」

「それを言うなよ。それとこれとは話が別だ」

「同じ女だぞ」

「玲子もあんなことするのか」

「当り前だ」

「考えたくないな」

「女にも性欲がある。もう十七だ。やりたくてうずうずしているよ」

「これ以上言うなよ。汚れる」

「純情だな」

「悪いか」

「自分はやりたいことやっているくせに」

「うるせえよ」

「玲子とやりたいか」

「ほっとけ」

「ははははは」

「何が可笑しい？」

「何でもないよ」

「面白い奴だな、おまえ」

「どうでもいいだろ」

「また来ような、『学校』」

「田浦君って、篠原君と随分仲いいのね」

「俺たち？」

「そうよ。他に誰がいるの」

「バッテリーだからな。俺がピッチャーで、悠平がキヤッチャー」

「いつもつるんでるんじゃない」

「そうかな」

「ホモだつていう噂もあるわ」

「それはない。絶対ない」

「むきになっちゃって」

「からかうのはよせ」

「篠原君って、好きな子とかいるのかな」

「悠平……？　　どうかな。いないんじゃないかな。どうして……？」

「ううん、何でもない。ちょっと訊いてみただけ」

「そう」

「田浦君、私って、どう思う？」

「どうって……」

「可愛い？」

「ああ、可愛いと思うよ」

「本当に？」

「本当さ。玲子は本当に魅力的だと思うよ」

「でも男の子って、私みたいにおてんば娘より、大人しいお人形さんみたいな子が好きよね」

「偏見だなあ。人それぞれだと思うよ。俺は玲子のような活発な女の子が好きだな。テニスウェア姿、様になっているし」

「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

「玲子、どうしてそんなこと訊くんだ？」

「別に。訊いてみただけ」

「悠平のこと、好きなのか？」

「そんなんじゃないったら」

「顔が赤いよ」

「そんなことないわ」

「仲、取り持ってやろうか？」

「え、本当に？」

「やっぱりその気あるじゃない」

「えへへへ」

「この田浦賢吾様にお任せあれ」

「変なこと言わないでね」

「ああ、分かっている」

「じゃ、よろしく」

「期待していてくれ」

「あー、俺は何てこと言っちゃまったんだ」

「どうした、賢吾」

「悠平、どうやら玲子はおまえのことが好きみたいだ」

「そうなのか」

「ああ」

「なんてこった」

「俺、玲子に仲取り持ってやるって、言っちゃまった」



「賢吾、おまえ、それでいいのか」

「いいわけないだろう。でも…」

「でも…?」

「悠平、おまえが相手なら…」

「馬鹿言うなよ。もつと自分の気持ちに正直になれよ」

「分かつてる。分かつてはいるが…」

「玲子のこと、好きなんだろう。高校入って同じクラスになって一目惚れしたんだろ。最近何とか話せる間柄になって、久保田さん”から”玲子”と親し気に呼べるようになったばかりじゃないか」

「まあな」

「わざわざ金沢の”学校”まで行って、大人になったんじゃないのかよ。女に気後れしないよう、度胸づけしたんじゃないのかよ」

「そう…だよな」

「俺に気兼ねするなよ。もう一押しだ」

「そう言ってくれるなら…」

「考え直せよな」

「ああ、分かった」

「とりあえず、三人でデートしよう」

「三人で…?」

「いや、四人の方がいいかな。おまえと俺と、玲子。それから玲子に友達を連れて来てもらう。ダブルデートしよう誘うんだ」

「ダブルデートねえ」

「後は俺が何とかしてやる。玲子にそう提案するんだ」

「分かったよ」

「お待たせ」

「俺たちも今来たところだ。な、賢吾」

「ああ」

「紹介するね。二年四組の吉沢由紀江さん。同じ硬式テニス部で、ダブルスのパートナー」

「初めまして、吉沢由紀江です」

「田浦賢吾です。二年一組、野球部です」

「同じく二年一組野球部の篠原悠平です。よろしく」

「吉沢さんは、皆に”ゆきりん”と呼ばれているの。だから二人もそう呼んであげて」

「玲子、やめてよ。恥ずかしい」

「ゆきりん、奥手でまだ彼氏がないの。田浦君、よ

ろしくね」

「お、おう」

「まあ、玲子、そう焦らず、四人仲良くしようや」

「そうね」

「二人とも野球部だけど、今日練習はどうしたんですか？ 夏の大会が近いんじゃないの？」

「いいの、いいの。俺たちは練習しなくても」

「ゆきりん、二人はバッテリー。田浦君がエースピッチャーで、篠原君が四番キヤッチャー」

「二年生で、すごい」

「まあね」

「大したことないよ」

「甲子園目指しているんですか？」

「あははは。だったら、今の時期女の子とデートなんかしてないって」

「玲子、笑い過ぎ」

「ごめんなさい」

「大会、頑張って下さい」

「ありがとう」

「で、今日は何するんだったつけ？」

「映画見よう、映画」

「今何か面白そうな物やってたつけ？」

「俺は何でもいいよ」

「篠原君、あまり興味ない？」

「ああ。映画館だと暗くてすぐ眠たくなるんだ」

「子供みたい」

「そういう玲子はどうなんだ？」

「私？ 私はもち恋愛映画。胸きゅんのやつ」

「らしいな」

「私も同じです」

「いや、ゆ、ゆきりんもそう」

「じゃ、決定！」

「あーあ、蕁麻疹が出そう」

「田浦君、何か言った？」

「いや、何も」

「篠原君は高軒かかないでね。それじゃ、出発進行！」

「賢吾、どう思う？」

「何が？」

「ゆきりん」

「いい子じゃないか」

「俺もそう思う」

「玲子の奴、友達選ぶ、いい選球眼してるな」

「感心している場合じゃないぞ」

「何で？」

「ゆきりん、おまえに気があるみたいだ」

「へ？ そんなことはない」

「おまえは鈍い奴だなあ」

「悠平の思い過ごしだ」

「それは違う。確かだ。俺の目に狂いはない」

「そうかな」

「ゆきりに乗り換えてみたかどうか？」

「そして、おまえが玲子をいただくというわけか」

「違う。そういうわけではない」

「俺の気持ちは変わらない。玲子一筋だ」

「そうかい。それなら俺はおまえを応援する。バッテ

リーとしてな」

「ねえ、田浦君」

「何だい、玲子。改まって」

「この間、ゆきりんを紹介したでしょう？」

「ああ」

「あの子、篠原君のこと好きになったみたい」

「ええっ」

「私って、馬鹿よね。ライバルを増やすことしちやつ

て」

「そうなのか」

「あの日の帰り道、言ってたわ。篠原君がカッコいい

って」

「ふーん」

「田浦君、もしかして、ゆきりに気があった？」

「いや、そういうわけじゃないけど…」

「篠原君、モテるわよねえ。勉強できて、スポーツ万

能、それでいてイケメンだし…」

「俺に勝ち目無しか」

「え、今、何か言った？」

「ううん、何でもない」

「それはそうと、田浦君、私の気持ち、篠原君に伝え

てくれた？」

「ああ、それとなく匂わせてみたが…」

「脈はありそう、それとも無し？」

「どちらとも言えないなあ」

「じれったいなあ、もう。田浦君に頼んだのがいけな

かったかしら」

「まあ、その件は引き続き俺に任せて。もう少し時間をくれ。俺たちこれから夏の大会で、忙しいんだ」

「よろしく頼むわよ」

「…というわけなんだ、悠平」

「げろげろ」

「俺、もうどうしたらいいか分からないよ」

「女って、本当、理解不能」

「悠平、おまえはいいよな。誰からもモテモテで」

「賢吾、嘆くんじやない」

「俺がおまえだったらな」

「賢吾、起死回生の策がある」

「何だ？」

「夏の大会で活躍するんだ」

「そんなこと…今さら…」

「おまえは我が富山城南高校野球部のエースピッチャーだ。胸を張れ」

「けど、ちっともモテないやん」

「活躍すれば、女の見る目も違ってくるさ」

「甲子園にでも出場出来たらなあ…」

「そうすれば、おまえ英雄扱いだぞ。女は自然と寄ってくる」

「少し真面目に野球やってみるか」

「やる気になってきたか」

「県予選の一回戦は勝ちたいな。でないと、カッコ悪い」

「そうだな」

「スタミナつけないとな。夏は体力勝負だ」

「賢吾、明日からでもランニング量増やすか」

「かったるいけど仕方ない」

「愛する女のためだ」

「玲子のためだ」

「ヒューヒュー、よく言うぜ」

「悠平、バックアップを頼む」

「任せておけ」

「玲子の奴、見てろよ」

「賢吾、おまえの実力見せつけてやれ」

「よーし、やったるでえ」

「その意気、その意気。調子が出てきたみたいだな」

「ここはどうする、賢吾？ 1点リード、八回裏、ワ

シアウト、二、三塁。バッターは四番。さつきツーベースを打たれている」

「歩かして、次のバッターで勝負しよう」

「分かった。冷静だな」

「そうでもないよ。心臓がバクバクしている」

「この局面、それが普通だ」

「そうかい」

「賢吾、おまえが普通の人間で安心した」

「悠平…、それからな…」

「何だ？」

「俺、この試合に勝ったら、玲子に正式に告<sup>こ</sup>ることにした」

「そうか」

「いつまでもウジウジしていてもつまらんし、俺らしくないからな」

「よし、勝負かけようぜ」

「全力で行く」

「打たれるなよ」

「田浦君、話って何？」

「玲子、この前の試合見ていてくれたかい？」

「ええ。暑くて死にそうだった」

「これ、ウイニングボール」

「これを私に？」

「ああ」

「ありがとう」

「貴重な物なんだぞ。審判の目を盗んで持ってきた物だ」

「大事にするわ」

「それから…」

「何？」

「ええと…」

「どうしたの？」

「俺と付き合ってくれ」

「え？」

「俺の彼女になってくれ」

「プハハハ、いきなり何言うの」

「いや、その…」

「狼狽えちゃって。いつもの田浦君と違う。全然らしくない」

「本気なんだ。玲子が悠平のこと好きなのは知っている。それを承知で言っているんだ。頼む。俺と付き合い

つてくれ」

「そう」

「どう？」

「じゃ、今度の日曜日、ウチに来て。紹介するわ」

「え…、わ、分かった」

「いきなり自宅へ招待されるなんて、やるな、賢吾」

「悠平、こんな場合どうすればいい？」

「そうだな。まず先方のご両親には礼儀正しく挨拶することだな、高校球児であることを強くアピールすればいいんじゃないかな」

「高校球児らしく、ね」

「あくまで爽やかに。清く正しく美しくあれ」

「なるほど」

「手土産にお茶菓子を持っていくのもいいんじゃないか」

「分かった」

「第一印象が肝心だからな。初対面でかませよ」

「夏の大会の時より緊張するな」

「ベストを尽くせ」

「それにしても玲子の奴、初デートで親に紹介だなん

て、意外と古風なのかな」

「あいつの考えていること、俺にはちよつと分からん」

「一発決めてくる」

「ああ、健闘を祈る」

「田浦君、ようこそ。早かったわね」

「ご招待いただいて、どうも。これ、つまらない物だけれど…」

「ありがとう。ごめんね、気を使わせちゃって。どうぞ、お入り下さい」

「失礼します」

「とりあえず、この客間のソファに座って。アイスコーヒーがいいかしら。それともアイスレモンティ？」

「アイスコーヒーでいいよ」

「相変わらず暑いよね。冷房、大丈夫？　ちゃんと効いてる？」

「ああ、お構いなく」

「まあ、美味しそうなクッキー。これ、高かったんじゃない？」

「そんなことないよ」

「はい、お待たせ。アイスコーヒ―」

「ありがとう」

「私もいただくわ。喉渇いちやった」

「あの…」

「何？」

「ご両親は？」

「二人とも出かけているわ。どうして？」

「いや、その、紹介するって、言っていたから…」

「ああ、その件ね。もうすぐ来るわ」

「来る…？」

「あ、来たみたい」

「ちよつと遅くなったかな」

「ううん。ちよつと噂していたところなの」

「こんにちは。君が田浦賢吾君か…」

「こ、こんにちは」

「青崎翔太といいます。玲子、来て早々何だけど、ちよつとトイレ借りるね」

「OK」

「玲子、だ、誰？」

「だから、青崎翔太さん」

「何者？」

「私の婚約者」

「婚約者！ 玲子、彼氏いないって言ってたじゃないか」

「婚約者がいないとは言ってないわ。しかも親同士が決めた政略結婚の相手。でも、私は十七歳。まだまだ縛られるのは早いわ」

「それにしたって…」

「私はもつと恋愛を、人生を楽しみたいの。分かった？ 私のこと。田浦君、私と付き合う気があるなら、覚悟を決めてよね。婚約者公認じゃなきゃ駄目だわ」

「玲子…」

「私は私よ。何をしようと、自由だわ。青崎さんも理解してくれている」

「俺、帰る」

「そう。今まで以上に仲良くなれそうだったのに残念だわ。篠原君にも宜しく伝えてね」

「ああ、分かった」

「高校二年生で婚約者がいるとはねえ」

「驚きだろ」

「まさか、だよな」

「それでも婚約者が公認したら、付き合ってもいいと言うんだぜ。そんな女と、普通付き合える？」

「で、どうするんだ？」

「一ぺんに興醒めしてしまったぜ。俺たちはいいように遊ばれていたんだ。ムカつく」

「まあ、勉強させてもらったと思うことだな。まだ傷口が浅くて良かったじゃないか。俺もパスだ」

「悠平、また『学校』行こうぜ」

「月謝料はあるのか？」

「貯金を下ろす」

「もう来ちゃ駄目って、言われたんじゃないかったっけ」

「そんなもん、他の女を指名すればいいじゃん。な、行こ」

「しょうがないな」

「俺の性欲、半端ないって」

「自分で言うなよ」

「あーあ、玲子とやりたかったな」

「ふふん。未練がましい奴」

「何とでも言え」



## 二人の女

むらい  
はくどう



数日前のことだ。女から「元気？」とライン・メールが入っていた。女はママと言う。先方からメールが来るなんて珍しい。去年、四十路を前に結婚した。出逢ってから年月の経過を考えると、昔と言っているくらい前から関わっている。肉体関係が切れて数年が経っている。

毎年秋にママの誕生日が来る。その時に祝いのメールを送る。最近は生存確認のためにメールしているようなものだ。去年の春のことだ。何か予感めいたものがあつたので、誕生月の半年前にメールを入れてみた。すると、話があるから夜に電話を掛け直してほしいと言われた。後で電話すると、結婚するということだった。結婚生活がどんなものなのか、続けられるかどうかわからないけど、取り敢えず、一度試しに経験してみると言う。以前から家族を持ちたいという願望があった。その願いが叶ったことになる。

そして、去年の秋になり、ママの誕生日を迎えた。当日に、結婚を祝福するメールを送った。すると、「ドレス姿を見てやってください」とウェディング姿の画像を送ってきた。

私とママは趣味趣向が真逆と言っている。仲が良くなるにつれてすれ違いが多くなった。それでも、若い

肌の魅力には勝てなかった。女の肉体に溺れ、快樂の虜になっていた。性交回数は人生で一番多いかもしれない。小柄で幼顔で三十路を過ぎる頃でも瑞々しさがあった。化粧をすると美形に見えた。今ではマミと交わらなくなって久しい。

親子ほどの年齢差がある。いろいろとあったが、連絡は途切れていない。親友のように定期的に連絡を取り合う訳でもない。今ではどんな風に生きようとしているのか傍観しているだけだ。遙か以前に同じ時間や空間を共有したというだけで、今は昔の想いになりつつある。忘れた頃にメールが来たり、送ったりしているだけだ。どちらかに深刻な事態が発生しても、特に連絡を取り合っていないから、アドバイスなどできないだろう。大体は事後報告になる。

性の関係がなくなつてからも、最低限の付き合いを保っている。過去に深いスキンシップがあったが、既に肌感覚は忘れている。同性だったら、こんな風な関係が続かないと思う。希薄になったままの関係を継続しているのは、マミの方が情に厚いからだろう。

今は辛うじて連絡がついている程度のことだ。今更、情交を復活させようとする意欲はない。連絡がつかなくなつても、特に支障がない。冷たい男と思われたく

ないから、現状を維持している。

関係が深かった頃はいろんな所に同伴した。その当時、一緒にいるマミはいつもイラついていた。不満を露わにするということは、私にベストな対応を欲していたことにもなる。そして、早くから見限られていた。ずっと前から二人の相性が悪いことを認識していたのだ。

高校生の頃からマミには彼氏がいた。二人の親が公認する中で、将来の結婚を約束していた。その彼氏と別れたのは私の存在が関連しているかもしれない。ある時、私と外国旅行に行く計画がばれた。マミと彼氏に修羅場はあった。マミの彼氏から私の携帯電話に連絡を入れてきた。今後は逢わないとマミの彼氏に約束させられた。その後、マミと彼氏との仲は修復したかに見えた。マミの彼氏から電話があつてから、半年近くブランクがあつたが、ほとぼりがさめた頃合いをみて関係が復活した。もしかして、密通の痕跡が見つかったのかもしれない。それだけでなく、他にも何か訳があつたのかもしれない。そして、マミの彼氏の方から別居を告げられ、出て行つた。

その時点でマミは「どうせ、戻つて来る」と言つた。その言葉を聞いて、そんな自信はどこから来るのだろ

う、何を根拠にそう言うのだろう、と思った。案の定、冷却期間を経ても彼氏は戻ってこなかった。彼の中では信頼が揺らいでいたことは確かだ。私でもそうしたかもしれない。

彼氏との別れが確実になってから、ママは彼氏と同じにしていたマンションを引き払った。直後、海外でのワーキング・ホリデーの計画を立てた。

その頃、派遣社員として地方に出張にきているママと一緒に飲んだ。酔ったママは自身の痛みを緩和するためなのか、私に対して、遠慮のない言葉を吐いた。感情のままヒステリックに述べた訳ではない。理路整然とサデイスティックに私の短所を挙げた。

言葉が私をいたぶるが、反論はできなかった。列挙された欠点が図星だったからだ。温和に振る舞うことしかできない私は応酬する力がなかった。酔った彼女の突発的な発言だったかもしれないが、聞いていて辛かった。男を立ててくれなければプライドがズタズタになる。ママと距離を置くようになったのはそれからだった。

その後、ママはワーキング・ホリデーで海外に飛んだ。私にはママの渡航先まで逢いに行く気力がなくなっていた。

ママが離れて行っても支障がなかったのは、新しい援助交際の相手がいたこともある。ママより十一歳も若く、姪っ子ほどの年齢差がある。ママに対して蟠りはなくなりつつあった。ママが離れていったことを引きずることもなかった。

現在付き合っているパートナーは子供を欲していない。その持論を強く通すだけの精神的、肉体的な事情があった。彼女は儉約もできて貯金もある。教員免許を持っている、一時期教師を務めていた。堅実さと知力がある。アニメを描く手先の器用さがある。描いた画像がネットで売れるほどで、趣味の域を越えた力量を認めざるを得ない。

感染症に罹ってから肌は接触に敏感になっている。親から独立して賃貸マンションに転居することになった。転居したばかりの頃、パートナーの住むアパートに案内してもらった。その部屋で事を済ませればホテル代を節約できると考えたのだ。

部屋に入る時に緊張するパートナーがいた。ウィルスや雑菌に過敏なのだ。部屋の中を歩くにも指示があった。座る位置まで指定されて、気を使わなくては行かなかった。彼女の部屋で性行為に至るには、シート

等の別購入の他、いくつかの条件を突きつけられた。制約を課された形では交わりに集中できない。だから、それ以来パートナーの部屋には入ったことがない。

だからこそ、事情を知っている私以外の男を受け入れないのだ。性癖も特殊だ。ロリータ画を特異とするには訳がある。同性愛的なロリコン志向があり、広い意味でのバイセクシャルだ。言葉としての「ロリコン趣味」が私と共通するが、志向の本身は異なっている。風変わりさが面白いとも言える。現在のパートナーとの付き合いは七年以上になる。私には激しく性欲を発散してくる。それにも慣れて、今では心地よい。

マミが大学に入学した頃から、都会まで逢いに行っていた。今でもその遠い過去のことを記憶している。マミとは数えきれないほど交わったが、ED（勃起不全）治療薬を服用していることを告げる機会がなかった。

マミが高校生だった時に私と出逢った。今ではスマホの出会い系アプリが主流だが、当時は携帯電話が普及し始めた頃だった。たまたま通じた伝言ダイヤルでの相手だった。当時の出会い系ツールはツーショットダイヤルが主流だった。たまたま、伝言ダイヤルに連絡があったのだ。時間帯が少しずれたら彼女と出逢う

こともなかった。今、考えると運命的だったのかもしれない。

マミが高校生だった頃、仲のいい彼氏は遠方の大学に行っていた。遠方なので頻繁に逢えなかった。彼氏に逢えない寂しさを埋めるために、マミは出会い系ツールに手を出したのだ。高校生になる前から転校が多かったのも、人間関係に悩み、いつも精神が不安定だった。不安定だったから、私と出逢ったことになる。

不特定の異性と関係を持つことにマミは一時の安らぎを覚えた。大人への好奇心も強い頃だ。結果的に闇の部分を経験することになった。若年だったので、若気のいたり許される時期でもあった。そんな時に私と出逢ってしまった。

私は三十代後半から軽度の若天性EDに悩まされていた。その時期は営業で成績が上げられなかったストレスからきていたのだろう。元々、精力が弱く淡泊だった。アダルト・ビデオを見てペニスは勃起した。マスターベーションはできた。それでも、生身の女の前ではペニスが萎えるのだ。出会い系ツールで知り合った裸の女を目の前にして立たない。女の膣に挿入できないことが度々あってから、意識過剰になってしまった。そうなる、思い込みの呪縛から、玄人のソープ

ランド嬢相手でも、勃起しないことがあった。

内科の医師に相談して処方箋を出してもらおうほどでもなかった。海外で女遊びをするために知り合いの医師に抗生物質を処方してもらおう猛者の知人を知っている。当時の私ならバイアグラを処方してもらえたかもしれない。その当時は互いが公認しているパートナーがいなかった。いなかったとしても、いることにして、処方してもらおうのだ。当時はそんな知恵はなかった。保険適応がなければバイアグラは高額だった。そんな手間を掛けてまで手に入れたくなかった。若年性EDを看護婦のいる前で告げることは恥ずかしいことだ。個人的な機微情報を漏らすこともなく、自分の中だけにとどめていた。特に日常生活には支障がなかったこともある。

二十一世紀に入ってから医薬品もネットで買えるようになった。その頃からはバイアグラに似た薬が簡単にネット購入できるようになっていた。バイアグラ系のジェネリック薬品が登場していた。日本製ではない。東南アジア経由で、インド製バイアグラ系ジェネリック薬品を、安価に購入できたのだ。

マミと出逢ったのはジェネリック・ED薬の普及と同時期だった。薬が普及した時期が合致したのだ。今

にして思えば、運が良かったと言うべきなのか、判断のつかないことでもある。

マミの内面はどうでもいいと思うようになっていった。若い肌との密着で満足していた。長く続いたのは両者とも独身だったからだ。経済力に余裕があったから続いた。継続していたということは、気が合わないでも、肉体を介して折り合うことができていたからだろう。

私のような年配相手だと、形だけの情交で、深入りすることはないだろうと安心していたのだろう。彼氏にバレないようにしていた。それもあって、いつも彼氏には氣を使っていたと言う。そうでなくても対人関係に配慮するマミだ。私には付度することもなく、我が儘を通せる自由を得た。私は快樂のためならと、我を捨てた。マミは性を提供する女王のような存在だった。当時の情交が最高だったかもしれない。

愛人契約のように拘束されるほどはなかったから続いたのだ。闇の部分を断ち切ることなく「若気のいたり」で済まされる年齢ではなくなつてからも関係が続き、軽い間柄ではなくなった。二人で海外旅行にも何回か出掛けた。

人生の経験値が高い方が好まれることもないのだから

う。交わりの頻度が高かるうが低かるうが関係ない。

マミは最初から年上へのリスペクトが希薄だった。今でも、同列の相手として扱われる。年齢差を考えていない。彼女といると常識が麻痺してしまう。それでも、彼女を断ち切れなくなったのだ。性的テクニクは相手がどう感じるかなので、自分では評価できない。だが、素人女に時間無制限でまわりつくねちっこさは身についた。夫婦だったらできないだろう、より探求的なものになった。マミの身体の細部の反応を探知しようとした。私は肉欲の権化に特化してしまった。

マミは十代のうちに中年以上の男でも性交渉相手になることを知ってしまった。他の男とも少なからず交わっていたので私は比べられることもあったろう。欠点の多い私を厭わなかったことにもなる。優柔不断な私に対してイラつく姿をよく見た。私に出逢ったこと自体が間違いだったのかもしれない。

私には性機能障害にコンプレックスがあった。だからこそ、生殖目的ではなく、あくまでも快楽を追求する行為を実行できた。私も内面にある自身の本性を知らない方が良かったかもしれない。

高校を卒業した春から、マミは関東圏内の大学に進学することになった。その時、絶交する契機はあった

のだ。携帯電話にメールした。返事がないから、縁を切られたのだと考えたこともある。返事がないだけで、メールを受信拒否にしていなかったから、送信はできた。マミは私を試していたのだ。メール拒否にしていなかったのは、少なからず断ち切りたくない意志があったのだ。彼女と逢えない時期は三ヶ月だった。三ヶ月後に送ったメールに返信があった。

月に一回のペースで都会に出掛けた。北陸新幹線が開通していない時期に新潟経由で行った。時々飛行機も利用した。

白い錠剤がコロコロと目の前を転がる。その白い錠剤がなければその日のメインの営みができないことになる。焦った。ひよつとして、その白い錠剤がなくても、事を済ませられたかもしれない。あるいは、やっぱりそうだったかという状況になったかもしれない。

副都心のような。車の交通量が多い。歩道橋を渡ると比較的人が密集していない場所に出た。広場かどうかかわからない空間が現れる。灰色ぼい石畳に似せた、コンクリート製の、小さな正四角の柵目が均等に広がっている。歩道橋を渡っているつもりが瀟洒な商業エリアに入っていた。

ホテルの見取り図はホームページから印刷してあった。紙切れがあるかポケットに手を入れてチェックしてみたのがいけなかった。ポケットから一旦手を抜いた時に丸い錠剤がコロコロと足元に転がっていった。それがなくなったらその日はペニスが使い物にならなかっただろう。ラッキーなことに錠剤のED薬は見つかった。柵目のあいだに隠れてしまったらわからなくなるところだった。

マミはその様子を見ていた。彼女との会話の中で、血圧用の降圧剤を飲んでいると伝えたことがある。だから、転がった錠剤が、高血圧の薬かもしれないと、マミは思ったかもしれない。だが、血圧の薬を飲んである私を見抜いていたかもしれない。丸い錠剤を真剣に探す私の姿を見て、どう思っただろう？

つい最近、こんなことがあった。今のパートナーと月一回のペースで交わることになっていた。当日はその日で、夕方に逢うことになっていた。私は図書館で時間を潰していた。時間に余裕があり過ぎたのだろう。当日はいつものED薬を飲み忘れていた。ラブホテルに向かう車の中で「アッ、薬を忘れた」と告げた。い

つもは鞆の文房具入れに予備を入れておく。たまたまそれも忘れていた。

その日から数年前のことだ。いつまでもペニスが萎えることがないことを不思議がり、「薬でも使っているの？」と問われたことがある。返事に困ったので「うん」と頷いてしまった。それ以来、薬に頼っていることをパートナーには知られていた。

とにかく、やってみようということになった。不安だった。当日まで朝立ちのない日が長く続いていた。朝立ちがなくなるのは加齢によるものと諦めていた。たまにハードなスポーツで汗をかく。普段の健康を心掛けているのは体調面全般で、朝立ちとは無関係だ。

薬なしだとペニスは半立ちに近かったが、とにかく挿入はできた。精力が乏しいにもかかわらず、六〇代後半になっても、薬なしでもできることが立証できた。パートナーとその事実を共有できた日でもあった。変な自信がついた。それでも、薬なしで行為に及んだのは後にも先にもその日限りだ。

若い相手なので細胞同士が素粒子レベルで同期し活性化したのではないだろう。リラックスできる相手だから、身体が慣れていたのだ。バブロフの犬状態になっていたただかもしれない。その日の奇跡をそう分析

するしかない。

コロナが流行する前だった。ママからメールがあり、実家のある近県から用事があって私の住む近くまで来ると言う。私と同じ市内に女友達がいるのだ。時々、泊まり掛けで女友達のところまで来ていた。

私と逢うのはついでと言っている。互いに時間があつたら、ランチを共にして互いの近況を語り合う。逢うたびに希薄な交際が継続され、微妙な関係がその時点で更新されることになる。

関東圏の大学に通っていた当時の一時期、ママは他の女友達とワンルームマンションでルームシェアをしていた。ベッドが一つしかないの、二人には厳格な約束事があった。男を連れ込んでいいが、シーツ等はきちんと別のものを使うというものだった。当時、女友達には彼氏がいた。その当時の女友達はその時の彼氏と結婚して子供がいる。

その話を聞くまでもなく、私との交りは男女のものだった。しかも、ママには普通に彼氏がいたので、同性愛を疑ったことはない。しかし、今となっては彼氏と別れた後に兆候はあった。何かの変化を感じ取れたのだが、思い過ぎだろうと、考えないようにしていた。

た。

久し振りにスキンシップを取らないかと誘っても乗ってこない。女の実家のある近県まで出掛けて一緒に酒を飲んだこともある。しかし、性行為を避けられた。元々、ママの彼氏も言っていたことでもあるが、ママには独特のやらせないオーラがある。単にセックスが好きでないのかもしれない。さらに、自分で不感症を自認していた。性交時を思い返すと、そんな症状を微塵も感じさせなかった。感じているように演技したのだとしたら、名演と言っている。単に、ママのやらせないオーラが性交嫌いの印象を与えるだけかもしれない。

ただ、ママのバイセクシュアリティ疑惑が拭えない。数日前に連絡のあった友達はママのいつの時期の女友達か知らないが、結婚前も結婚後もなぜ泊まり掛けで通うのかということだ。そのことに疑問を持つのだ。親友だとしてもそこまで深い関わりを持つものだろうか？ 仮にバイセクシャルであったとしても、厭うことではないのだが……。

メールのやり取りをして、ランチを共にするだけでも、関わりが消滅したことにならないなら、ママと出逢って二十年以上も経過したことになる。終の相手で



はないから、今後も一緒に暮すことはないだろう。両方が一縷も望んでもいないことだ。面倒だから、復縁を望まないのだ。去年、結婚すると聞いて、肩の荷が降りたような気がした。

もう、出会い系サイトにアクセスするのは止めよう、そう思いながらも、高齢になっても続けてしまう私がいた。性欲は極端に衰えている。それなのに死ぬまで異性と接触したい欲求が消えないのは業なのだろうか。出会い系サイトで不特定多数の女と出逢ったことがある。しかし、同じ人物に何回か絡んだことがあるくらいで、続かないことがほとんどだった。その中で最も長く続いたのがマミと今のパートナーだ。

昔、ある飲み会の席で六〇代の男性に未だ性の営みができるか聞いてみた。中年になって、性行為に自信がない時だった。まだ現役だと言った。それを聞いてからは高齢者の概念が違ってきた。それに引き換え自分の不甲斐なさを痛感したものだ。それ以降、自分の弱点を悟り、ED薬に頼ることになった。性に開放的な時代に推移していき、出会い系ツールの利用が常態化していった。そして、二人の女と出逢うのだ。

ローリングストーンズのミック・ジャガーは七三歳

で子供ができた。高齢な著名人のそんな事例を聞くことがある。自分の人生は残り少なくなつた。今から子育てなど体験したくないが、子供がいるという感覚を知ってみたい。多くの人が子供のためなら自分を犠牲にしてもいいと言う。どうしてそんな気持ちになるのか、とらえ方がわからない。

一人の人間の染色体のパターンが、一つとして同じものがないのと同じで、人それぞれ違う。異性とか同性とか分けなくても、一人一人の人間それぞれが唯一無二で多様性がある。

生まれながら考えや感受性の相違がある。複雑な心理を持つ人間の固体それぞれに違いがある。一組の男女だと性別の違いもあってもっと複雑だ。一つ一つの組み合わせのあり方も、それぞれ違いがあり、定型はないはずだ。

私は平均寿命に近づいている。平均的な寿命に到達する前に癌などの病気に罹るかもしれない。不慮の事故に遭遇するかもしれない。明日のことはわからない。そう考えると自身のDNAを残したい気もする。寿命が近づいていることに、敏感にならねばと思うのだが、特に行動を起こすこともない。甥には子供が二人いるから、直接子孫を残さなくても、家系の系譜は続くの

だと考えても、気が楽になるわけではない。なるようにしかならないのだ。

それでも、現世に未練を持つ、もう一人の自分がいる。

そこにいるのは妄想を抱くもう一人の自分だった。

近い日にマミとランチを共にすることになっている。マミはいまだに大食漢のままだろう。結婚する前にランチを共にしたことがある。その時は成人男性の二人分食べてもケロリとしていた。今回も昼から大食いするかもしれない。それでも、マミにとっては普通の食事量だろう。

地元の新鮮な、朝どれのネタが揃う、食通向けの回転寿司店に入る。平日なので人が少なく、四人掛けのテーブル席が空いている。向かい合わせのマミが、メニュー表を開く。

「家族は増えそう？」

「親戚の叔父さんみたいなこと言うのね。まだだよ」「自分だって彼女できたの？」

「一応、できたよ」

「一応って何？ 今度もまともではないの？」

「私みたいに」と付け足したらと、問い掛けたい気

持ちになる。

「そうだよ。マミより一回り若い」

「また、どうしてそんなの見つかったの？ 相変わらずロリコンなのね」

「でも、こんな者でもいいというから、変わっている」

「君と一緒に変わっているよ」とは言えない。機嫌が悪くなる兆候は心得ている。たまにしか逢わないのだ。不愉快にさせてはいけない。

「どんな風に変わっているの？」

「いろいろとあり過ぎて直ぐには言えない。君の旦那のことは聞かないし、お互いにパートナーのことスルーすることにしよう。ただ、ある職業についていた。それから子供が嫌いだということに気づいたらしい。そう自分で言ってた。子供をつくるつもりがないと言っている。それでも、今のところ不満はないけどね」「だって、あなたは元々子供に興味がなかったですよ？」

「そうだけど、今は違うんだ。この前も言ったけど、一度、子供を持つ経験をしたくなったんだ。残り少ない人生だけど、人並みの心境を知ってみたいんだ」

「私の旦那はそういう意識がないかもしれない。子供

をつくる気がないの。中年になってから結婚する気になるなんて、今まで何かと肩身の狭い思いをしたのよ。田舎だし、世間体で結婚したのかな？」

「上手くやっていけるなら、それでいいんじゃないかな。結婚しただけで、それ以上は望まないのも、ママの旦那の考え方だよ。もしかして、もうセックスレス？ またママはやらせないオーラを出しているのかな？」

「わからないわ。ただ、夜はあまり近づいて来ない」「それぞれの家庭の事情なんか知りたくもないけれど、もし、子供が欲しいのなら協力するよ。聞いている限りはおとなしそうな旦那だね。完全にママの方が上だね。ママのしでかす悪事にも、旦那は文句を言わないかもしれないね。ママは昔からワルだったからね」

「どこが？」

「今までいろいろあっただろう？ だから、ママは度胸が据わっている。何ごとにも動じない。それに、子が子なら、親も親だからね。家族を持っている兄さんは都会から帰って来ないだろうし、もしかすると、事情はどうあれ、波乱があったとしても、親は内孫ができれば歓迎するだろうね」

「そうかもね」

「だから、浮気相手の子種でも良かったら提供するよ。」

精子が少ないかもしれないけれど、何ごともしやってみないとわからない。両方がウインウインになれると思うけれどね」

テーブル席の隣に回転するレーンがある。皿にのつた寿司がレーンの上を回っている。店員が近づいて来た。

「ご注文はありますか？」

「ノドグロの炙りを二皿下さい」

ママは店員に顔を向けた後、しばらくこちらを見て、手元のメニュー表に目を落とした。

## 合評会案内

一、日時 二〇二三年 十一月五日（日）

午後二時三十分

二、場所

富山県民会館 六〇八号室

富山市新総曲輪四番一八号

TEL (076) 432-3111

読者方々のご出席を歓迎します。

# 井戸の底へ

池田良治



飛行機から最後に降りてきた州濱亮一は鼻をうごめかした。  
すはまりよういち

異様に大きな頭、ヌルツとした額には、皺ひとつない。大きくて赤く充血している眼は、長い睫に覆われているものの、不思議なほど可愛さを感じられない。子どもかと思われるほどの小さなからだには異様に大きなリックを背負っている。目立っていた。なんとも不思議だったのは両脇からは蝙蝠のような翼が生えていることだった。特製の松葉杖だった。また両脚は金属の装具の赤と青の網目で覆われており、それはまるで出稼ぎの異星人といった風だった。

亮一はタイ国のバンコックに着いた。夜も更けていたが、南国の夜は蒸し暑い。

松葉杖でタラップを水辺の小鳥の散歩のように軽快に降りると、空港バスに乗車した。驚くほどのスピードで空港前の広場へ向かう。たむろしていた三輪車のタクシーサムローを捕まえて夜の町へと泳がせた。サムローはメナム川に沿って疾駆する。川沿いに貧民街の掘っ立て小屋の群れがながながと続いていた。町の通りに入ると、小さな屋台が裸電球の下でまだ営業している。昼間笑顔を使い尽した細い腕の女がじっとこちらを見ていた。

宿に着いた。黄色いドアだった。細長い部屋にベツト、洗面台、トイレ、長椅子。みな薄汚く黄色で塗られている。

退屈していたのか、主人が部屋までチャイを運んできた。シナモンシュガーの香りがする。主人は髭をひねりながら聞いてきた。

「足、どうした？」

無遠慮な眼差しである。亮一は小首をかしげて、額を指さした。

「頭の中の、できもの、とつたら、こうなった」

亮一はなんでもないことのように言った。

「はあ？ 手術か」

「YES」

まだまだ好奇心は満たされない様子だったが、主人は出て行った。

腹が硬くなってきた。尿が溜まってきたのだ。導尿をしなければならぬ。

導尿は一日五回する。起床後すぐ、午前午後それぞれ一回、夕食後、就寝前である。ベツトへ腰掛け、脚を引っ張り上げた。そして装具の赤と青のマジックテープをむしり取る。軽金属の網目があらわれた。それを爪先から引き摺り出してベツトに立てかける。鳥の

いない鳥籠のようにも見える。ズボンを脱ぐ。操り人形を動かすように片足ずつ持ち上げて両脚をM字に開く。リックから消毒液のボトル、オムツ、尿器、サヒイトネラトンカテテル、エコソフトグローブを取り出す。装着しているオムツの両脇の切れ込みを破つて下半身を露わにする。ムツとする尿の臭い。オムツにはたっぷり尿が溜まっているようだ。オムツを押し広げる。蒸された陰茎はぐにやりとしていた。脚は青白く、割り箸のように細い。膝が木の瘤に似た影をシートに落としている。エコソフトグローブを嵌めて、消毒液で拭う。それから左手で粘滑表面麻醉剤をチューブから右手の手袋へ塗る。次に右手で持ったカテテルを鉛筆のようにして剥き出しの亀頭の切れ込みへ、ぐいと入れる。しばらくすると、尿器の中のカテテルの筒先から麦蘖色の液体がでる。尿器のプラスチックの側面に勢いよく当たってから、平らな底に丸く溜まり、浮かんだ泡がイクラのように連なっていく。亮一は泡同士がくっつきあった後、ぼつぼつと消えていくのを眺めるのが好きだった。挿入したカテテルを抜き、赤く腫れた亀頭をアメジストクレンジングコックンでくるむように拭う。亀頭はゆっくり皮のなかに縮まってく。エコソフトグローブを裏返してコックン

とカテーテルを包み込んでゴミ箱に捨てる。水色のテープで巻かれた容器の口からきつい尿の臭いが漂ってきた。その臭いは決まって最近酷くなってきた偏頭痛を引き起こすのだった。

導尿は小学部四年までは母親がしてくれた。場所は茶の間のテレビの横のケロヨンの座布団の上。壁のクロスは四つ葉のクローバーの模様だった。母も亮一が生まれる前は将来に希望を持っていたらしい。ズボンとオムツを脱がせ、壁に寄りかからせて、座布団に座らせる。おしっこが出ている間は暇だった。尿器に挿したカテーテルを支えている真面目な母の顔に息を吹きかけた。俯いて垂れた前髪が微かに震える。人差し指を長く伸ばして母の頬に触れた。母は「亮一：」と眉根を寄せてこちらを見た。ほんの冗談のつもりだった。それはスーパードレジの精算の終わるのを待っているとき、そこらの商品を勝手にいじくっている時の低く唸る「亮一：」とは違っていた。他人にはけつして聞かれることない声だった。父親はどこにいたのだろう。そうだ。台所のテーブルの椅子に座り静かにこちらを見ていた。テレビをつけていたはずだが、いつも父親の瞳には俺が映っていた。

亮一はテーブルから小さなコップを取って、駱駝色

のマサラーチヤイの芳烈な香りを胃へ流し込んだ。そして硬いベットに横になった。

次の日、宿の主人に誘われて映画を見に行った。「時に喜び、時に悲しみ」というタイトル。入ると、男の席と女の席が分かれている。へんてこなミュージカル映画。歌と踊りと笑いと涙の三時間半。馬鹿馬鹿しさを十分に堪能した。主人と別れてバザールを見て回った。人混みのなかで髭の男に声をかけられた。日本語と英語のちゃんぽんである。

「坊ちゃん、どこからきた？ 日本？」

「日本」

「日本人、知ってる、知ってるよ、山田さん、でしょ？」

「NOだね」

「何しに来たの、てめえ」

「仏跡巡り」

「ファンキー、マジック、ショー、みせるよ、カムカム、てめえ」

汗染みた白シャツ髭の男は亮一の肩を押して椅子に座らせた。

男は微笑んで、傍らの分厚い本を取り出して、亮一

の前に広げた。

「てめえ、マナーはさんで、千円、千円挟んで、そしてこのペーパーに、ラブの人ね、名前書いて、その子にミートだね、会えるよ、ほんと」

男は鉛筆を渡してきて、後ろ向きになった。亮一は千円札を出して、紙に恋人の名前を書いて、本に挟んだ。

「挟んだか？」

亮一が返事をする、男は振り向きウィンクした後、本を両手で持ち上げくりと一回転させて恭しくテーブルに置いた。

「じゃ。本、開いてみるや」

本を開くと、千円札が消えていた。挟んだはずのお札がどこにもない。男はにつこり笑った。

「どうだ、マーベラス。スペシャル、マジック、すごく、ない？」

「では、本番。占ってやるわ、あなた、もう一度、千円、挟む。てめえのラブの人、会わせてあげる。でも、千円、もう一回。続き、する、てめえ」

男は笑った。亮一は怒った。騙されたと思った。もちろんインチキに違いない。しかし行方不明の恋人の陽子の消息を探しにきたのがどうして分かったか。こ

いつは俺の心の中が読めるのか。恐山のイタコは霊を呼ぶことはできないが、目の前の悩める人の微妙な表情、身振りや口調から無意識の心を読みとることができらしい。こいつもそうなのか。しかし金は取り戻さなければならぬ。

「続き、聞きたくない？ 呪われるぞ、てめえ」

男の手がしずかに蝙蝠型の松葉杖を抑えた。

「金、返せ」

亮一は男の手を振り払い、松葉杖を鋭角に動かして、男の脇腹を突いた。男は悲鳴をあげて道に転がった。亮一の体は危険を察知した蜥蜴のように素早く動いた。男に馬乗りになった。

「今度は、てめえの目玉、突き刺してやるぜ、金出せ！」

「お金、返せない、ソーリ、残念……」

男は怯えていたが、しぶとかった。亮一は松葉杖を地面に突き刺してジャンプ。そうして軽金属の装具を男の首へ落下させた。「ぐわっ……」男は震える手でシャツの袖口から千円札を出してきた。男の手から金をむしりとる。なおも装具は首を押さえ続けている。

「許して……てめえ……」

亮一は男を離して立ち上がった。



「すまない……助かった……続きを、フリー、占って、やる……」

髭の男は、眼を半眼に閉じて静かに亮一を睨むと、低い声でつぶやいた。

「ここから……ノウスへ……十キロ……、カルロスホスピス……ある。ビルのしたにストウ・パ……ある。そこへいけば、てめえ望んでいるもの……見つけられる……俺の占い、当たるんだぜ……」

「けつ、ホスピスなんか用はない」

「信じる、そこへいけば、わかる、じゃあな、てめえ」

髭の男は、首を押さえながら立ち上がると、また日本人のカモを探しに往来に出て行つた。亮一はそれを横目で見て、地面に唾を吐いた。

哲学書や仏教書をよく読む亮一だったが、仏跡に関心があるわけではない。

亮一が遙々バンコクに来たのには訳がある。亮一の恋人、といつてもまだ三ヶ月しかつきあつていなかったのだけれど、その彼女が突然行方不明になつてしまつたのだ。あまりに短い春。亮一は散々探し回つたが、見つけれなかった。煙のように消えてしまつたのだ。

亮一と陽子とは、職場で知り合つた。亮一は特別支

援学校の高等部から地元の国立大学に推薦で入り卒業後障害者枠で大手A社に就職した。その総務部にいたのが陽子だつた。亮一の二つ上だから、二五歳である。陽子は積極的に亮一の携帯番号を尋ね、終業時の帰り際、亮一の松葉杖に密かに手紙を結びつけた。た。「やつとみつけたわ。わたしの理想の人、こんなふうに出会えるなんて奇跡みたい」。毎回デートするたびに眼を輝かせて陽子は言つた。モデルのように長身で首が長い。切れ長の眼に、ぼつてりしたエロチックな唇、括れたウエストに、ようすのいい長い脚。なににより表情が明るくて屈託がない。高いものではないがとてもセンスのいい服でいつも身を包んでいた。男性であればだれでもすっかり魅了されてしまうような女なのだ。こんな女性がどうして亮一みたいな身体の獰猛で酷薄な性格な人間を好むのか、わけがわからなかった。しかし事実は小説よりも奇なりだ。現実には何が起こるか分からない。

陽子の友達の情報によれば、陽子がある目的をもつて相当な額のお金を貯めていたらしいことがわかつた。友達のとてをたぐり寄せ、半年後によくわかつたことは、それは海外へいくためのお金であるらしいというこただ。

そんなある日、会社の仕事机でぼんやりしていたら、いきなり「ぼけなすくん」に話しかけられた。

「あの、君、陽子ちゃんと親しくしてみたいんだけど、彼女どうしたのかな、最近みてないし」

出世の見込みもない「ぼけなす」とあだなされる窓際社員なのだ。仕事で失敗すると「ぼく、ぼけなすな」で、すみません」と謝ってばかりいる。一人だけで壁際の机にいて、スマホをいじくっている。で壁際族とも言われている。

亮一は、ぼんやりしたまま、「ぼけなすくん」を見上げると、彼は手に分厚い本を持ってこちらに渡そうとしているようである。

「この本、陽子ちゃんに借りただけだね、なかなか読めないんで、もしよかったら、返してくれないかな、んん、じゃ、頼んだよ」

彼は返事も待たずに、本を机に置いていってしまった。

本のタイトルはと見ると、

『魂の住処／コンミン・アラテン講話集』

（スピリチャル系の本だな、へえ／陽子こんな本読んでたんだ、知らなかったなあ）

筆者紹介のページの巻末の著者紹介のページを覗く

と、

コンミン・アラテン

一九四九年 タイ、バンコック生まれ。

△△高校時 全タイ国弁論大会 最年少で優勝。四十歳の若さでタイ国立○○大学哲学科教授となる。著作は西洋哲学と東洋哲学を横断する独特な視点で世界を驚愕させた。著作は世界四三カ国で翻訳されている。

二〇二三年 七月 自宅の庭で突然光明を得たと全世界に発表し大学を退職、現在タイ国バンコク郊外でコミュニケーションを経営しており、全世界から彼を慕う若者が集まってきている。

著者の顔写真は掲載していなかった。

（む、二〇二〇年 七月）って、三年前だあ。もしかしたら「全世界から彼を慕う若者が集まってきている」：もしかして：タイ国、バンコクか：）

亮一はもちろんコンミン・アラテンの人物について調べた。彼女が「ぼけなすくん」に貸したという本も読んでみた。コミュニケーションの場所も特定した。ネットで配信しているコミュニケーションの参加者のコメントも毎日チェックしている。

（しかし「ぼけなすくん」にこんな分厚い本、読める

はずないよな。陽子、わーかんないよなあ)

しかし、何か虫の知らせを感じた亮一は、胡散臭い髭男の占いを信じたわけではないが、彼の言う「カルロスホスピス」に寄ってみることにした。というのは、コンミン・アラテンのところに行き、自分の知らない陽子にいきなり面会してしまうのが怖かったのである。

バスを乗り継いで訪ねると、「カルロスホスピス」は美術館のような小洒落た外観の病院だった。

二重の自動ドアから中に入ると精悍な働き蜂のように白衣の医者や看護師たちが忙しく立ち働いている。受付で案内を請うと、水色のキャップを被った看護師が現れた。アラブ系の切れ長の眼である。看護師にしては頬紅が濃い。完璧な美女は腰を屈めて亮一と視線を合わせてきた。

「はい。患者さんですか。ご予約はなさってらっしゃいますか、こちらどうぞ…」

綺麗なイギリス英語で話しかけてきた。早足で歩く看護師を追いかけながら亮一はすまなそうに言った。

「いえ…、患者とか、じゃ、ありません。実は仏跡の巡礼に来たのです。この病院の地下にストウパーがあるとか…本当かどうか知りませんが…」

看護師はいきなり立ち止まり、金属の装具と蝙蝠型の松葉杖をじろじろ眺めた。

「失礼しました。お体を拝見して、てつきり。では患者さんではないのですね。緩和治療のためにこのホスピスに来られる方でもずいぶんと元気な方もおられますので、では仏跡巡礼の方々の為にゲストルームもありますけど…でも…地下にストウパーがあるってこと、どこでお知りになったのですの？ この仏跡のことはあまり知られていないのですのよ。関係者以外は」

「どうも運命らしいのです。やぐざな町の占い師に出会いましてね…」

亮一は口ごもりながらやっとこれだけのことを言うと、情けない作り笑いをした。看護師はなんとなく納得したようでよかった。自分でもあんな占い師に従ってここへ来たことをなんとなく後悔し始めていたのだ。しかし心の中で「あれ、本当にストウパーあったぞ、まんざら全部嘘ではなさそうだ、やったね」と喝采を叫んでいた。

「ほほほ…どうぞ、こちらへ、さあ、どうぞ。院長から巡礼の方には特別丁寧にと言われておりますので」

看護師は軽快に歩いた。素足に履いたスパンコールの革サンダルは磨き抜かれたリノリウムの床をすべるように進んでいく。

「ストウパーは、地下にあるのです。とても古い時代にインドからこちらへひそかに移築されたとのことですよ。どちらからおいでになられたのですか」

「日本から」

「失礼ですが、パスポートとか身分証明書をお持ちですか？ というのも時折、めったにないのですが、ただで宿泊まりしようとして、どこからか情報を得てくる方があるものですから」

亮一は歩きながら、首につるしてあるパスポートを見せた。看護師はそれを確かめると、一つ頷いて、

「よろしゅうございます。それはそれは遠いところから、ごゆっくりしていらしてください。仏跡巡礼の方は世界各国からいらつしやいます。それも裕福な特別な方ばかりです。もともとこのホスピスは巡礼の方の宿泊所として建てられたものでした。そしてこの病院も巡礼の方の寄付によつて建てられたのです」

「ホスピスって終末医療の施設ですよね」

「ええ、末期の癌患者さんが多いのですが、痛みを抑えることと、心のケアが中心ですね」

「でも、なかなか忙しそうですね」

「いろんな患者さんがいますから、治療はしないわけではありません」

「美術館みたいですね。廊下も、部屋も素晴らしい絵画が飾つてある」

「院長の趣味ですわ」

看護師と亮一は病院のなかを通り過ぎると、古びた階段の前へ出た。

「ここから下にストウパーの遺跡がありますのよ。ではご自由に、帰りは受付で声をかけてくださいね。お部屋にご案内しますわ」

看護師は去つて行つた。

ストウパーへの階段を降りていくと、地下の土臭い冷やかな空気が流れてきた。案内の英語のプレートが所々にあって、前に立つてボタンを押すと説明用の音声が流れる。説明を聞きながら回っていると、一人の先客に気がついた。ずんぐりむつくりした中年の男でオレンジ色の僧衣をまとっている。

赤い石の井戸の前で声をかけた。振り向いた顔を見てびっくりした。明治維新の元勲西郷隆盛にそっくりなのだ。もし犬をつれていたとしたら、まるで上野恩賜公園の西郷どんの銅像だ。

「どちらから？」

亮一は笑いを押しこらえて鼻をうごめかした。作り笑顔で話しかけていた。亮一から見知らぬ人に話しかけるのは珍しいことだ。西郷どんは周りを見回してから、

「わたしですか？ わたしはこの住人です。あなたは？」

男は正當的な英語ですらすらと答えるのである。ずんぐりむっくりな体型にしては明敏な頭腦の持ち主のようだ。しかし亮一はなんとなくトンチンカンな返答のように感じた。

「日本から。仏跡巡礼つてとこですかね」

「失礼ですが、そのお体で大変でしょうな」

西郷どんはぎよろりとした眼で亮一の脚の装具と松葉杖を見た。

「お若いのに、いろいろご苦労されましたな」

「いえ」

「あなたに言うのもなんですが、わたし悟りましてね。そう、エンライトメントです」

西郷どんは舌なめずりをして得意そうに言った。實際一瞬舌を出してあかんべーしたように感じた。

（また厄介な嘘つきに会ってしまった。この男はどう

も自分の悟ったことをここへ訪れる人々へ自慢して歩いているのではないか。俺はまたしてもいいカモなのではないか。さっきの看護師どうしてこの男のこと教えてくれなかったんだろ。知らせに戻ろうか。さてさて…）

「悟る？ お釈迦様のように涅槃寂靜つてやつですか」

亮一は胡散臭いとは思いつつ尋ねてしまった。すこしからかつてやろうとも思った。

「さよう、まあ、釈迦は生き残つて教えを説きました。が、あれは全くの偶然でした。だつてあなたも知つているでしょう？ 釈迦だつて夜明けの明星をみて悟つてすぐ自殺を考えたことを。だつて人生の目的、生きる目的をですね、これ達成したわけですから、もう生きることはないですよ。お分かりますか。いけば目的がなくなつてしまったのですからね。実は釈迦の後にも、先にも悟つた人はいくらもあつたのです。わたしの知つていただけでも、たくさんいますね。五十三人くらいはいる。でも教えを垂れずに死にました。NO垂れ死になんちゃつて」

西郷どんは濃い髭剃り跡を撫でながら下品な笑い方をした。亮一の頭の中に五十三人の釈迦牟尼が次々と

自殺していくイメージが浮かんだ。

「ええ、みんな仏陀になって自殺しました。だってそうでしょ、生きる目的を果たしたんだからね、生きる必要がない。これ自然のことでしょ、死がね。幾たびの季節を生き抜いて熟したオリーブの実が、ある日、その重みのせいで枝から離れるように地に落ちる、です」

「そうかなあ、なんか違いますか。人間ほつといても死ぬんだから、そんなら悟らなくてもいいような。

ゴールが死ですから、ね。でもね、悩みがなくなつて幸福の絶頂なのでしょう、なのにどうして自殺なんとするんですか。わかんないね。なんかイタイ」

西郷どんは巨体をいきなり亮一に近づいてきた。亮一はびっくりして一歩後退した。巨体は意外にも敏捷に動く。亮一の耳にひそひそ声が届いた。

「邪魔が入るのですよ。それが、うるさいんです」

「邪魔？」

「むろん言葉通り邪魔するやつです」

「というと、もしかして、悪魔とか、堕天使とかつてやつですか」

「そうです、もうすぐ来ますよ」

「誰が？」

「だから、悪魔が……」

「へえ」

亮一は小学部のとき学校の図書館でお釈迦様の絵本を見たことがあるのを思い出した。暗い洞窟かどこかで座禅をしている。黒い顔のお釈迦様のまわりに身体をくねらせてちかようとする蠱惑的なインドの美女たち。半裸の体を豪華な宝玉で飾っている。お釈迦様を誘惑するためにきたものらしい悪魔の化身たちだった。子ども向けの絵本にしてはどぎつすぎる極彩色の挿絵が載っていた。内容はともかくその絵が長く記憶に残っていた。お釈迦様よりよっぽど魅力的で印象的なこととして……

このストウーパのなかで、絵本と同じような悪魔の化身の美女たちが現れるのだろうか。亮一はむしろそっちのほうが期待したい気分だった。

「仏陀になるのってどんな気分なんです？」

「面倒なんですネ。とても一言で言えないし、全世界の言葉を集めてきても表現できないって言うか。あなたに説明してもわからないでしょう。残念ですが……とても言葉で表現できない。『考えるな、感じろ』ってなとこかな」

「どこかで聞いたような言葉ですね。でも知りたいで

すね。どうしても。何を悟ったのか、それってこの世の真実ってやつですね」

「面倒ですね。とても。これから静かに死ぬんですから、黙っていてくれませんか」

西郷どんは手を振りながら、離れていった。「面倒」と言われてカチンときた。亮一の眼に赤い稲妻が走った。

「この野郎！ 言え、言え、言え言え言え言え言え言え、言うんだ！」

亮一はナイフを西郷どんの首に突きつけた。

「いや、いや、やめてください。わたしは静かに自殺したいんですから、殺されるのはたまらない。やめて、こら、こらこらこら、やめろ、馬鹿！ あぶないでしょうが」

西郷どんは真つ赤になった。

亮一は右手で持ったナイフをユラユラさせた。護身にバザールで買った果物ナイフだった。細身のナイフは暗い地下室の壁に反射して魚の腹のように輝いた。「そんなに死ぬのが怖いんか！ 自分で死ぬのも、人に殺されるのも、死ぬんだから同じだろ！ 悟ったくせに！」

「死ぬのが怖いんじゃない！ 殺されるのが嫌なんで

す。わかりませんか」

「悟っても？」

「もちろん、悟ってもひとりの人間であることは変わりません。嫌なことは、嫌です。わたしは。それは究極的に言えば好みの問題かもしれませんがね。死ぬのは自然なことでは怖くはありません。自殺もその延長線上にあります。食事したり、排泄したり、愛したり、着物を着たり……、みんな自分の意思でやっています。自殺も同じ、自分の意思じゃないですか。でしょ？ いわば日常生活と同じです。殺されるのとは訳が違う。殺されるのは人工的な作為です。あなた、生まれる前どこにいました？」

「はあ？」

「生まれる前、どこにいましたか？」

「そんなのわかるわけないだろ」

「生まれる前、怖かったですか？」

「ん？……」

「怖くなかったでしょう。そこへ帰るんです。死は生まれる前に帰るだけ……それだけのことです。怖くもなるともない、でしょ？ 死ぬのは当たり前前の自然のことです。怖くもなんともありません」

亮一は西郷どんの体から手を離していた。

「いま、愛したりといったね。あんた愛した人いるの？」

「もちろん、人を愛さない人が悟ったりできるものですか」

西郷どんはどんぐり眼をぐりぐりまわしながら言い、ニッコリした。

「あんた女を抱いたことある？」

亮一は嫌らしい眼になって突っ込んだ。ナイフはもうポケットにしまい込んでしまった。

「ありますよ。男ですからね。釈迦だって王子のとき何百人と女を抱いたのでしょうか。子どもまでいて「ラフラ」(邪魔者)という名前をつけた。邪魔なら結婚しなければいいんじゃないか。具の骨頂ですね。そのくせ弟子には姦淫はよせ、嚴禁だよということにしましたが、男に男根があるのはなんのためでしょう。女の陰門に突っ込むためでしょう。キリスト教の異端のロシアで盛んだった去勢派のように切り取るにはおびません。男根も陰門も神が作られたものですからね。釈迦は間違いだらけの人生を歩みましたね。それが彼の教えを説く遠因になったのでしょうか……、ふつうだったら、何も語らずに死にますね。ご存知のように学者も宗教家も文士もやくざな代物で、この世を

惑わす蛆虫みたいなものですかね。どんなに真剣に真実を語ってもきつと誤解されて、善良な人の人生を間違えさせる基となるのですから。キリスト教徒の魔女狩りや十字軍の遠征の虐殺、遠く日本の戦国時代の本願寺も結局のところ時の権力とぶつかって大量虐殺を招きました。人間の浅知恵はどうしようもありません」

「あんた神、神というけれど、仏教には神はいないんじゃないの」

「ええ、その通りです。神なんていません。金輪際ね。だから言ったじゃないの、言葉で説明するのは難しいことだと。神は死んだあーです。あなたにわかりやすく言っただけです。言葉は難しいですね。大宇宙霊とでも言い直しましょうか。造物主といってもいい。仏教は哲学です」

亮一は西郷どんの話を聞いていて、なんか胸くそ悪くなってきた。日頃考えていることをぶつけてみたくなった。

「よくわかんねえーけど、仏陀が悟ったっていう内容はこんなじゃないの。誤解してるかしんねえーけどね。一言で言っちゃうと、人間よ自然に還れ。エゴを捨てなさい。鳥や木や魚や花と一緒に仲良く生きな



さい、ということになるんじゃないの。殺すことはよして、肉食はせずに、少なく食べて、少なく呼吸して、瞑想せよ。とにかく静かにしているということだろ。

でもエゴをもった我執の塊の人間がとでもできることじゃない。理想だよ。絵に描いた餅。考えても見ろよ。人に功名心や競争心がなくなつちやえば、経済、学問、政治をどうやって維持、発展させるの。みんなが坊さんみたいになつちまったら、全人類が乞食集団になったら、乞食に布施するものもいなくなるよね。仏教は姦淫を禁ずる。それじゃ子どもが生まれえない。実際、『生、老、病、死』四つの人間の苦しみをあげているけど、人間の苦しみの出発点に生まれることがある。人が生まれることを苦しみに数えている。生まれることを祝わない。子どもを産むことを否定している。中国の一人っ子政策より酷いね。なぜか。なぜこんなことになっているのか。他の生物との共生、食いつ、食われつの生命循環、一人勝ちのない世界。それで動的平衡している世界だよね。このなかで人間は頂点に君臨している。そしてこのサイクルを壊すのは自我を持つた自己中心的な人間だけ。だから自我を捨てて生命サイクルの循環のなかへ、自然へもどっていかなければならぬ。釈迦はそれに気がついた。しかし、それは

人類滅亡を企図したことと同じだわ。だから自殺も肯定されるわけよ。だって生命循環のサイクルのなかで一番サイクルを壊しているのが人間なんだから、自ら滅びればこんなよいことはない。

やつぱ、悪魔が必要なんだよ。悪魔は闘争心を煽り、姦淫を勧め、揉め事が大好きで、決まりごとを破り、新しいいたずらをしでかし、自己中心的な行動で周りに迷惑をかけ、秩序を紊<sup>びらん</sup>乱し、酒を飲んで酩酊して馬鹿騒ぎをする。この悪魔のそそのかしのせいで人類は生き延びているんじゃないの。でもこれも過ぎれば人類滅亡に繋がるかもね。どうでもいい、俺、何度も自殺考えたけど、豚みたいな俺だが、できなかった。……」  
亮一は一気に喋ると、急に口をつぐんでしまった。  
「仏陀の教えを批判して得意なようだけど、あなたは大切な教えを忘れています。中庸：極端に走らないという教えです。光が部屋に入ると闇は消える。これは光と闇が争っていると言えますか。光があれば闇は自然と消えるのであって、あなたの心が闇で、悩みで閉ざされているから、極端な論理に酔うのです。智慧がないからです。まだあなたが人生でやり残したことがあるから死にたくもないし死ねないのです。この世に無駄なものなんてないのです。わからないでしょうか。

これは真実です。さきほどもいいましたようにオリブの実が熟せば、しずかに枝を離れる。熟すというところが枝を離れる機縁となる。熟さなければ落ちるに落ちられない。本来死は必然で喜ばしいことです。これが死の本質です。悩み苦しむのはあなたがまだこの世でする仕事、学ぶことがあるからです。あなたの心の中を静かに覗いてみるんですね。死ねない理由がみつかるはずですよ。だがわたしはもうなくなつた。すべてを学びとつたからです。それから言つときますが、豚も人間と同じ知性がありますよ」

「ちえつ。どうしてすべてを学び悟つたと言えるの。俺に証明してみろや。さあさあ。やつぱり詐欺師ですよ。いったい誰があんたの言っていることが本当のことだと証明するの」

「証明するものは残念ながらその反対のものです。悩める、嫉妬に狂つた、おぞましい邪悪な魂、つまり悪魔です。悪魔がここへくることによって、わたしが仏陀たることが証明されるのです」

「悪魔しか証明することができないのなら、つまりは同じ穴の貉<sup>むじな</sup>じゃないの。悪魔を認めてあげるのも、あなたというにもなる」

「そういうことです。二元対立の世界ではそのように

しか証明できないのです。あることを反対したり、否定すれば、その否定するものに力を与えていることになる。つまり神と悪魔が協力してお互いの存在を助け合い、証明しあっているのです。あなたはよくお分かりですね。言葉の世界ではそのようにしか言えないし、もし本当のことを言おうとすれば、黙るよりほかないのです。信ずるしかありません。しかし、信ずる力は疑いからくる。疑いがなければ信ずることはできない。いやはや困りましたな。あなたは信ずる力がありますか。わたしは信じさせるのは難しいと思います。それに邪魔くさい。釈迦は優しい人でしたね。本当に」

「世の中には苦しんでいる人々で充ち満ちているよね。この哀れな民衆をほつといいいの？」

「その民衆というのはどこにいる？ あなたの頭のなかだけでしよう。生きていくということは、自分で自分の道を見つけるため。人に教えられてその通りに動くのはロボットです。人間ではない。世界人類が幸福で愉快にすごすためにはどうすればいい？ 簡単なことですよ。その構成員のひとりひとりが幸福になりさえすればいい。そこでできることはまず自分が幸せになること。ここが一番肝要なところです。一番責任のあるところの自分をよくすること以外にありません。」

世界中の道を裸足で歩きたかったら、世界中の道に絨毯を貼る必要はありません。自分の足の裏に絨毯を貼ればいいのです。お分かりになりますか。

苦しんでする民衆をどうするか。なにもあなたに言われる筋合いのことではないですね。あなたは一体これまであなたのいう苦しみに満ちた民衆になにをしてきたのです。毎日腹一杯食べ、なんの働きもせず（失礼）お仕事はお持ちでしたね、本はたくさん読んで、受験勉強して、たくさんの人を蹴落として、大学に入った努力は認めましょう。しかし考えてご覧下さい。脚が不自由だということで、どれだけの人々の助けを得てきたか。それにも関わらず、その多くの助けにくれた「民衆？」に何をお返しになったのですか。そう思いますけどね。こういったちゃんだけど、あなたの父も母もあなたが不幸にしたのではないですか。「なに！俺は何も悪くないよ。医者が手術に失敗してこんな体にしたんだ。俺はあの医者を恨んでいる」

亮一は怒りにまかせて叫んでいた。が、西郷どんがどうして亮一のこんな私事のことを知っているのか、なんとなく不思議な気がした。

「その医者だって、別にあなたをそのような体にしようと思って手術したのではない。あのまま放っておい

たらどのみち脳が圧迫されて命はなかった。しかし、その脳を圧迫していたものが問題ですが、これはのちのち明らかになるでしょうが。医者はあなたを助けようとした。失敗を省みず挑戦したのです。あなたの父も、母も同様です。あなたを深く愛するが故に離れていったのです。これが真実です。あなたはあまりに愛されたのです。そうでなければ……」

「黙れ！」

何で知っているんだという疑問より怒りが爆破した。西郷どんはまるで近所の人の噂話をするように亮一の父母のことを語った。

「じゃ、父はなぜあなたから離れたか。あなたの父は、あなたにころからすまないと思いい毎日毎日血の涙を流していたのです。気の弱い優しい性格だったのです。危険な手術を決断したのは父でした。母は反対していたのです。あなたの父の同僚の女事務員が父の痩せ細るのを心配して相談にのっていました。そこで間違いが起こったのです。女事務員は優しい心根の素直な人でした。あなたの父を心から愛してしまったのです。可憐な女は必死であなたの父を慰めようとしたに過ぎないのです。しかしあなたの父は自分が許せなかった。こんな自分がいてはあなたにすまないと思ったのです。

それであなたから離れていったのです。また母はどうだったのでしょうか。自分の胎内から生まれたものを可愛くないことがありますか。母親とはそういうものです。血のなからあなたをすくいあげ自分の乳房を与えて育てた命なのです。あなたの身が傷つけば、母も同様の痛みを感じました。母はあなたが小学部四年のとき、道路で這い回って膝から血を流して道路中真っ赤にしてへらへら笑って遊んでいるのを見て、どんなにおどろいたことでしょう。毎日毎日あなたを見て、苦しまなかったこととてない。涙を流さなかった日はないのです。それが彼女の精神を病ませ、新興宗教に走らせ、あの教祖の言いなりとなって、家を出奔したのです。これとて、あなたを助けるためです。あなたの病気を治すという条件で、あのろくでなしの教祖に身を捧げたのです」

「いま、母は、どこに？」

「しばらくは精神病院に入院していましたが、いまはなんとか働いています。毎朝三時に起きてね。身も心も疲れ切つてね。寝る前には貧しいアパートの天井を見つめてあなたのことを思つて泣いている。哀れですね。あなたはこの母を恨めますか。この悩める母や父のためにあなたは何をしてきたか。多くの悩める民衆

とかという空気のような幻想の上に乗つかつて、のうとうつつを抜かしてただけではないんですか」  
「えい、黙れ！ くそくそくそ、黙れ！ 糞坊主！」  
松葉杖を放り出して、身を床に叩きつけた。

「しかし、そんなに酷い話ではないですよ。というのはあなたも、あなたの父も母もまだ生きている。探し出して罪を悔いることができるのです。きっと許される時がくる。その機会は残されているのです。いや……悪魔が近づいてきています。わたしには時間がない」  
そう言うとき西郷どんは、僧衣を端折つてそばの赤い井戸へ身を躍らせた。あつという間の出来事であつた。西郷どん、いや仏陀は予告通り自殺を図つたのだ。亮一は井戸の口まで這つていき、なかを覗き込んだ。

（前編終わり）

## 二人の話

藤野 繁



佐伯<sup>しげ</sup>繁<sup>る</sup>留<sup>る</sup>は広告営業マンとして四十数年、<sup>おびた</sup>夥<sup>た</sup>しい数にのぼる人間を見てきた。

その中の二人について話をしていこう。

二人とも男性だが、共通点があった。手首から先だけが女性そのものである。

女性のようにすらりとした手をしている男は、いわゆる「女たらし」とどこかで聞いたことがあるが、真偽は定かではない。

体つきは二人とも身長百七十センチ前後、体重七十キロ程で、普通の紳士である。

一人は、パチンコチェーンの広告担当、Y企画課長である。今はもう七十歳近くと思うが、繁留が出会ったころは、四十代半ばであった。

富山県内で四十店舗ある店の、新聞広告、テレビCM、折込チラシや装飾看板などを部下二人に指示しながら、テキパキ仕事を進めていた。

初めて名刺交換した日、繁留はビクツとした。鍛えた体つきとはあまりにも対照的なすらりとした手を見て「義手」だと思ったからだ。

初めての挨拶ながらY課長は、饒舌にしゃべり始めた。

「佐伯さん、私はね、ルネス金沢の広告部長を務めていた。個室と自分の身が隠れるほどの高い黒皮張りの椅子を与えられ、有頂天で仕事をしていた。年間五億円以上の広告を使っていたからね。」

でもね。会社が苦しくなったことはすぐに察知できた。施設が痛んでも放置するようになる。人間と同じで、だんだん錆びていく会社は危ないと思った方がいい。

まして夢を売るレジャーの会社だもん。俺はすぐにSグループに転職したよ。

俺は広告宣伝力のチカラを改めて知ったね。潰れたといってもルネスの広告部長で通る。一発で決まってる採用になったんだ」

繁留がSグループへ何度か訪問し、仕事の流れもようやく軌道に乗り始めたころ、Y課長は仕事の話もそこそこに、繁留と二人で飲みに行こう、とやんわり誘ってきた。繁留の前任の柳原やなぎはらから「Y課長はとんでもない男だ。あの飲み方は素人ではない。佐伯さん気を付けなさい」との申し送りが頭をよぎった。

繁留は担当となつて一か月も経たぬうちに、Y課長

と二度飲みに行き、二次会、三次会、その次と、朝方まで付き合わされて、一銭も負担して貰えぬまま一晩で十五万、二回で三十万の散財をする羽目になった。コツコツと貯めていた労金の積立金をこそと下ろしたとき、もうY課長と付き合えない、と思った。

Y課長は繁留の態度を察したのか、今度は繁留の背後にいるメディア社、つまり新聞社やテレビ局の担当に声を掛けた。ところが彼らは用心深く、一対一では飲みに行かなかった。代理店担当の繁留を必ず「かませる」のである。

繁留は出来るだけ機嫌を損ねず、メディア社と負担を分け合う形で、二か月に一回程度はY課長と飲みに出掛けた。五年間の担当のうち、出費した数百万円は手痛かったが、Sグループは年間三億円の大スポンサーである。

極端な話、それ以外は何もしなくとも、会社は何も言わない。それを守っていくのが繁留の役目なのだ。良い勉強をさせてもらった、とY課長に感謝する気持ちになった。

機嫌さえ損なわなければ、年三億の広告取扱は入ってくる。毎日毎日汗だくになりながらも一万、二万と細かい数字を積み上げている営業マンから見れば、あ

る意味、天国である。

ところが異変は起こった。

代理店の仕組みを大筋知っているY課長がSグループ内に、Sグループと取引先の広告物を一手に引き受ける、企業内エージェンシー（ハウスエージェンシー）を作ろうとしたのだ。繁留の地鉄広告社だけで年間三億の取引である。ホームページや動画の制作、チラシやポスター、屋外看板などを含めると売上五百億の約一・五%、7億5千万円の宣伝広告費を使っている。仮に十%の手数料を計上してとしたとしても七千五百万円がSグループに残る。

Y課長は、その計画を自信満々にSグループ社長に提案した。

「なあY課長、お前、Sグループと地鉄広告社の歴史を知ってるのか。県の公安委員会で、営業停止の処分を食らったSグループに、当時の公安委員の地鉄社長が早く救済してあげないと五百人の社員が路頭に迷う、と提言して早く解除できた。恩義がある地鉄の系列会社と同じ商売をしちゃ失礼じゃないか。そう思わん

か」

Y課長は、必死に説得しようとしたが頓挫（とんざ）してしまい、「お前、あがれ（辞めれ）や」と首を切られることになったのだ。

商売というのは、人と人の心の循環である。

自分の会社のスケールをバックアップにしてトンネル会社を作って、泡銭（あわぜに）を取ろうとしたY課長が浅はかであつた。

そして繁留の広告社の年三億の取り扱いが、Sグループハウスエージェンシーに移行してしまう悪夢も、夢に終わった。

Sグループを退職したY課長は、桜木町で飲み屋を経営していたが、結局商売はうまくいかず、そのうち女遊びがたりたり、同棲していた女性に、鉈（なた）ですらりとした右手を手首から叩き切られてしまった。

もう一人は、スキー場の経営者である。

名前は田家（たや）守男。県西部のスキー場、サンタリゾーの社長であつた。

だいたい、新聞社やテレビ局を定年退職した人は、悠々自適（ゆうぜんじとく）にのんびり過ごしている人が多いように思う

のだから。

田家は新聞社の業務局長を最後に定年となり、しばらくは家でゆっくりしていた。

友人の資産家が船主権を探しているのを聞きつけ、父親が持っていた伏木の船主の権利を売却した。

金が一億あまり入った。

新聞社で定年まで二千万円ほどの積み立て貯金をし、退職金は約三千万円、合わせて五千万円の金に、さらに一億円の金が田家の懐に入ったのだ。

それに目を付けたのが、利賀村にある建設会社岡島組の社長、岡島進であつた。

岡島は田家と高岡高校の同級生で学生時代から仲が良かった。

田家が伏木の船主権一億を取得したことを聞きつけ、毎日朝からだらだと、酒ばかり飲んでる暇な田家の自宅を訪問し、一億五千万円出してのスキー場経営を持ち掛けたのだ。

一億五千万円は、スキーリフト二基とレストハウスの建設費用である。土地はほとんど岡島組が持っていた。

岡島は最初から計算ずくめであつた。

スキーリフトの建設もレストハウスも岡島の会社の得意とするところだ。どっちみち岡島の会社に建設費の利益が入る。

岡島の会社で自ら投資しようとしていたが、建設パブルの崩壊で、自社の手持ち資金が少なくなりスポンサーを探していたのだ。

岡島は田家にこう説明した。

「田家、スキー場は投資が大変や。だから個人会社でやる奴は確かに少ない。ほとんど自治体が税金を投入して建設する。

だが雪が順調に降れば、二億円の売上で五千万円が残る。

三年で一億五千万円の借金は無くなるよ」

田家は深く考えもせず、岡島の要請に応じた。

人生は短期で投資を回収しようとする人間にはほとんど微笑まない。

田家がスキー場経営を始めて二年間、肝腎のクリスマスから年末年始に雪が降らず、スキー場経営はさらに一億の借り入れを起こし、結局、スキー場経営は行



き詰まり、岡島の会社に二束三文で買い叩かれてしまった。

田家は自己破産は免れたが、たった二年で一文無しになってしまったのだ。

繁留は、二年間、田家が業務局長をしていたT紙の営業部長の紹介で、田家のスキー場の宣伝広告を扱うことになったが、雪のないスキー場はスキー場ではない。一円にもならない会社は会社として成り立たない。有名タレントを起用して、軽快なオリジナルソングを作り、数百万もかけて作った一年目のテレビCMが、ひどく虚しかった。

田家は繁留の提案をすべて受け入れ、一シーズンに一千万の新聞やテレビに広告宣伝を打ってくれた。雪がないからと、CMを中止することも無かった。

「そのうち雪は降るよ。佐伯君、先行投資やないか。CMは当初通りの本数を打ってくれ、絶対打ち切るな」

あんなに人を疑わず、善意ですべてOKしてしまう良い人は今までいなかっただけに、繁留は年末年始に雪のない二年間のシーズンを恨んだ。

無情にも雪の降らなかったお正月の三年目、サンタリゾートスキー場の事務所に田家さんを訪ねた。

事務所には誰も来ていない。仕事にならないからだ。もちろん客はいない。

田家さんは白くすらりとした手で静かにウイスキーを飲んでいた。美しい白い手であった。

琥珀の酒を口に運び、スルメイカを細く切って食べていた。目には涙が浮かんでいた。

「佐伯君、いろいろCM打ってくれてありがとう。感謝するよ。雪がなくて、よく分かったことがある。みんな俺が危ないと察して逃げていくんだ。物が欲しかったら金と引き換えだっていうんだ。ほんとだぜ。君は、その点、何も訝（いぶか）がることなく、気持ちよく対応してくれた。涙が出る思いだよ、今度は伏木の俺の自宅に君を招待するよ」

田家さんの姿を見たのは、それが最後であった。伏木の自宅に来说われ、一か月後ウイスキーの手土産を持参したが、家の名義も変わっていた。

以後、岡島組から支配人が派遣され、繁留が契約していたCMはすべて打ち切られた。

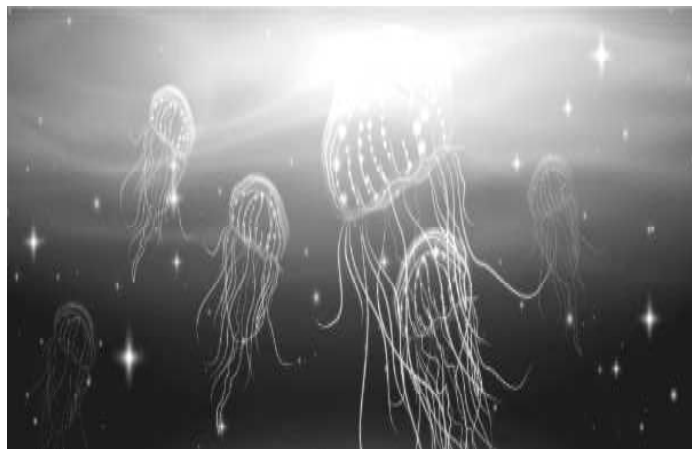
行き詰まっていた岡島組が倒産したのは、それから間もなくであった。

田家さんと契約していたCM一千万の内、半分の五百万が未回収金となり、佐伯繁留は魚津営業所に飛ばされた。

(丁)

## ぐにやぐによ

寺本親平



子供の頃、とは云っても小学四年か、五年くらいだったと思うのですが、山腹の我が部落には、東西南北、端から端まで生活臭というものが微かですが漂っていました。

まずはどの家々からも糞尿の臭い<sup>にお</sup>が漏れでてきているのです。それぞれの家の食習慣の違いによってそのうんこの臭いは異なり、互いに自らの家風を知らしめあっている感もありましたが、僅かに異なる臭気がその日の風向きや気温によって混ざりあい重なりあうと、村全体の象徴的な臭いとなり、屋号乃至隠語のような村名が定まるといふわけです。

当然四季によって臭氣に差は出ます。また嫁にくる女や出ていく男たちによっても同じことが云えるのです。総じて脂漏性の者は男女にかかわらず、足や脇はいかほどか臭いのが普通ですが、尿尿のほうはと云えば、その臭さに微妙な違いがあると想われます。

我が部落の者なら、昔からどこそこの誰の家のにおいだとすぐにわかるのですが、食べ物の種類や量まで知られ、貧富の差が顕わになると、代々に亘って差別化が始まるのは世の習いです。尿尿においても猫の排泄物に負けず劣らず鼻のもげるものもあれば、仄かな薫りが籠もっているものまで千差万別であります。若

い女の裾腋臭<sup>すそわきが</sup>ならば、微かに匂ってくる分にはそれを好む男衆も随分といると想われます。蓼喰う虫も好き好きと云うが如くにです。ですが我が部落の者は、老若男女を問わず、そうした都市生活者たちの臭い<sup>にお</sup>とはかなり異なり、低いにおいの数値しか出ないのは、永い年月の良質な野菜中心の食生活のおかげかと想われます。少数の、猪や熊の肉中心の山家<sup>やまが</sup>のヒトたちのことはよく分かりませんが……。

かつて京都の鰻鮓屋へ五年ほど修行に出ていたことがあり、主人の言い付けで白人の女性のお供をしてタクシーに同乗することがありました。乗りこんだときに息が出来ないほどの体臭に閉口しました。

咳きこみそうになるのを必至に堪えていたのですが、全身の毛穴という毛穴からあくどい体臭が滲みでている、その女の一生を慮<sup>おれ</sup>っている己を変だと訝りつつもとにかく世界一気の毒な女だろうと、生涯一回切りであらう稀有な体験にもかかわらず、相手のことばかり考えている自分がいました。

蓼喰う虫のなかにも、こういうのを好む者もいるのだろうか、否、決していいないと断言してよいと思うほどでありました。その女の後便所へ入るのは、煉獄へ堕ちるようなものでしかないだろうと確信致しまし

た。

因みにこちらはと云えば、勿論都会の人たちとくらべれば、脇も股もそれなりに臭い<sup>くさ</sup>ほうであつても大したこともなく、特別匂いに過敏な女でない限りは気にすることは無いと思つております。のんびりと何事にも拘りの少ない女は丁度都合がよくて、直ぐにこちらの脂性に馴染んでくれるからであります。

幼少の頃の我が家の厠は母屋のすぐ外にあり、巨きな樽に二枚の厚い檜の板が渡してあり、その上に跨がつて用を足するのです。一人の時は晴れやかな気分であつたのですが、家人の誰かが後ろに跨がつてくるとなれば、初めのうちは、尻の穴がこそばゆくなりました。祖父や父母や妹がやってきて、家族全員と一緒に息むことになれば、屎尿が噴出される音や響きでそれぞれのお腹の具合が分かるうというものであります。ですが、概ね誰がどこに跨がるかは決まつております。もし誰か部外者が、引き戸代わりにぶら下がった二枚の蓆<sup>むしろ</sup>の隙間から、なかを覗いたとしたら、その壮観な凄まじい用足し状態に度肝をぬかれ、その場で自分も小便を漏らしてしまひ兼ねないほど、傍目には異様なその景に度肝をぬかれること間違ひなしです。

そして更なる庄巻は太い荒縄が一本（この縄は木槌

で丹念に叩かれて綿のように和毛が膨らんで柔らかいのです、一枚の板の少し横に張られていて、ずっと昔から、それぞれが効き手を使ってその縄で尻を拭いてきたのです。

その上、天井の梁からは五本のロープが吊されており、尖端が一縛りされて握れるようになっていたのでした。

そんな光景に、最初は子供なら猶更尻込みするでしょうが、いつしか嫁にきた女などもうんこを拭くのです。うんこが乾いた部分に他の誰かの生うんこが重なってくるなどとはまず無く、自ずと各自が使う縄の箇所も定まり、用を足す場所も定まるのでした。

余程うんこの嵩が高くなならない限り縄の張りかえには至りません。ですがどうしても慣れない女などは、その上に襦袢布を巻いて使います。そして母や嫁たちが酷い状態にならないうちに、前の用水で綺麗に洗いおとしていました。食べ物ばかりではなく、排泄物においてもそれぞれ糞繋がり、家族の一体感が醸しだされるといふ按配でもありました。

少なくとも縄文や弥生時代の昔から連綿と続いてきた習慣でありましょうが、明治・大正の頃から、手頃に切りそろえられた糞すべが、一番前の木箱に堆く積

みあげられるようになりました。

そして昭和になった頃には、新聞紙を切った便所紙が用意されることになったのでした。新聞紙になった時は、ようやく文化的な家になったかと人並みににんまりしたものです。勿論五人が一緒に用を足すことなど、年にそれほど沢山はありませんでしたが、幾ら分厚い堅牢な板であっても、五人も跨がれば、撓りゆれてぶら下がっている縄にしがみついても眩暈がすることもありま

す。代々部落の長を務めてきた我が家でさえこの有様なので、他の家も推して知るべし、であります。

いつしか、親仁は母屋の南側に、大小の厠を拵えしました。そこで皆が用足しをするようになりましたが、親仁だけは相変わらず外の大桶の板に跨がっております。

そしてそれまで糞草きの屋根であった我が家も黒光りする瓦屋根に変わりました。

すると先陣を切った親仁に負けじと、在所のあちこちの屋根が真っ黒な瓦になっていきました。三十軒にも満たない部落が、眼下に拡がった扇状地のような山腹に点在する、中小の街道筋の部落に吸いよせられるふうに変わっていったのでした。

その街道筋から下のほうは海までまだかなり距離があり、浜辺伝いの漁師町が緩やかに続いております。

我が部落は**黒岩台地**と呼ばれている特種な河岸段丘に、村道を挟んで一軒一軒肩を寄せあつて建ちならび、その様は横に長く大蛇がのたくるように連なつて見えるのでした。

永い年月の間にどんどん分家してできた次の部落との間は随分と離れていて、何かの用事で出向くには徒歩で三十分はかかりました。そのため、縁者まつの村々はそれぞれ独立した気風がありながらも、孤立するのを恐れて左右の遠縁部落とは特に内情を知らしめ合っているふうでもありました。

昭和になつて、能登海浜道路後に【のと里山海道】と改名）なるものが造られ、平成に入ってから、従来の国道が少しずつ整備されていきました。北陸本線に並んで新幹線の工事が始まりましたが、能登線は廃れていくばかりでした。

昔から山林の緑に吊りさげられるているように望まれた河岸段丘の景色も次第に変貌し、過疎化の進む能登地方ではありますが、原発の誘致に失敗してからは、必死に新たな政策が試行されるにつれ、更なる暗黒模索の日々が続いているようです。

能登を開かずの間とし、各地に関所を設けたり、港の公安を設けたりして誰でも易々とは入れないように、資格を有した者だけが能登の恩恵に与るという発想の転換が出来ないものだろうかと思つたのです。それが定着すれば本当の意味で能登が豊饒の地になるはずですが……。

一番高い所に横並びに繋がっている我が部落群は、モンゴルやミャンマーの奥地で原始生活をしている秘境人部落と同じく、その存在を意識のなかでは不明乃至不在とされてきたのでした。といつても、実生活の面で交流が全くない訳ではありませんでした。

又、フン族と謂われ差別化されてきた我が部落群は、なだらかに滑りおりている段丘から隔絶され、断崖絶壁のようにそそり立つ**黒岩台地**へ下の部落からわざわざ上ってくる者はありませんでした。高地の野菜や果物が美味いのはどこでも同じですが、その格別美味なる物は被差別部落の者等が下の部落へ運んでいつて、三桁の国道沿いにあるマーケットの店主の云うがままに、そこに並ぶその時々のお品などや獲れたての魚介類と交換してきたのでした。あくまでも下のほうの者たちが主であり、空気と水以外はすべて下のほうが上であつたのです。

我が村の糞尿は畑地のあちこちに埋められている肥溜めで発酵して野菜などの肥やしになります。すべてが化学肥料の代わりをしている人糞になるわけではないので、残りは村の道沿いに造られたコンクリートの用水へ集められ、大きな溜め池のなかへ流れこみ、遠くはなれた緑地帯へ少しづつ染みていきます。因つて村の糞尿はほとんど下のほうの部落へ入りこまない仕組みになっているのです。この豊饒なる水は旱魃の時、下のほうの田圃へも、古来より緊急の救いの手を差し伸べてきたこともありましたが、それを感謝されたことは一度もなく、当然と云わんばかりの態度でした。

ひとつ野<sup>や</sup>、ふたつ野、みつ野というふうに、さんじゅうご野までの名字の家々が連なる我が部落は、中央の零野から反対側へ、壹野<sup>いちの</sup>、貳野<sup>ふたの</sup>、参野<sup>さん</sup>というふうに、三拾五野まで繋がっています。零野の我が家は真ん真ん中の要であります。

昔から小学校や中学校などにあたるものは無く、辛うじて寺子屋風の学舎があるだけでした。家々の男子はそこで実生活に必要な読み書きソロバンを初め、土木工学や建築学らしいことを覚えさせられました。要するに商売が出来て大工技術が身につけば、喰いっぱ

ぐれが無く、家は安泰というわけであります。

長男は家を守って田畑を耕し、どこへ持つていっても喜ばれて直ぐに完売する特産物を作ることに励んだのでした。それを売りにいくのは、次男、三男たちの仕事となりました。

昔から漁村や山間僻地では特に「結」とか「仮親」などという仕組みがあるように、ここでも長男同士が小さい頃から割りあてられた家と入れかわり、ひとつ野の長男は壹野の長男となり、そこで生まれ育ったかのように何の違和感も感じないまま暮していきます。

その期間は一年であつたり五年であつたり、それぞれの家同士の事情でばらばらだったのが当たり前でした。為に入れかわつた家同士の男と女が夫婦となつて子を為しても、本人達の意識には何の不自然さもありませんでした。

謂わば戦国時代の幼少の男女を配した政略結婚にも似て、一緒に過ごした年月が兄妹でもあり、婿・嫁でもありといった関係をつくり出していました。それでも中央の家と両端の家との交配が一番望ましかったのです。横一直線に拵げられた扇が、要を軸に逆廻転するようなものでした。出来うる限り同族間の近親相姦的なリスクを無くしようとする、無意識的な計らいだっ

たのかも知れません。

こちらには一卵性双生児の弟がいたのですが、産まれてすぐに我が零野家から東京へ出て、会社を上場企業にまで為した叔父の家へ養子に出されたのです。この場合だけはきちんとした儀式によって養子縁組という形がとられたのでした。彼は長じて宇宙物理学の權威にまで出世しました。

その弟はのんびきならぬ仕事为重ならない限りは、旧盆の墓参りを兼ねて欠かさず帰郷しました。そして、自分の仕事のことについて、素人のこちらが解るように優しく簡略に話してくれるのでした。

「地球上のどんな生き物にも鉱物にも、石や木なんぞにも、ニュートリノという目にみえん素粒子が降ってきとつて、それがありとあらゆるもののなかを通りぬけとるんやよ」

「農らの身体もけ」と驚いた顔をして弟を見遣ります。

「そうよ、生けとし生けるもん全部やて。草木も犬猫も残らずや。夜も昼もよ」

「そんなもんいつんかも浴びとつて邪魔ないがかよ」と訊けば、「放射能と違うさけ、なんとんないがや」と笑っている弟です。

「夜空を眺めりや、いっぱい星で埋めつくされとつ

されとつりやろ。けんど本当はあんなんじゃないがよ。まだ発見されとらん星座なんぞ、山糞ほどあるがやて。あの耀いとる星らちの間の黒いところがあるがやろ、あの耀いとる星のこがあるやろ、あここにたんと星の群れがうじゃうじよあるがよ」とちよつと得意顔でに云う弟でした。

「アインシュタインという名前は聞いたことがあるやろう」

「ああ、あのベロを出いて、目ん玉ひんむいとる写真の爺ちゃんやろ」と云うので、「そうや、あの人が予言しとつた重力波というもんが実際に発見されたんやて。ちよつこ難しい話になるけれど、質量を持った物質が存在すると、それだけで時空に歪みができて、その物質が運動すれば、空間の歪みの様子が変わり、それが波となつて伝播する。これを動波と云うんやよね。それを最近のマスコミが重力波と称して、盛んに報道しとつてなあ」と弟が話すのを、首を傾げて聴いているこちらを見て、「解るう」という顔をして覗きこむのでした。

それから後はビックバンという始原からどこまでも膨張しつづけている宇宙のことやブラックホールのこと、何やらこちらの頭がこんがらかるような組み紐理



論と云った話などを一所懸命にしてくれるのです。

最後に「スーパーカメラオカンデ」というのも新聞やテレビで見聞きしたことあると思うけれど、日本も海外の有力な国々に負けず劣らず、凄じ装置を岐阜県神岡町の、鉾山の地下二千メートルに造ったんよ。僕もその世界一の宇宙素粒子観測装置にや、ちよびつと関わったこともあるけれど、ありやあ、大したもんやて。

さつき話をしたニュートリノという質量が有るか無いか解らんほど小っちゃな素粒子の謎がとければ、宇宙の成りたちの解明に繋がる一大プロジェクトって訳や」と興奮気味に語る弟を頼もしく思うのです。そしてそのあと弟が、「その観測装置を造るのに集まった作業員たちの腹をくちくすのがに出来たんが、もつ料理やつたといひの。今じゃたんと店の店が並んで、全国から食べにくる程有名になつとる。兄にやまよ、近いうちに一緒に喰いに行くまいけ」と誘うのです。

今は国道になつて入江の道路に、へばりついてきた漁村には浅蜆や魚を焼いて食べさせる店の旗が靡いており、そこから段丘の間には何段にも、離れては連なつて村が在り、その村々の田畑は四季によつて鮮やかな彩りに被われ、プロ・アマ問わず沢山のカメラマンがシャッターを切りまくつています。

段丘のすぐ下の村には三角屋根の大・中・小の円錐形をした、珍しいガラス張りの建物が幾棟か並んでいます。何をしているところかはつきりは分かりませんが、突出して目立つ建物のなかにいる人間はこの辺りの者ではなく、都会暮らしで疲弊した青黒い顔の人たちが仕事をしているようでした。なかには年齢不詳の全身皺だらけの女たちが、亡霊のように両手をだらりと垂らして歩いているのを観て、恐れと共に強い関心をもちました。

優劣を付ければ、海岸沿いの漁村が一番で、それから上へ行くにつれて、次第に格が下がっていくのです。それでも**黒岩台地**の我が村とは別次元のまともな階層でした。我々は最下層の部類にも入らない、部外者層であつたのです。

**黒岩台地**の裂け目からは幾筋もの水が落ちていて、それが各村々を大きく囲いこむように蛇行する川になつて浜辺へ下つていきます。その**黒岩台地**には段々になつた田畑が切れた辺りから、広大な蕎麦畑が広がっており、特別旨い蕎麦として知られているのです。眼下に一望される蕎麦の白い花畑は何よりの目の保養になります。

今は全国から予約の客が海道沿いにある、北前船の

船主の屋敷を改築した蕎麦屋へ押しよせてくるようになってきたのでした。

蕎麦畑の上のほうにはだだっ広い曲がり竹の繁みが拡がり、それが切れた所から花崗岩のごつごつした巨石や岩山が所々に頭を出しています。そこから一本の細道がくねりながら高嶺のほうへ続いているのです。

これまで誰が、何人ほどその細道を登っていったものか分かりませんが、突端に聳える大きな鳥居か山門らしき物が遠望できるのでした。これまで部落の誰からもその山門の向こうに、何があるのか聞かされたことはありません。子供がそのことに触れると、「あれを潜った者は誰一人こっちへ戻れんのじゃ」とだけ教えられました。

零野の長は今日ならシャーマンと呼ばれる霊能者であり、村人は人間や動物など、死んだものをたちを葬ったり腑分けしたりする役に携わってきました。無論太古から明治維新前までは処刑人でもあり隠坊でもありました。つまり疎まれる役割は総て、我が部落で担ってきたのです。

ある日、郵便配達員が帽子からはみ出た白髪を靡かせてバイクでやってくるのが見えました。長の家の前

にでんと立っている、赤く丸い郵便ポストの横にある、村人の名札が貼られた箱のなかへ丁寧に確認してから郵便物を抛りこんでいきます。

「おい、兄にやまあ、今朝方、浜でリュウグウノツカイの上がとるがを見たぞお」と勢いこんで報告してくれました。

「おお、あんやとなあ」と右手を挙げて礼を云えば、さつと左手をあげて応え、バイクは忽ち白い煙をあげて遠離り、何段にも並んでいるら村のなかへ消えたり頭れたりしながら見えなくなっていました。

彼はひとつ野の家の五男坊で銀治郎と云い、あちこちのあまり知れていない情報を素早く届けてくれます。無類の本読みで、各分野の面白い書物を見せてくれるのでした。

最近の一推しは、腕立て伏せのできる魚の化石が発見されたということが、ニール・シュービンなる古生物学者の著した、「ヒトのなかの魚、魚のなかのヒト」という本のなかに、遺伝子と形態の不思議な関わり方として、興味深いことが書かれているとのことでした。ここは時に、最先端の世界の情報がもたらされることもあるのでした。

親しい隠坊の爺さんから、「お舍利は喉仏だけやのう

て、全身のあっちゃこっちゃにあるんやでえ」と教えられていて、そのなかに鯛の形をした骨があったのを覚えています。

いつの頃からか、何億年もの時間を生きた深海魚と懇ろになりたいという欲求が押さえがたくなっていたところでした。

遺伝子とは道具の一つであって、進化の過程で既にあるその道具をより使い勝手が良くなるようにと変えていく、要するに遣いまわすことによって新たな技術を遺伝子につけ足すというわけです。に因って、「腕立て伏せのできる魚」の化石が発見されたということにもなるのでした。魚の鰓とヒトの四肢を作るのに働いている遺伝子は同じで、「腕立て伏せのできる魚」の化石は、そのことを可視的な状態で示しているのだそうです。

海豚<sup>いるか</sup>などの場合はある時期陸に上がってきたらしいのですが、そのうちまた海へ戻ったというのです。つまり海豚は察したのだと想うのです。このまま手足が伸びてくる危うさに。それで賢くもユーターンしたのでしょうか。

ヒトは使わなくなった遺伝子を省いていって必要なものだけに絞ったがために一大異変に遭遇した時、そ

の危うさを一挙に露呈するのだそうです。それにひき換え、魚は原始的遺伝子の多様性を保持しつづけているのだそうです。魚のなかには、陸へ上がる予行演習のつもりで腕立て伏せをしていたのかと想われるものもあれば、海豚のようにさっさと新たな陸上生活に見切りをつけたものもいるらしいのですが、どちらも人間臭い感じを引きずっているのは大変興味深い気がします。ただ腕立て伏せをしているのは魚が今もいるとすれば、是非とも飼って見たいものであります。鰓ができた状態で海底を移動するのになんだかんだ動かしただけなのか、それとも近い将来陸に上がるために筋力をつけなくてはならないと感じてそうし始めたのか、できれば何回ぐらいできるまでになったのか知りたく、そして仲良く回数を競ってみたいものと妄想しているのではありません。深海の岩に貼りついている海綿体などはじつと動かずにいて、漂ってくるプランクトンなどを餌としており、省エネの最たるものだそうですが、外からの刺激を受けて何かと対応したものがエントロピーの増大を招く宿命を背負ったのだそうです。そして脳を肥大させる為にエネルギーを使ったのが哺乳類、つまりヒトに特化した現象となり、食べる為だけに特化

したのが恐竜たちだという説に繋がるらしいのです。

また、その延長で夢の世界が現実で、昼間動いている世界が夢ということにも為りえるのだそうです。自制心の乏しい人間はそんな夢の世界と現実社会とを勘違いして、数々の犯罪を犯していると想えば、切なくも可哀相な役回りを演じさせられている同朋とも云えるのかも知れません。いずれにしてもそのどちらも夢の世界と知れば、宙ぶらりんの逆さ吊りになって筆の先に墨を滲ませることで己を無化するしか手立てはないと想われます。その墨の雫が天空を舞っているのを夢見ながら……

銀五郎さんが撮ってきてくれた「竜宮の遣い」の写真を観れば、三メートルはあろうかと思われる珍魚で、浅瀬へ上がるのは地震の前ぶれと謂われておりますが、川の魚に喩えれば鯰のようなものでしょうか。写真では鱈のような感じですが、頭と胸からは赤い針金状のものが二、三本ずつ伸びており、丸くて太い輪っかになっていきます。銀五郎さんは、「深海魚にや旨いがおもるがやけど、こいつあ、まずかったわい。刺身にしてみたがやけど、みんながらして吐きだいてしもうたわい」と浜の者が食した感想を述べてくれました。それから分けてもらってきた切り身を、「干物にしたら、ち

よっこりやましかもしれん」と手わたしてくれたのです。わくわくしながら、その切り身を干して、恐れ多くも指の震えを押さえきれずに嚙つてみました。普通に美味しく食べられて感極まり、竜宮城からのお遣いを食するなど夢のような話で、実際今夜の夢のなかで乙姫様に逢えるかもしれないと秘かに期待したのですが、頭れたのは薄緑色のパックをした、直近の母親の顔でありました。

翌日の朝刊では、銀治郎さんは郵便屋ではなく漁師ということになっていて、「変な予兆ではなく、今年は大漁だ」との見出しになっていました。伝説などというものは、遙か昔から何らかのマスメディアが媒介となつて先導し増殖させてきたものですが、新しい民俗を創出していくなかで、その都度かつてのコアな部分が剥きだしになります。

それは恐怖とか驚愕とかいう、大いなる感情の発現する事象でもあります。

それから程なくして、今度は高岡市の雨晴海岸で体長一・三メートルのアカマンボウが網にかかったという報せが、こちらの珍魚好きを知っている知人から届きました。こちらのリュウグウノツカイの話聞いて、「ほうか、ほんで今回はこっちへ乙姫様が出張って来さっしやつ

たわけか」と、電話口でふむふむと頷いたのであります。こちらとあちらでは日本海と富山湾の違いはあるものの、能登半島の中程の表と裏で、姫様のほうが湾のなかへ産卵の為に来られたと知れば、愛しさも一入というものでした。すぐ車を飛ばして、のとはまなす海道で羽咋へ向かい、そこから山越えで氷見へと直行致しました。

己を、離れて打ちあげられた主従を媒介する遊行聖と為した訳であります。

ここから告夢にも叶う不思議な旅が始まることになったのです。夢に顕れたあの顔は母のものではなく、異界の番卒の。ペルソナだったようです。

初対面したアカマンボウは大柄なわりには玄妙な色気を漂わせて、水産会社の倉庫の巨大な水槽のなかで横たわっていました。

背鰭・胸鰭・腹鰭・尾鰭と繋がる背面と下腹面の稜線が、眩しく発した緋色と全体にひろがっている白い斑点が相俟って稟質を為し、そのふくよかな魚体には見惚れるばかりでした。そしてほのかに赤らんだ真ん丸な目には靈気が宿っていそうで、遠いところを見齣みはるかしている気配が感じられました。

彼女はこちらが到着する寸前まで、まだわずかに動

いていたらしいのですが、今は深海へ戻っていく昏い黄泉路を辿りだしたところだったのです。死の門前で弥増す耀いた目が潤んできていました。氷の塊がきらめく水槽に入れられた彼女は、先の遣いのように切り身にされることなく、我が到着を待っていてくれたのでした。かくなる上は是が非でも水先案内人の役を担って、彼女を我が漁村の浜へお連れし、懇ろに葬ってあげたかったのです。水産会社の保冷車に乗せられた彼女は一路能登路へと向かったのです。

小学生の頃に「ゾエア幼生」という珍妙な形のカニの嬰兒に遭遇ってから、長ずるにつれて次第に深海に棲む不気味な魚たちに惹かれていくようになりました。例えば黒い色の鰻や鮫鰾の腹と魁偉な顔を観るにつけ、人間存在に連なる深海の魚類への切なさとか悲しみといった勝手な感情が湧いてきたのです。極性の強いものは悪性も強いと云いますが、怪異な形状にはどこか自立の変数が潜んでいて、より一層の魁偉へと突然進展しそうな気がしたのです。

浜の道路から一つ上の国道沿いの邑に、一軒の料理茶屋があります。

五階建ての古びて痛んだ外壁へ彩色した、トタン板

を継ぎはぎに打ちつけた荒ら屋同然でしたが、看板だけは常に彩色も鮮やかに描きかえられ、字体そのものもクチナワか鰻を繋げたような、判別しかねる細い絵柄で出来ているのでした。室内は主人の奥さんが最低料理屋らしい体裁を保つよう、自分が草木染めで仕上げた暖簾やテーブルクロスやタペストリーなど、藍と浅黄の彩でとり繕っているのが、戸外のトタン板と面白い対比を為しています。

三階、四階、五階と上がるにつれて窄まっていき、天辺には物見が突きでており、どこか唐風の建物のようにも見えます。

物見の窓から見おろせば、朝夕の海面が赤々ときらめき、夜半には月の満ち欠けに応じて、銀波の帯が縦に何列にも並ぶのでした。

そこを住居兼アトリエとし、山の天辺から緩やかに蛇行しつつ、流れる川へ突きだすように屋形船に似た店を構える魯人なる料理人は絵師が本業で、金泥や銀を使用した極彩色の大和絵や渴筆なる墨絵を得意としているのでした。生きとし生けるものを画題とし、異化する手法を用いるのです。従って並みの形態をした生物は、彼の絵にはほとんど現れないのでした。

中国の古典に由来するデフォルメされた人物や樹木

は圧倒的な迫力で観る者に迫り驚嘆させるのです。その十種の墨色を和紙に擦りつける技法は彼が独自に開発したものであります。評するに、「あれはどうも、本物ではないぞ」と胡散臭そうな顔付きで云う者もいるにはいるのですが、高名な或る美術評論家に高い評価を受けてから、彼の絵は次第に中央画壇を賑わせていくようになりました。

富山は高岡市のお寺の三男坊に生まれた彼は、画業半分、魚料理店半分といった半漁人的生業をしていますが、店はほとんど女房殿に任せつきりで、営業日は年に三分の一もないのでした。

持ちこまれたアカマンボウを見て、「久しぶりの乙姫様じゃ、腕がなるわい」と恭しく両掌を合わせる魯人でありました。

驚いて目を丸くしているこちらの気持ちを宥めるように、「まあ、見とらっしゃい。捌くかわりに、実物以上の絵にして目を楽しまいてやつさかいにな」と大笑するのでした。

女将殿もにやにやしながら、「あんたかてほんまは、乙姫さま食べてみたいがやろ」と亭主の言い分に乗ってあおだかすのでした。

海の魚は眼の前の浜からあがり、川魚となれば、う

ねり流れくる河川から獲れる鮓や鰻などが客の膳に供されます。

斯くて、わが愛しの乙姫さまは魯人の手によって解体され、刺身となる運命となつたのであります。晦冥の淵から彷徨いでた身を宛然とはためかせるとなれば、生殺与奪の権を握つた魯人の手捌きに委ね殺して、生かしきるといふのも得心のいくことであり、こちらとしても魯人の包丁と絵筆により、虚と実の相対する状況が今まさに出現しようとしている瞬間に、震える身体を融かすとあれば、総てが十全たることになつたのです。

忽ち報せをうけた近郷・近在の有志たちがはせ参じてきました。女三人・男五人が加わり、計九人の会合に乙姫料理が添えられていきました。

特注の厚い和紙に向かいあつて、大小様々なる絵筆と墨を湛えた硯を用意し、魯人は彩管の技を存分に揮つたのであります。水槽のなかに浮かぶアカマンボウを見れば、まだ背鰭や腹鰭を儚げに揺らめかせて泳いでいるふうな錯覚に襲われるのです。海中を泳ぐ円やかな愛嬌ある舞い姿そのままに絵のモデルとなつて描かれるわけもなく、下方より渴筆の技法を以て迫りあがる氣勢で伸びていく魚影は、一匹の魚の姿であ

りながら深海より浮上していく一刻一刻の残像を重ねて余りあり、果ては無数の魚体の舞い姿に変じて海面へと上がっていくかに見えるのでした。それもやがては天空へ向けて墨の濃淡と擦れた極細の描線で描かれていくに、アカマンボウの海魚としての形ではなく、いつしか幼びた竜女の姿となり、連なつた沢山の竜女の列は次第にしなやかな竜体とも女体とも知れぬものに変じていくのでした。夕日を浴びた墨絵は色絵も及ばぬ上気した女の柔肌を顕して、瞬く間にたち現れたという印象でした。それほど魯人の筆遣いが巧みでスピーディだったということになるのです。

現実のアカマンボウは薄墨色の渴筆で輪郭をぼかされ、やや上向きに伸びた顔にはうっすらと紅が差されているように見えます。その紅色は擦れた墨が見る者の眼を欺き、異界へと誘つていく魯人の手業だったのです。

海中を漂う乙姫さまは舞いおどっているようにも、夢遊しているようにも見え、離れて泳ぐ鯛や鯉たちに守られている図柄でした。

一人ひとりの竜女の股間には今まさによきによきと生えてきたとでもいう感じで男根が描きこまれておりました。

変成男子の出現でした。和紙の両面にびたりと向きあい重なりあつた雌雄の裸形がありました。魯人の鋭い口笛とともに、皆が和紙の四辺を握つてはためかせ激しく揺らします。幾つもの交歓の図が踊り、大きなうねりとなつた竜体がまぐわう様は、水春画ならぬ天春画とでもいうべき晴れやかさと官能に満ちあふれております。

一同、大緘黙<sup>かんもく</sup>の声無き狂乱の態でありました。古来、女子のままでは成仏し難いとされたが為に、いったん男子になることによつて成仏できるなどと、女から男も生まれるというに何をか況んやであるが、魯人としては竜女と竜女変じた男子とを構合させるのは、いかにも理に適つたことで、天部におわす龍神への挨拶も兼ねて、まずはこれから始まる儀式の幕開けに相応しい情景でした。

水槽のなかのアカマンボウは今まさに成仏したかのよう、ふくよかな姿態を横たえて料理人の手にかかる瞬間を待ちわびているとあります。

黄泉路の峠ならぬ天部の門を潜らんとする彼女は夕惑いの面立ちのまま、八歳の竜女にしてここに我が愛すべき乙姫さまの最期の姿で現前しておつたのであります。水槽周りへ乙姫さまとの別れの挨拶を交わすべ

く、皆が参集いたします。

水槽は柙と化し、供花のかわりに氷の欠けらを淨めの塩よろしく散らかしてから合掌するなか、生臭ながら真宗の僧侶として朦朧となつた頭を振り振り、とにかく我が友人の僧侶は阿弥陀経を挙げきつたのでした。その後、仄暗く緋色<sup>ひいろ</sup>に耀く魚体の頭や胸や腹や尻尾をそれぞれが担ぐ格好で持ちあげ、百量の広間に設えられた檜の一枚板の上へ運びいれました。

すでに白装束に着替えた魯人が、檜の調理台の前でスタンバイしておりました。

この宴席に集まつたのは、男に身を褰<sup>やっ</sup>した女が、眩く光る白葱を鎗矢<sup>かぶるや</sup>に見立てて背中<sup>せなか</sup>の竹籠に刺し厳<sup>い</sup>つく、淡い緋色の地に二連の菖蒲が螺旋状に巻きあがった女物を纏い、髪は真つ赤に顔面白塗りのひよろりとした女に身を褰した男が、太く長い泥付きの牛蒡<sup>ごぼう</sup>を両脇に挟んでしなしなとやつてきて、鉄紺の無地の着流しにきりつと角帯を結んで角刈りにした怒り肩<sup>せり</sup>の中年女が、肩から下げた籠いっぱい三つ葉や芹や、そのほか地の野菜を入れてやつてくるのでした。

そして直ぐに元力士とわかる大男が巨体を左右に揺らしながら、両手に巨きな青首大根をぶら下げてやつてきます。



それから軟体動物の姿に變じた浄土真宗の和尚が、倒れると見えては何度でも途中から身を起こし、背中にした籠に手作りの濁酒が入った甕を忍ぶせ、いつ川へ落ちてでも不思議ではない足取りで現れます。

最後に大根布の菅原神社の宮司が、「お乳い、欲しいが、この子が可愛い……」とおし潰した聲を張りあげ、世にも稀なる美男顔を扇子ではたはた扇ぎつつやつて参ったのであります。

総ての常連客が揃った頃、店前の篝火が川面を染めて宴の始まりを告げ、うち沈んだ鈍色に川面がうねるなか宴えんたい 闌はらとなつていくのであります。

儀式に先立つて、宮司より厳かに祝詞があげられてから櫂の弊でお祓いがなされ、厳肅すぎる雰囲氣が醸しだされていきました。

横たえられたアカマンボウに一札した魯人は、日本刀よりはずんと刃幅の長い包丁を手にしたかと思ひ、間に、大きな頭を裂帛の気合いで切りおとしていました。と云つてもそれはそう見えただけで、実際には身をのりだして身構えてからぐいっと体重の総てをかけて押しきるように頭を落としていたのでした。力業のなせることながら、恐ろしいほどの切れあじでした。最期を見届けねばという思いで息を殺して見守るなか、立

てられた頭の真後ろから切断された瞬間には目を瞑つてしまつていたのでした。

つぶらなどこか愛嬌たつぷりだった目が遠い虚空に向かつて開かれた小さな窓になつていました。

魯人はその頭を台の端にすつくと立てます。彼女の顔は晴れやかで、目は澄みきつておりました。血糊一つ目につきません。

建前としては魚の身を食するわけではありません。

乙姫さまを食させて頂くのです。あえて天女を凌辱するに等しい行為なのだということを、一同が承知しておりました。

そして背骨から上下の身が剥がされ、切りわけられた身は素早く、魯人手製の特大舟に盛りつけられ、見事な舟盛料理と相成りました。誰一人聲を發する者はいません。

じつと魯人の手元を見詰め包丁の先を覗い、一切れひとときが細かくわけられた命の耀きであるのを確かめながら息を呑んでいるのであります。見事な舟盛りが完成した時、皆しばし声もなく、ただそんな厳かな変容をうち眺めておりました。

その最中いつの間にか、白髪の家書なる美しき中年女は襖四枚に、長歌と返歌一首を流れるような筆致で

認めておりました。

書家が「こはそも高橋連虫麻呂作と云われし、『水の江の浦の島子を詠める一首 扞せて短歌』にて候む」と紹介してから、その万葉集巻九にある歌詞を今様風の抑揚を付けて謡いだしたのに促されて、こちらとしてはその流れに乗じて、持参した樂琵琶にて伴奏させられたのでした。

「春の日の 霞める時に墨吉の 岸に出居て 釣船の……」と謡いだし、次は途中から宮司に振られ、そのあととはまた、途中から女ならぬ男に振られ、最後は魯人に振られ、「若かりし 膚も皺みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 気さへ絶えて 後ついに 命死にける 水の江の 浦の島子が 家地見ゆ」と真似て歌い次ぎ終え、まことにこの場にふさわしい趣向と相成りました。

その余韻嫋々たる間をひき手繰って首尾良く酒仙と仮した僧侶が、「常世辺に 住むべきものを 剣刀 己が心から おそやこの君 ナンマンガブ ナンマンガブ」と、返歌と念仏を唱えおりました。

「さあ、琵琶語り、おまんがまずもって箸をつけさっしやれ」

魯人の凜とした声に促され、思わずこれまで経験し

たことのない懼れに全身を戦かせ、手にした箸が齒の根が合わぬのと相俟つて小さな音を立てておりました。

リュウグウノツカイを食べた時とはあまりに様子が違い、心のうちから、懼れ多いという感情をぬぐい去ることができませんでした。その上、更に突きささる皆の眼差しに急かされ、食すべからずという禁制の狭間で身悶えしているうちに、ふっと自失状態になって意識が飛んでしまっていました。

しばし無の時間があって、気づいた時には口のなかというより脳のなかに甘やかな肉の味と香りが漂うておりました。幻想と錯覚が虹色の溜息となるばかりで、本当は味も香りも感じていなかったのかもしれませんが。

三保の松原で天女の羽衣をかき抱いた漁師の心持ちが我が事のように思えて、交歓の喜びと犯すべからざるものを犯したという自責の念とが渦を巻いていました。そんな状態のなか、僧侶の苦りきった語気が切っ先のように耳を突いてきました。

「なんじや、この不味いがわあ」それに呼応して一同、「うへっ、こりや何と酷い」という押しつぶした声とともに、皆一斉にぺっぺつと吐きだす音が起こりました。たちまち現実にはいき戻され、自分が旨いも不味いも感じられていないのだという事態に直面させられて

いたのです。

唯、魯人だけは平然と切り身を口に運んでいて、その無表情な顔からはこちらと同じ感覚で食しているのかどうかは分からず、恐る恐る、「どうも、儂にや味がわからんがやけんど……」と声をかけてみれば、「どうであれ、この切り身を喰うたもんは、乙姫さまを<sup>いたぶ</sup>賜ったも同然なんじゃ。殊の外、儂とおまんは罪深いがよ。地面に足がついとるは思ふなよ」と叫ぶ魯人の大声は天籟の如く座敷を聳して、集うた者すべてにこの一々が殊更なひと時であることを知らしめたのです。

「ほうかいねえ、わてはずっと昔から足が地についてらんけんどねえ。女に身を褻しておどり狂うてよりこの方、この世の裏影を流離ううちに、いつしか心も身体も軽うなつて、地に足つかぬが習性、胡蝶のように浮遊して踊るほのひと時に、過ぎこし方もこの先もただ瀑布となつて雪崩れこみ、ふわふわふわ漂うは、あんやとさんのおのが身にて、可笑しやなあ、おかしやなあ」と歌いつつ、振袖をドレス風に仕立て直した衣裳をひらつかせながら、この世の裏側の蒼穹を舞う如くに細い腰をくねらせ、女に身を褻したおとおんなは魯人の言い分を受けながすように、どちらの性でもない姿を垣間見せてくれるのです。また、男

に身を褻したおんなおとこは鉄紺の着流し姿も粹なものと、手振り身振りもきりりとして箸の使い方一つにしてからが男つぷり際立つばかりでした。

「おいらにや、不味いもんを喰らうがも修行の一つ。この身に因果を含めて肩で風切る渡世に似たり。不味いは旨い、旨い不味い、色即是空、空即是色、腹に入れば皆同じ、あへえあへえあへえ」と咳の出そうなわざとらしい笑い声が、切り身を嚥下するのに勢いを付けているふうな具合でありました。

「ほの調子や、たんと喰えや。一晚寝て目が醒めりや、男のシンボルがによつきによき。喰えよ、喰えつ。吐きだいた菊丸さんよ、おまさんもとんと喰わんかい。ふたなりぼぼが正真正銘のぼぼに成ろうがい」と魯人に発破をかけられ一同はその氣になつて、竜女の切り身を残らず平らげてしまったのです。

席を改めてから儀式の最後として、薄紅い大きな頭は火葬に見立てて炭火でこんがり焼かれ、目玉は魯人と吾輩とで、頬や頭部の身は他の者が突ついて成仏して頂いた次第でありました。

霊肉であるアカマンボウの身を食した後の酒宴となれば、天と地と海神の<sup>わたみ</sup>食材が各人の身体の中で溶解していくにつれて、その夜も更けわたりいつしか酒の精

は盃から盃へと進む石清水の時間となつていきました。夜も白みはじめるまで酒宴は続き次第には廁へ立つ者たちが排出する屎尿は仄かに匂いたつ芳香に満ちておりました。

皆がごろ寝のままこちらの奏でる楽琵琶の音に揺られて寝静まり目が醒めた頃には誰云うともなく「さあ、さあ、踊るまいか、踊らんまいけ」とうち揃い浜辺へ向かつて沢山の村人が一斉に踊り下つていくのでした。酒に酔うたのではなくこの世のものではない芳香に浮かれ浮かれて……。

フィリピンのコルデイラ山脈に、【天国への階段】と呼ばれている、山岳民族イフガオが耕す棚田がありまゝす。NHKの特別番組でその景色を観た時の驚きは、ずっと脳裏に焼きついたまま未だに離れておりません。ほとんど垂直にも見える絶壁に、何千・何万ともしれぬ棚田が山裾から山頂近くまで伸び、白っぽい鉢巻のような畦道にぐるぐる取りまかれています。その畦道は恐らく石か岩で一段ずつ崩れないようにせき止められているのだろうと想われます。大雨が降つても大崩れしない工夫が施されている、そんな山が数えきれぬほど繋がっているのです。ナレーシヨンの解説に

よれば、政府の役人や企業の連中に追いたてられてどんだん上へ上へと移動せざるを得なくなり、絶望的な苦難の末、斯くも見事な生存の証を山腹に刻みつけたというのです。

天空への階段とはよくぞ云つたもので、数多の山々を取りまく白く夥しい畦は天と地の狭間で、それ登れば白煙となつて消滅してしまふぎりぎりの場所というしか表現し得ぬものでした。生死の狭間で死を見詰めて生きのびようとする少数民族の決死の覚悟が単に螺旋階段ではなく、山膚を絞りあげて収獲を願う祈りの景が観る者に眩暈をもたらしめます。怨念と憤怒が渦巻く景色というよりは、荘厳な歌声が響きわたつて聞こえてくるようです。それは金銭や名声が蠢く地上の歓声と呼応する、レクイエムの澄みきつた声音でした。試されているのでしょうか。

群靴が響きミサイルや砲弾が飛びかい、弱者は無限地獄へ堕ち、その犠牲者たちの慟哭と涙の川を一党独裁の党首の号令下、操り人形と化した軍列が地響きをあげて渡ります。裏の世界が表へ出てきているロシアの侵攻と、自由を勝ちとるべく奮闘するウクライナの反撃もまた然るべき構図です。どこの国家であれ、独裁者が振りあげた矛が、己の盾に突きささる定めにな

ることは、歴史上自明のことです。

今世界のあちこちで、かつて日本の戦国時代でくり返されていたような、盗ったり盗られたりといった戦禍が飽くことなく続いています。攻めとつた領土はいずれ取りかえされてしまうのも世の常ですが、この景観は至って破壊的且つ生産的で、新たな価値を生みだします。それでも貨幣経済が有る限り、こうした民族の努力と誇りも終には紙幣が喰いちらかしてしまうのでしょうか。

我が部落も同じ定めの中かにありますが、大陸と違つた要素もあり、幾つかの大きなプレートとの衝突によつて出来た、こちらの**黒岩台地**の変貌は多面的で面白と思つています。そのわが**黒岩台地**がある段丘は何百万年とも知れぬ太古に、幾つかの海のプレートがぶつかつて迫りあがつた時にできたのだそうです。鋼鉄のように黒々としてどちらかと言えば、天然の要塞に見えます。

最初は福井の東尋坊から珠洲の狼煙辺りまで続いていたらしいのですが、なんらかの理由（そんなへんてこなことがある訳はないのですが）で永い年月の間に今の段丘だけが残し、後は悉く消滅して元の景に復し、その復した地形に街道が走り、人家が建ちならんで今

日の風景が出来あがつたというのです。

又、棚田や畑地が広がる今の斜面はどうやら、大昔、それだけ途方もない高さの大津波によつて剥ぎとられってしまったらしいとの伝承もあります。しかしそれだけ高い大津波が来たとあれば、日本海側全域に被害が出るはずなのに、高さばかりが伝承され、横への拡がりが謂われておりません。というより、我が**黒岩台地**まで迫る高い大津波など想像もできません。あらゆる樹木や村々をかつさらつてすべつとした山膚が剥きだしになるとは、時折見る夢のなかの中天まで立ちのぼる大津波の獐猛さがインプットされているだけなのかもしれません。無機物も有機物も等しなみにかき混ぜられた挙げ句、引き波に攫われてしまい、地球の一廓の表皮が顕わになった様子は、どことなくほっとする感じもすることはするのですが……。

ともあれ、この河岸段丘を天空より眺望すれば、神話の巨人が両端を持つて引きはがしたような、幅二十キロ・左右横五十キロにも及ぶ長方形の疵痕にも見えるのでした。

ある日の明け方、棚田の水巡りに出かけた時、畦の上におつ被さる姿勢で倒れている女の人を見つければ

た。遠くから見ても、それがあの硝子張りの三角形の建物に居る、老女の一人らしいと分かったのだした。

淡い水色の地にピンクの朝顔を散りばめた長袖の上着をあちこち皺だらけの身体につけて、棒状の両肢には泥の滲んだワイドパンツが貼りついており、素足は泥だらけでした。しゃがみ込んでそつと指の腹で息を窺ってみれば、微かに息遣いが感じられました。

上体を起こして長い乱れた髪を撫でていると、しばらく経ってから、彼女の目蓋がぴくりと動き、頭を自分から持ちあげようとしていました。

灰白色のくしゃくしゃした細面にぼつと赤らみまでもどり、両目蓋が開いて、覗きこんでいるこちらの顔を見あげてきました。

「あつ、どうしたのでしょうか、あたし……」と以外にも若々しい声が漏れました。か細い虫の音のような声でした。

肩口から背中へ回した右手を引きよせ、「どこからこの部落へ這入ってきたんですか、入口はどこも頑丈に柵がなされているはずですが……」と薄茶色の目玉を見詰めます。

女は、「何にもわかりません。何も覚えていません」と小さな声で云うのでした。

「そうですか。でも貴女の居場所は知っていますので、これから送っていきましょう」と云えば、「わたしは何処に住んでいるのか、貴男が知っているというのは嘘です。わたしはこんな辺鄙な所にいる人間ではありませんわ」と幾らか語気を強めてこちらへ眼を向けました。

「でも、貴女がこの下のほうの、三角形のガラスの建物にいろのを、以前見たことがあるですが……」と云うと、「それはわたしと違います。わたしは東京の自由が丘に暮らしている、日本女子大の学生です」と、罅だらけの唇を振るわせ、自分のことを喋りました。

「でも、貴女は自分のことを何も分からないと云ったではないですか」と返すと、「それはわたしがどうしてこんな所に居るのが分からないと云っただけです」と応じます。

「分かりました。それなら今夜はもう遅いので、このまま我が家へお連れしますので、一緒に参りましょう」と彼女の手をとり立ちあがらせました。すると彼女は素直にこちらの手をしっかりと握って立ちあがりました。熱を持ったような掌が貼りついてきます。

家の前に二人で立つと、玄関の外の灯りが点りました。奥から母親の影が現れて、心張り棒を外してくれ

ました。親仁が消える前に、櫓の枝を削って拵えていた物です。

それまでこの部落のどの家であろうと、心張り棒など掛ける習慣はなかったのです……。

戸を開けて左足を入れてから、後ろ手に女へ這入るように手招きします。人の気配が感じられなくて、ふり返れば、女の姿はありませんでした。戸を開けてくれた母親の姿も見えません。何度も頭を巡らせ探しても誰もいません。「可笑しいなあ」と呟き、思わずなかへ眼をやると、女が階段を上っていくのが見え、慌てて身体をなかへ入れ、心張り棒をかけて後を追えば、水の薄膜のような衣服のワイドパンツが垂れる度に、女の真っ白な三日月形の蹠あしうらが覗いています。吹きぬけていきます。しかし蹠の三日月が交互に、慕うように上へ上へと登っていくのを仰いでいる自分がいます。女はかつて知った足取りで、弟がいた部屋の戸を開けてさっさと這入っていきます。今はこちらが使っている部屋は、幼い双子の兄弟が勉強し遊んで眠った名残がまだあります。女は机の上を懐かしげな手付きでそつと撫でています。

「私の勉強机と良く似ていますこと……」そう云って彼女は椅子に腰かけました。薄地のブラウスがふわりと椅子を被い、小窓から這入ってくる月明かりに女の上体がレントゲン写真を見ている感じに透けて見えません。

「わたしの父は離岸流に捕まっておぼれ死んでしまいましたのよ」と頸椎を前のめりに屈めて悲しげに云いました。

「わたしを助けようとして、『少しずつ横へ泳いでこの流れから出なさい』と浮き輪を頸から通してくれましたのよ。そして父はわたしの代わりに力尽きて沈んでいった。『そうですか、そんな悲しいことがあったのですか。お父さんはきつとご自分が犠牲にならなければ貴女が助からない、と思われたのでしょうか』」

「父の考え方は二つに一つというものでしたの。二つともという判断は端からなかったと思っていますわ。でも思想的なものは難局に面した者にとっては無に等しいことですわ」と今度は凍とした声を響かせます。「いつでも正しい選択は直感的に、身体の奥底から発する信号に委ねられるんでしょうね」というこちららの応答に、彼女は、「わたしがここへ辿りついたのはその

証でしようね。母は父の後を追うように逝ってしまいましたわ」と頸椎がからんと鳴りました。

「どこの家庭にも起こり得る定めとは云え、貴女の不  
幸は唯一無二のものでしようね」と云うと、女は蒲団  
が敷かれたままの簡易ベッドに仰向けになりました。

ブラウスの木槿の花が蓮の葉の上をころがる水滴を  
あやすように揺れうごいています。

「どうしたの。早くいらして」と声がかかると同時に、  
あの熱い掌が立ちつくしているこちら手指に絡んでき  
ます。

「それは弟の役目でしよう」とやっとの思いで応えれ  
ば、「どちらでも構いませんことよ」と云うのでした。

双子ならどちらでも構わないというのは違うだろう  
と口に出かかったが、引きよせられて彼女の顔にこち  
らの顔が重なりました。

「二つに一つというのは、状況よっては先に出遭った  
ほうが正解なのよ。双子でも心が違うのは知っていま  
すわ。人間の主体に優先と云う状況が、今この貴男  
が唯一の人となったのよ」と云うなり、焼けどしそ  
うな熱い唇が下から突進してきたのです。

軟体動物に絡まれ口を吸われているような、異常な  
感覚に襲われ唇を引きはがそうと藻掻きます。すると

相手の唇が一瞬離れ、「こういうのは厭なんですか」と  
皺々の顔が覗きこんで言い含めるように話しかけてき  
ます。「あんまり一方的だったので、準備のしようがな  
くて……」と目玉をきよろつかせていると、それから  
は当然の成りゆきと云わんばかりに、「さあ、這入って  
きて下さい」と脱いだブラウスを丸めてベッドの下  
へ抛り投げました。いつの間にか裾ひろがりのワイド  
パンツが脱げて、かろうじて人の形とわかる蒴弱に似  
た、べろべろの体から水蒸気が立ちあがっています。

特に陰部と覚しき辺りから飛沫が迸っています。「早  
くう、さっさとお入りなさいな」と急ぎたてます。そ  
れでも逡巡していると、両手らしき物が伸びてきてこ  
ちらの一物を驚づかみにして一気に挿入させました。  
亀頭が熱湯を浴びて溶けたかと思いました。その痛烈  
な痛みがしばらく続いていたのですが、やがてべろべ  
ろ全体がゆれ動くにつれて痛がゆさからこれまで味わ  
ったことのない快感に変わっていったのです。そし  
て絶頂期に達した瞬間、自分の身体が二つ折れになっ  
た感じがして、ずぶずぶとユニコーンと覚しきべろべ  
ろ体の中へ吸いこまれていったのです。息ができな  
くなり失神しそうになった時、べろーんと軟体が反転  
して、膣から亀頭の尖端を突きだしたあと、産まれた



瞬間の嬰兒のように濡れそぼって跳びだしていました。「これで貴男はもうどこかの天文台へ雲隠れしてしまった弟さんと一緒になって生まれかわったのですよ」と新たな美しい姿の若い女になって語りかけてきました。

DNAとRNAとからなる遺伝子の変形が我等兄弟を二つに分ち、今また一つの生命体に戻して、兄であるこちらに二つの情報を有する実体へと転化したのです。

兄弟は謂わば長男という二重性を隠しもった次男とも、又その反対とも成りえたのです。「貴女は俺たち兄弟の、仮母胎に化したというわけですか……」と自嘲気味に返すと、「実体と申しあげたつもりですわ」と返されて、「実体とは何ですか」と問えば、「宇宙の法則ということですよ」と応えてくるのでした。話すのもう結構という気になってきて、「それでは、寝ましようか」と云えば、「そうね、わたしのおっぱいをしゃぶりながら、添い寝と洒落ましようね」と薄い静脈が何重ものリングになって透けて見える乳房を押しつけてきます。

顔がその乳房で塞がれ、ずいぶんと息がしにくくなり頭を振って嫌々をすれば、女の圧力がいくらか弱ま

ったので顔をずらすと、「さあ、早くお呑みなさいな」と乳房のほうから唇をまさぐってくるのでした。

仕方なく、そのまま赤い色の乳首を受けいれました。すると、とろりとした液体が自然に雪崩れこんできました。

その味わったことのない、ほろ苦いような酸味と塩気が混じった中性的な、味覚を惑わす乳はこの世の最後の晩餐に出されるシャンパンかと想えるのでした。

ついもう片方の乳房を握りしめると、薄くへらべつたい乳房はくしゃくしゃに潰れて、終いには紙屑のようにはばらばらと落ちてしまいました。

「もう、飲み方が下手なんだから、さあ、今度は弟さんになってしゃぶるのよ」と紙屑を拾いあつめて、命令口調で急かしあおだかすのでした。

すると忽ち、弟になった薄い唇がぐびぐびくとあせくらしい音を立てて吸えば、女は声を殺してエイのように全身をはためかせてのたうち回るのでした。

女はそれ以来、我が家にこちらの嫁として居ついたのでした。そして世にも稀なる秀麗な三姉妹を年毎に産みおとしてくれました。

「深海の海綿体は岩にへばりついて動かずに、漂い流れてくるプランクトンなどを捕食するばかりで、それ

は夢の世界を漂っているようなものの。それに比べて脳の神経シナプスが発達した魚や人間は動きまわって、リアルな世界を生きていると思っているのね。でも本当は現実世界と云われているのが夢の世界で、じつと動かぬ世界が現実なのかもしれないのよ。」と彼女は人間が最も下等な生物だと云わんばかりに詰るのでした。

「新たに深化した新皮質が脳の古皮質を被つてから、恐竜などは喰うためにだけそのエネルギーを使い、人間はほとんど快楽の為だけのセックスに活用してきたのよ。【粗野であっても、野卑であつてはならぬ】と新田次郎という作家さんが云つておられますわ。」

人間のセックスは**野卑**そのものと云うわけか。そうすると、我が女房殿は人間の醜悪さを消す目的で遣わされたのだろうか。その証が三人の子供たちなのか。

誰一人とつて見ても、あのかぐや姫を想わせる器量良しではないか。こちらとしては、戸惑うばかりです。

二人で夫婦らしくない会話をしていると、三人の姉妹たちが廊下へ出てきて、障子に三人三様の影を落とします。「あたしたちもお話に加わつてもよろしいかしら」と云うなり、障子戸の隙間から空気の層のように滑りこんできました。

「おかあさまは、お空のどの辺りからお出でになられたのかしら」と長女が母親の傍らへ寄りそつて尋ねるのでした。

「銀河系の遙か向こうのほうに、お馬さんの頭のような形をした処があつてね、そこから隕石に閉じこめられて地球へ落ちてきたのよ」

「それがわたしたちの大元なのですか」と次女が尋ねます。

「わたしたちというより、人間の源でしょうね」と三女が賢しらに云います。

「そうよ、わたしにも貴女たちにも返るべき場所はないのよね。かぐや姫のような訳にはいかないのよ」と母親が云います。

母親が衣服を脱いで裸になれば、三姉妹も裸になり、ウィッグらしい髪を外して、母娘四人がべろべろ体に戻つてしまします。

特大のべろべろ体と大中小の四体のべろべろ体が炉端の周辺を煙の如く漂います。それでも特大と大と中と小はそれぞれ形が違っています。三姉妹のべろべろ体はその時期がくるまでは変容せず、今はまだ破れ目一つありません。あくまでもこちらの要素がそれを阻止しているようなのです。

ということとは、こちらは娘たちを女としては扱われず、それは人間社会の厳然たる法則に叶っているという事になります。

その四人のべろべろ体が蕎麦の実を収穫して、石臼で挽くようになりました。母親がそれを捏ねて十割蕎麦を打ち、大工の莊子さんに頼んで、海沿いの北前船の船主の屋敷を改装して貰いました。その上質な蕎麦の味と、三姉妹の美貌が大評判となりました。

予約のみ一日限定百食の十割蕎麦は、一年以上先まで満席となっております。

こちらにも休む閑なく、製麺に追いまわされました。それと春先には曲がり筍やその他の山菜を採りにいくのがこちらの役わりでした。一番の名物は、金蕎麦と銀蕎麦と山菜天麩羅のセットでした。金蕎麦は蕎麦の上に文字通り金粉が、母親の手指の間から振りかけられ、銀蕎麦は娘たちの手指の先から銀粉が振りかけられるのです。そのきらきら耀く粉はどれも蝶々の粉で、お客たちの目を眩まし舌をとろかすのでした。

それにもう一つ、曲がり筍の竹藪が峯から峯へ飛びうつって、その跡には丸っこい大小の花崗岩がごろごろ点在し、その間に様々な大きさの水溜まりがある湿地帯が広がっており、一等大きな岩山を削りぬいた

岩宿が一軒あります。

弟がお盆の墓参りに帰ってきました。

その姿を見るなり、それまで一切家の外に出たことない、惚けたような母親が長く肩まで伸びた銀髪をふり乱し、「おおうおおう」と叫んで弟に抱きついていったのでした。弟は母親の髪と背を撫でながら、「長うなつとるなあ、儂が切つてやろうぞなあ」と白髪をさらさらと触つてやりました。

世界的に著名な宇宙物理学者・天文学者になっていた弟ですが、幼い頃と何の変わりもなく、白くなつた頭を掻きむしりながら、「あんにやまも、頭ん毛白うなつたのお」と笑いつつフケをとつ散らかすのでした。

母親は岩宿にやってくると、何かと弟の世話を焼きたがり、人が変わったように快活になつて幼い頃の兄弟を慈しんでいる風情でした。料理から酒の支度まで万端用意し、自分も一緒に川の字になつて寝たのでした。

「なあ、あんにあまよ。儂や、ここに籠もつて論文を書かして貰いたいんじゃないやが、ええかのお」と云いました。

「どんぐらいの日数かいのお。別になんぼでもおつた

らええがじゃけんども……」

「こん宿なら、あんにやまの嫁さんやら子ども共に迷惑かけんですんさけなあ」とからから笑うのでした。

岩宿の玄関入口の上には、【天宿】と揮毫された看板が掛けられています。そして宿の入口の左右に、「べろーん保育園」・「べろーん幼稚園」と書かれた縦看板が打ちつけられておりました。

幾部屋にも仕切られた大部屋・小部屋には、哺乳瓶を啜えた嬰兒から二、三歳児の子らが這いまわり跳びまわり、きやあきやあ叫び声が木霊して喧しいこと限りなしです。年長さんになるまで、極老のお婆さんから十歳区切りに婆さんからお婆さん、そして若い女の保育士たちがその児等の面倒を看ているのです。

児等は皆、女の児でありました。

ここで想いだして調べて見ると、井伏鱒二の掌編・【へんろう宿】のなかに、「男の子は太うなつて縮尻しゅくじりますきに、親を追ひかけて行て返します。もしも親の行方が知れんと役所へとどけてしまひます。」という会話文がありました。女の子は育てて貰った恩返しに、初めから後家のつもりで嫁にもいかず、男との情交もなく、その宿屋に奉公するというのであります。

ということは捨て子の身とあれば、後に子孫を残す

謂われは端から無いというわけで、万が一過ちを犯して児を宿したとしても、すぐに墮ろす手だてを講じられ、我が身は初手から無塵なのだということらしいのです。

保育園があれば、幼稚園もあるのが通例です。古ぼけたボンネットバスの黄色い車体の両面には、「べろーん保育園」と「べろーん幼稚園」の名称がそれぞれ書かれてあります。今年七歳になった幼稚園児たちはもう少し奥へ這入った大部屋のなかで、机に齧りつく格好で必死に書きとりの勉強中でした。

弟が、「儂に運転さしてくたんせえ。黙ってあんにやまと代わったところでだれにも気づかれんて」と云うので、「おまん、免許あるんかい」と問えば、「わしのは国際免許で、こんな子供ん共の、五十人や百人ぐらい、おちやのこさいさいじや」とにんまり笑うたのであります。

丸っこい大小の石灰岩が並んでいる平地まで登れば、遠く麓から望まれた門らしきものが、巨大な木造の山門であることが知れました。何百年も経っているかと想われる山門は、雨晒しのなかにあっても、まだ朽ちている箇所は見あたりませんでした。

屋根の黒瓦だけは少しずれたり欠けたりしている処

はありましたが、今すぐに修理しなければならぬというほどではないようです。両脇には定番の如くに、仁王像が憤怒の顔をこちらへ向けています。その表情は風雨に叩かれてなんぼか柔になり、口尻が垂れていて自嘲しているようにも見えます。自宅から持参した長い細竹の葉っぱでほこりを払い、太い柱をタオルで拭き、山門の前を竹箒で掃きました。それは我が零家の古来より定められてきた役割で、月に一度の神事に似た行事とでもいうべきものでした。

親仁はその役に従って何十回目かの掃除に出かけた切り、忽然と行方不明になってしまいました。在所の者たちは、「どうやら、あの門を潜ってしまわれたらしいぞ」と噂しあっています。どういう理由で行方知れずになるかと、その役を引き継ぐ者はちゃんとしているのですが、何と云っても親仁の葬殮の予定が立ちません。娑婆ように、何年何十年経ったら亡くなったと、決められているわけではないので、三回忌か、七回忌か、十三回忌か、二十五回忌か、兔に角じつと待ちながら、現れるかどうか分からない親仁を、少なくとも五十回忌まではこのままの状態が続くのだと想われます。いくら親仁の心底を慮っても、何故消えたのか、どこへ隠れたのか、想いさだめることはできません。

夜になると、満点の星々に負けじとばかり、数万数十万のひめ蛩が海山一面に群舞いたします。蛩たちは石灰岩の炭酸カルシウムを摂りに来る蝸牛の幼虫を食べて増殖するのです。この夜半の光景はわがフン族の代々の長たる者か、いずれその長になる長男だけが眺められる特権であります。

それから半ば呆然自失といった態で、山門をくぐって行ったきり二度ともどつてはこなかったヒトたちの、この世の見納めになる麗しき夜景でもあったのです。

弟は天と山の腹で繰りひろげられ光りのショーに目をすばめながら、「いつか、ここに世界一の天体望遠鏡を造って、宇宙の謎に迫ってみたいもんじゃのお」と両手を組み、それからゆっくり両の掌を交互に握ってぽきぽきと鳴らしました。

「あの嫁はおまんの嫁でもあり、娘たちはおまんの娘たちでもあるんじや。二人して仲ように、ここで先祖返りを楽しもうではないか」と云って、兄弟でしつかと抱きあいました。それからこちらの持参した樂琵琶を弟が抱え、いつも弟が掻きならしてきたリユートをこちらが持ち、それぞれが初めて手にする兄弟楽器の奏でる音は、涼風に煽られて天空へとたち昇っていきます。

「親仁よ。聴いとおつてくれなあ」と心の中で念じつつも、やがてその想念も消え、二人して無心に合奏致しました。

もう人間の放つ臭氣の欠けらもなく、天人たちの放つ芳しい香華だけが天蓋の内側をたゆたい、更にその外側へとオーロラのように反射していくのでした。

休憩の合間に盃を交わしつつ、互いの樂器を奏したり合奏したりしているうちに東雲の空白み、朝焼けの赫と濃い紫の彩棚引く雲の峯に、五百石の北前船らしいのが帆を満杯にして浮かんでおりました。

了

あとがき

★驚きの新事実。なんと我が「繫」の作品配列が到着順だったとは！ 思いもよらぬ事で現に先の四号など見事な作品の配置だな、と内心編集長村井氏の手腕に感心していたのだ。

しかし考えてみれば同じ「志」を持って集まった仲間間の作品。その優劣をもつて、やれ巻頭だろうだ、という事がそれ程の意義を持つのだろうか。（しかし以前の私はその事にかなり固執していた。又互いに競い合う、という点ではそれなりの効果はあるうかと思うが）個人の小説に対する心情や姿勢というものは作品の出来不出来を遥かに超えて尊重しなければならぬのではなからうか。そういった事を思えば到着順に、という発想は画期的な（一面効率的要素も含めて）事ではなからうか。編集長村井氏の、どこか人の意表をつく構成部分を持つ内容と読後にふと考えさせられる作品とどこかに似たものを感じさせる。

実に愉快だ！

（労）

★寺本親平さん、全国同人雑誌作品優秀賞並びにまほろば賞五十嵐勉賞受賞おめでとうございます。まほろば賞に関しては、先に同じく同人の飯田芳さんが最優秀賞を受賞しており、それに続く形になったわけですが、これで創刊五号を迎えたばかりのまだ年端もいかないような我が「繫」が、二人も文学賞受賞者を持つこととなりました。そのことによって他の同人誌とひけを取らない、大変格式高く、榮譽のあるものになったと言えるのではないでしょうか。願わくば、同じ同人として末席を汚している私のような輩も、今度はお二方の御威光の助力をお借りして、脚光を浴びさせてもらいたいものだと思います。そのためにも私は負けじとこれからも作品を書き続けていきたいです。

（内角）

★波瀾万丈、大団円

この作品は二〇一一年五月一日発行の浜松の同人雑誌『彩雲』に「天竺の西郷どん」のタイトルで掲載されたものです。今回大幅に改作しました。

『彩雲』に発表したとき、「なまかじりの仏教知識が鼻につく」「期待して読んだのに結末にがっかりして損

した気分」等々批判されましたので、書き改めようと思っております。しかしまたしても時間に猶予なく、夏休み遊び呆けていたせいですが、しまいまで書き上げることができず前編だけということにさせていただきました。書いていてとても楽しかったです。波瀾万丈、大団円を想像して。頭の中にあるときは楽しく、わくわくするのですが、書くことはとても大変だと感じます。なんでもかいて書いていいのですけれどね。

(池田)

★世の中で一番チンケな賞を創設してみたらと考えました。合評会で同人が一人一票の権利を持つてその号の最優秀作品を決めるのです。評価票が一番多かった同人が懇親会での飲食費が無料になるというものです。ルールはこんなのでしょうか。自分は自分に投票できない。合評会に出席した部外者にも投票権を与える。同票になったら決戦投票をする。

「繫」第〇号以降の名称候補はこんなものです。内輪で一番評価されたで賞。困難に耐えて最後まで頑張ったで賞。将来的に残る作品で賞。今後も期待がもてるで賞。次もトップをめざしま賞。先人をきつてやりがんばりま賞。メジャーデビューが近いで賞。いい

だろう・いいで賞。

やつぱりふざけ過ぎかな？

こないないかげんな賞はやめま賞。

(村井)

★筆力が足りないのであろう。原稿五〜六枚で話が止まってしまい書き直す。

今回も一人の話に絞るつもりが、五枚で行き詰まった。二人にしても十枚余りだ。

初めて小説を書いた二年前、原稿三枚の小話を十話につないで短編にした。

何も浮かばないとき、私は必ずこの十話に引き返し、小さな糸口を見つけては、また書き始める。人生の深淵は、まだ何一つ見えてこない。

(藤野)

★二十歳頃、新し物好きを気取って、フランスの評論家であり作家である、モーリス・ブランショを読んでいた。『謎の男トマ』と『アミナダブ』は読んでみて、全く理解不可能ということと終わった気がする。今回六十年ぶりに再読して、随分と印象が違っていた。理



解できないのはほぼ同じとして、若かった時の自分にも、八十路にかかった今の自分にも、不可視の文体であることがはっきりと解った。つまり書くという行為の本当の意味が分からないまま、八十年の歳月が流れさってしまったという事実が目の前にあるだけだった。ブランショは物を無化していく言葉を列ねて物を書いた。謂わば死の側で生きながら創作したと云っても良いのではないか。そんな究極の場所で自分が創作してきたかと云えばとんでもない話で、死と生の境界線にすら立ったことも無い気がする。頭で処理したつもりばかりで……。

(寺本)

★後書きともなれば、ついつい書いたものに対して言い訳をしてしまう。そんな意味で苦手の、あまり好きではない場所だ。

しかし、そんなふうに思っているのは、特に今回はいけない。復活したのだ。繋がれたのだ。『渤海』の時代の人数がほぼ復活し、古いメンバーもほとんどが顔を見られるようになったのだ。

すばらしい。新しいメンバーも入って来ている。ありがたい、うれしいことだ。同人誌は多くの同人にと

っても最高の場であるはずだ。しかも、秘密の場であるはずだ。

『渤海』に入った頃のことを思い出す。自分の思っていること、心の中に積み上げていたことを、ほとんど気にせず話せたのだ。大きな喜びがやってきた。そして、なんとと言っても野島さんの家での食事を伴った集まりだ。ほんとうに、自分の人生の中でのとても大切なシーン、場面だった。それがまた、これから復活するのだ……

(深井)

執筆同人（五十音順）

飯田 労

金沢市神宮寺

池田 良治

金沢市辰巳町

内角 秀人

富山市石倉町

中井方

寺本 親平

金沢市弥勒町

深井 了

高岡市扇町

関口方

藤野 繁

富山市婦中町

むらい はくどう

富山市馬瀬口 村井方

協賛（カット・一部協力）

後藤 必

京都市伏見区向島丸町

## 新同人を募集しています

当誌は創作を主として掲載します。  
新同人として参加をご希望の方は、  
編集発行人までご連絡ください。

## 編集ボランティアを募集しています

編集・レイアウト・製本までのノーハウを伝授します。  
興味のある方は編集発行人までご連絡ください。

### 繫 第五号

発行日 二〇二三年 一〇月一〇日

編集発行人 村井博道

連絡所 〒930-1301

富山市馬瀬口三二〇 村井方

TEL 076-483-0402

ホームページ・アドレス

<http://tunagul23.starfree.jp/>

印刷所 (有) スズトウシャドウ印刷

頒価五〇〇円